

---

## （銀魂。）隻眼の吸血鬼とある地味な少年との出会いのその後。

Natu

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

（銀魂。）隻眼の吸血鬼とある地味な少年との出会いのその後。

### 【Zコード】

Z8922

### 【作者名】

Natū

### 【あらすじ】

此方は、短編の隻眼の吸血鬼とある地味な少年との出会いの続きみたいなものです。尚、此方は初Bし連載と言う事なので・・もし苦手な方はお退き頂く事をお勧め致します。と同時に銀魂第一作品等の自分のオリキャラも何人か出てくる予定でもあります。この小説では一応高山がメインとなりますが、ごく稀にですが高銀等にもなる可能性もございますその辺もご理解とご了承のほどよろしくお願い致します。設定は・・短編のまま変わらないと思います。この注意書きを読んでからの苦情等は他連載同様にその前もですが一

切お受けいたしませんのでそちらも「理解」と「了承」のほど重ねてお願い致します。また、複数漫画の「カラボ?」と言う事もこの小説ではあり得ますのでその辺もご理解とご了承のほどを重ねて重ねて大変に申し訳ありませんが宜しくお願ひ致します。その為あえて（銀魂。）とさせていただきました。

オリ要素満載？です。

大丈夫と感じた方は本編へどうぞ。

以下はあらすじみたいなものです。

とある日の東京のある街で夜にある事件に巻き込まれた特殊ダムピールである山崎退

彼はぼろぼろで瀕死つて言つても良い状態に見舞われた。だが、其処に現れたのが

日本吸血鬼界の帝王エンペラーである純血の高杉晋助。彼と出会い山崎は特殊ダムピールから吸血鬼へと変貌し彼の運命も変わる事となる。同時に其れはもう1人の特殊ダムピールの運命として嘗て炎龍と呼ばれ高杉の黒猫と呼ばれた女橋夏美の運命もすこしづつだが変わつて行こうとした。此れは其れの序章？にすぎなかつた。

・ その仲間たちも。

## 注意書き。（必読）（前書き）

短編の続きみたいなものです。

注意書き等載せておきました。

ユーモアの所にも書かせて頂きましたが私の小説は手始めに必ずお手数ですが必読の方をご覧頂く様にお願いしております。オリ設定が基本的に多いものですから（苦笑；；）原作派の方にもご理解いただきたく思いまして。

その辺もご理解どう了承のほど重ねてお願い致します。

## 注意書き。（必読）

此方は短編の隻眼の吸血鬼とある地味な少年の出会いの続編見たいなものとなる予定です。尚、設定は短編とほぼ変わりません。ので、もしかしたら・・短編同様な分も出てくるかもしれません。その辺はその辺でご理解どうぞ承の程よりじくお願ひ致します。尚基本的にB・Lで一応嵩山と言つ設定です。

‘同性愛’が出てくる可能性もござりますので（流石に裏はないと思ひ）ので年齢制限は致しません

が・・一応念の為R・1・5設定にはさせていただく予定です。此方もゆつくりと時間かけて更新していきたいと思つております。残酷シーン等ありの予定です。）

キーワードにも（10字以内の為念の為1・5禁等）させて頂きました。尚一応ですから。

そんなにも悪い風にはならないと思います。ですが・・べビектで大変に申し訳ないですが苦手な方は

即座にお退き頂く事をお勧め致します。苦情批評等は他連載同様一切お受けいたしませんのでご理解どうぞ承のほどよりじくお願ひ致します。

この必読を読んでいただいた後に自分は大丈夫だと思われた方はどうぞ本編の方へ。

Nat uの銀魂吸血鬼世界をお楽しみ頂ければと思います。

注意書き（必読）完。

## 注意書き。 (必読) (後書き)

時間がかかってもゆっくりじき長に頑張って更新していくたいと思つております。

他連載同様温かな目で見守つて頂ければ幸いです。

## 第1夜。プロローグ。（前書き）

吸血異世界設定なので… 一応章ではなく、夜、に此処では変更させて頂きたいと思います。その理由は… なんとなくです（笑・）すみません。

もしかしたら変更するかもしません。じつは承のほど。尚注意書きに書きそびれましたがひょっとしたら違う漫画からのキャラもすべてではないですが出る予定です

その辺もご理解どう了承のほどよろしくお願い致します。

短編とほぼ似た様な感じです。其れではどうぞ…。

## 第1夜。プロローグ。

此処は、東京のとある街。

で、静かな夜だが・・・此処である事件が発生した。

そして・・・路地裏。

あたりから男共の声で「クソオオ！！！あの半人前め！！何処に行きやがつた！？」

「オイ！！奴はかなりの手覆いだ！！そんな遠くに行つていはないはずだ！！さがせ！！」

「オウよ！！」そして男共は闇の中へと走りさつて行つた。

と同時に路地裏で壁側にもつれこむように倒れ込んだ1人の青年。

ダムペールの山崎退だ。

彼は、ぼぼつて言つて良いほど瀕死の状態だった。

退「ゴホゴホと咳払いをし血を吐き出し息を切らして」・・・ハハ。こ  
つ、こいつはヤバいな。」

「お、俺・・・」の場で死ぬのかな?あっけね。

もう、少し生きていたかった。

そう咳き眼を開じようとしただが・・。

「ククク。オイオイ。『こんな所でくたばつちまつのかア』?」

と低い男の声がした。

その男は黒紫のスーツを着て黒のシャツを身にまといて靴は金色の靴を履いていた。

うすら黒がかかつた紫の短髪に左耳には黒の眼帯を施してある。

右田は褐色をしていた。

そして「うかうか」ではあるがその男を見て「……だ、誰?」

誰なんだ？ 一体この男は（ヒト）は。

するとその男は山崎の間にしゃがみ込み右目で山崎を見て「ヤリと笑い行き成り「死にたくねエだろ、?」「生きてエだろ、?」

山崎はその声を聞きゆっくりながら頷いた。

そして男はククと笑いながら山崎を抱きしめて「俺アがお前の願いを叶えてやるよ。」

山崎は一瞬驚き男に眼をやつて・・・。

な、何で俺の名を知つてんだ?」この男は・・・!?

何で?と相変わらず疑問視していた。

だが、男はそんな山崎をよそに「あア・・・まだ、自己紹介がまだだつたな。俺ア高杉晋助つつもんだ。よろしくなア。」

山崎再び驚いて・・・。

なーーた、高杉って・・・。

まさかあの日本吸血鬼界の帝王エンペラーの高杉晋助！？

な・・・何で？？？

だが、疑問持ち続けている山崎をさらによそにしてニヤリと笑い耳元で「俺アがお前エを、拾つてやるよ、退。」そう囁いた次の瞬間高杉は山崎の首筋に顔うづめ下で舐めた。

そして・・・。

ブツリと高杉の牙が山崎の首筋に打たれた。

ズズズ。ズズズ。と山崎の血が高杉に吸われる音がする。

山崎心の中で。。。

あア・・・・此れでもう、今の俺、とも、別れなんだな。

特殊ダムピールは吸血鬼に咬み付かると自身がダムピールから吸血鬼化するのを知っていた。

山崎はフッと氣を失った。

と同時に高杉も牙を抜き手で口についてた山崎の血を拭いクククと笑い山崎の髪を撫でて「・・・今日からお前エの、主、はこの俺だア。‘一生ついてきてもらひづエ’、?退。」そう言い山崎を抱え闇へと消えて行つた。

一方、その様子を1人の男が見ていた。

銀髪の男で赤い目をしていた。名は坂田銀時。

彼も山崎と同じ特殊ダムピールである。

実は、彼も高杉を始め他の純血等に狙われている。

黒のスースと赤いシャツを着ていた。

銀時頭かきながら「・・やれやれ。ある意味やベエ事になつちましたなア。ジミーの奴が高杉につれて行かれちまつた。か。俺アも何か対策ねらねエといけねエな。」そう呴きその場を後にした。

すると入れ替わるかのように黒の短髪で全身黒ずくめの男がタバコを吸いながらニヤリと笑い「、やつと見つけたぜ？、「俺の銀時。」と呴いた。この男も高杉と同じく純血であり名を土方十四郎。高杉の知り合いでもある。と同時に銀時を何故か知らないが?とでも気に入っていた。

噂では日本マフィアのボスとの噂も。。

土方クと笑い「、今度こそ逃がしあしないよ。絶対になア」。

一方、その裏では1人の女がひつそりとその様子を見ていた。

そして焦りながら「・・・オイオイ。何で、兄貴、が此処にいんのさ？日本離れていたんじゃアなかつたのかよ。」と鄙悪そうに小声で言った。

その女の名は橘夏美。（彼女は人間）土方の妹分であり、幼少の頃高杉に懐いてよく可愛がられた。高杉曰く、俺の黒猫、だそうだ。何故かは知らない。（彼女の詳しい設定は基本的に銀魂連載とは変わりません。（今の所）因みに闇の始末屋炎龍の過去持ちそして、左肩と首には蝶の小さいが刺青が施されてある。

その施し主は高杉である。現在は中立派組織ワカバリーダー兼幹部で紅のリーダー兼幹部もある。

夏美はチラと見てその場をすばやく去った。

土方も其れに気づいたのかチラと見てククと笑い「・・・・夏美か。

「

まさか、あいつも此処に来ていたとはな。

高杉の奴にでも教えてやろうか。

そして土方空を見てタバコを吸いながら「・・・今夜は『デケエ月』が  
出でるな。良い夜だ。『獲物』と序に、俺の妹分、も見つける事が  
出来たんだからなア。」

俺からもそして高杉からも、一度と逃げ切ると思つなよ、？夏美。

そう心の中で眩き不敵な笑みを浮かべ闇の中へと去つて行つた。

一方、夏美は愛車である黒のベンツ221Bを運転していた。

夏美顔を再びしかめてタバコに火を灯しながら「・・・まいったね。  
兄貴が居たとは。本当に、まいったよ。」

「」のまま私しゃアは逃げ切れるのかな?

とも呟いていた。

と同時に反対車線に1台の黒のポルシェが止まっていた。

すると運転席の窓が開き銀色の長髪で黒の帽子をかぶった男が夏美の愛車を見てニヤリと笑い

「・・・まさかな。」と呟いた。

第1夜。プロローグ完。

## 第1夜。プロローグ。（後書き）

今章も御付き合いで下さるまして有難うござります。

注意書きに書きそびれました。違う漫画キャラは某名探偵の悪役の「ヒルな男です。（笑：）」其れは次章追々明らかにしていきたいと思います。

設定は彼も吸血鬼設定です。

其れでは次回予告風をどうぞ（笑）

夏美の愛車を見かけた銀髪の男。

すると助手席に座っていた青年がその男に「なア・・・あの帝王の黒猫で嘗てアンタと一時つるんでいた女ってあの女？」<sup>エンペラー</sup>

その男はクククと笑い「あア。多分そうだ。あいつは黒のベンツ221Bをあの頃も乗っていたからな。」と同時に「あの女の車だつてこと前から調べはついていた。あの車を見た時にはもう俺は小型カメラ付き盗聴器をしかけてあつたのさ。」

青年は「ふうん。そつか。で？何？、とつ捕まえんのか、？」

「当たり前だろ？俺がみすみす逃がすとでも思つているのか？」と再び男は「やりと笑い青年を見て言つた。

青年はクスと笑い「いや。‘全然’。」そう言ひ男は満足したかの様に黒のポルシェを走らせた。

「第2夜。夏美を陰で見つめいた謎の男2人組。そして・・山崎吸血鬼としての目覚め。」「次章もどうぞよろしくな。」

以上です。ひょっとしたら後半にでも山崎さんが出てくるかもしません。

其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

第2夜 夏美を陰で見つめいた謎の男2人組。そして・・山崎吸血鬼としての日

今章は、某有名な探偵シリーズのキャラ2人が出できます。

ジンの兄貴様と新一君です。新一君はジンの兄貴様のお気に入りの設定です（笑）

またそれ以外の漫画のキャラも。

苦手な方はお読みにならない事をお勧め致します。  
尚、後半には高杉さんと山崎さん出る予定です。

第2夜 夏美を陰で見つめいた謎の男2人組。そして・・山崎吸血鬼としての日

夏美の愛車を見かけた銀髪の男。

すると助手席に座っていた青年がその男に「なア・・あの帝王のエンペラー黒猫で嘗てアンタと一時つるんでいた女ってあの女?」

その男はクククと笑い「あア。多分そうだ。あいつは黒のベンツ221Bをあの頃も乗つていたからな。」と同時に「あの女の車だつてこと前から調べはついていた。あの車を見た時にはもう俺は小型カメラ付き盗聴器をしかけてあつたのさ。」

青年は「ふうん。そうか。で?何? とつ捕まえんのか?」

「当たり前だろ?俺がみすみす逃がすとでも思つているのか?」と再び男はニヤリと笑い青年を見て言つた。

青年はクスと笑い「いや。‘全然’。」そう言い男は満足したかの様に黒のポルシェを走らせた。

この男の名はジン。高杉同様純血で・・最も危険な吸血鬼として日本吸血鬼界や吸血鬼ハンター側からも標的?されている。尚隣にいるのは有名な高校生探偵工藤新一なのだが・・ある事件をきっかけ?に

ジンに気に入られ側にいる。ちなみに彼は夏美同様人間である。

一方、夏美はワカバの隠れ家戻っていた。

電気をつけた後「！！！」辺りを驚いた顔で見渡した。

そう家具とか少しずれているのだ。

夏美「・・・・誰かに嗅ぎつけられたね。」

いつたい誰が・・・・？

まさか？晋助様？それとも兄貴？？そうでなかつたら・・・・ジン？

？？？？

ソファーに座り込んで頭を抱えた。

すると夏美の携帯が鳴った。

ディスプレイを確認すると、セラス、となっていた。

夏美通話ボタンを押し「・・私しゃアだ。」

すると女の声で『あ、夏美さんですか？私は。セラスです。』

夏美苦笑いをし「お前さんからかけてくるなんて珍しいね。どつた  
？」

セラス・ヴィクトリアヘルシング所属のドラキューラ。夏美の知  
り合い。

セラス『・・・お仕事、です。至急日本支部に来ていただけません  
か?』

夏美「・・・わあったよ。今行くわ。」

そう言い携帯を切った。

すると一匹の派手目な蝶が夏美の隠れ家に入つて來た。

夏美は其れを見て一瞬体が固まつた。

そして小声で「・・・晋助様。」と呟いた。

と同時に夏美は携帯を取り出し電話をかけた「あ・・・相棒か？私  
しゃアだ。チイと悪いが

ヘルシングの日本支部に来ててくれねえか？私しゃアもこれから行く  
からよ。おう！すまないね！！

じゃ・・・後で。」そして携帯を切り閉じた。

と続け様に「さてと・・・ちょっとくら行つて来ますか。」そう言い  
またタバコに火を灯しながら隠れ家を後にして行つた。

一方、派手めな蝶は夏美の隠れ家を後にして主の下へと戻つて行つ  
た。

此処は東京にあるとあるホテル。

此處は日本吸血鬼界が管轄するホテルの一つである。

のとある部屋。高杉が窓を見て夜の風景を楽しんでいた。

そしていつの間にか夏美を監視していたのかククと笑い「・・・やつと見つけたゼエ？俺の黒猫ちゃんよオ。」土方からの情報として・・俺の監視蝶はどうやら間違つていなかつた様だなア。」

そして部屋にあるキングダブルベットに寝かされている山崎の側に歩きだした。

と同時に山崎が目覚めた。

高杉ククと笑い「よオ。退。せつとお目覚めかー？」

山崎は体を起し「・・・高杉さん。」そう言い高杉の側にすり寄つて來た。

高杉はそんな様子を見てとても満足そうに山崎の頭をなでた。

と同時に山崎「・・・あの。起きたそつそつ申し訳ないんですが・・・  
・俺喉乾いちゃつてもし高杉さんか

良ければ高杉さんの血欲しいんです。」と申し訳なさそうに言った。

高杉其れを聞いて一ヤリと笑い「あア・・・構わねエよ。」そう言  
い山崎の顔を自分の首筋に寄せて

耳元で「ほら・・飲みなア。お前エが満足するまでなア。」と同時  
に山崎は高杉の首筋を舐め牙を立てて

血を飲み始めた。

第2夜。夏美を陰で見つめいた謎の男2人組。そして・・山崎吸血  
鬼としての田覚め完。

第2夜。夏美を陰で見つめいた謎の男2人組。そして・・山崎吸血鬼としての日

今章も無事に更新完了致しました。

つて結構長丁場でした（笑・・・）

其れではほぼ毎回ですがグタグタ予告をビリビリ。

此処はヘルシング日本支部。

ヘルシング本部（因みにヘルシングは王立国境騎士団の事。イギリスからグール（ゾンビみたいなもの）そしてその母体である吸血鬼（化け物フリークス）から護る機関日本支部はその配下にあたる。（因みに日本支部は此方が勝手に作らせていただきましたオリ支部です（笑・・・）原作にはありません。のご注意を・・・）  
夏美とライカはこの支部員である。

此処は日本支部の支部長室。本部から局長であるインテグラがやつて來た。

其処に夏美とライカが居た。

夏美「お忙しい中わざわざ」来日有難うござります。インテグラ様。で?  
何用でしょ「うか?」

インテグラ葉巻に火を灯し「いや。此方も此方で忙しい中悪いな  
人とも。」と続け様にある資料を2人に見せながら「・・実はな。  
此処日本でも

グールが多発している事が明らかになつてな。」

夏美達は其れを聞いて驚く。

と続け様にインテグラ「・・しかも、我タイギリストで出でている単な  
るグールではなく、‘人工グール’だ。」

其れを聞いてライカ「で、我々の今回の命令はオーダー何でしょ?」  
インテグラ局長。」

インテグラ「その人工グールの中にはチップが埋め込まれているそ  
うだ。

其れを退治しチップを回収し、黒幕を、暴き出してほしい。其れが  
今回の

お前達の命令だ。」

夏美とライカインテグラに一礼し「命令受けたまりました!!  
我が主!!」と同時に夏美「で?場所は?」

インテグラ「お前達のワカバの管轄内であるワカバ港だ。此れはオ  
ウガにも

すでに許可得ている!!すぐに向かってくれ!!」

夏美とライカ「はつ!!」そう言い夏美達は支部長室を出た。

と同時にセラスに「セラス!お前も向かってくれ!アーカードと共に  
にな。」

セラス「了解!!」そう言つてもう1人の主である。アーカードを呼

びに行きワカバ港へと向かつた。

一方夏美達は夏美の愛車である黒のベンツ221Bでワカバ港に向かつた。

夏美「チイ！…ある意味面倒（面でヨー）事になつたなア…！」

ライカ「あア。まつたくだ！しかし、イギリスが主に活動のグールが何故日本（此処）に？」

夏美「…其れを調べるのが今回の任務だ。」

ライカ「…そうだな。」

そつ言い夏美の愛車は闇に消えて行つた。

一方、ワカバ港には何故かすでに先客が居た。その正体は土方だ。土方ククと笑い「…どうやら、ヘルシングも動き始めた様だな。だが、

此処は日本。人工グールどもの好きにはさせねヨ。ま、俺が手エ下さなくともあいつ（夏美）がなんとかしてくれそつだが。只で帰るのは勿体ねエ

あいつには悪イがチイどばかり拝見させてもらひうぜ？」そつ言い陰に隠れて夏美達の到着を待つた。

ライカ「第3夜。ヘルシング本部員そしてヘルシング日本支部員始動！？」

そして夏美達に潜む土方の影！？」「次章もどつぞよろしくな！」

以上です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

### 第3夜 ヘルシング本部員としてヘルシング日本支部員始動！？夏美達に潜む+

今章は、また違う漫画とのコラボです。ヘルシングです。

オリ要素がありますので苦手な方は『注意願います。

ひょっとしたら残酷シーン等ありの長丁場編集可能性ありです。

因みにワカバ港はオリ場所です。その辺も『理解と』『承のほど』よろしくお願い致します。

### 第3夜 ヘルシング本部員としてヘルシング日本支部員始動！？夏美達に潜む+

此処はヘルシング日本支部。

ヘルシング本部（因みにヘルシングは王立国境騎士団の事。イギリスからグール（ゾンビみたいなもの）そしてその母体である吸血鬼（化け物フリークス）から護る機関。日本支部はその配下にあたる。（因みに日本支部は此方が勝手に作らせていただきましたオリ支部です（笑））原作にはありません。のでご注意を…）

夏美とライカはこの支部員である。

此処は日本支部の支部長室。本部から局長であるインテグラがやって来た。

其処に夏美とライカが居た。

夏美「お忙しい中わざわざ」来日有難いついでこります。インテグラ様。で？

何用でしょ「うか？」

インテグラ葉巻に火を灯し「いや。此方も此方で忙しい中悪いな2人とも。」と続け様にある資料を2人に見せながら「・・実はな。此処日本でもグールが多発している事が明らかになつてな。」

夏美達は其れを聞いて驚く。

と続け様にインテグラ「・・しかも、我タイギリスで出でている單なるグールではなく、‘人工グール’だ。」

其れを聞いてライカ「で、我々の今回の命令は何でしょ？・インテグラ局長。」

インテグラ「その人工グールの中にはチップが埋め込まれてているそうだ。

其れを退治しチップを回収し、黒幕を、暴き出してほしい。其れが今回の

お前達の命令だ。」

夏美とライカインテグラに一礼し「命令受けたまりました！・我がマイマスター主！」と同時に夏美「で？・場所は？」

インテグラ「お前達のワカバの管轄内であるワカバ港だ。此れは才ウガにも

すでに許可得ている！・すぐに向かってくれ！・」

夏美とライカ「はつ！・」そう言い夏美達は支部長室を出た。

と同時にセラスに「セラス！・お前も向かってくれ！・アーカードと共に。」

セラス「了解！・」そう言ひもつ一人の主である。アーカードを呼びに行きワカバ港へと向かつた。

一方夏美達は夏美の愛車である黒のベンツ221Bでワカバ港に向かつた。

夏美「チイ！・ある意味面倒（面でエー）事になつたなア！・」

ライカ「あア。まつたくだ！しかし、イギリスが主に活動のグールが何故日本（此処）に？」

夏美「・・・其れを調べるのが今回の任務だ。」

ライカ「・・・そうだな。」

そう言い夏美の愛車は闇に消えて行つた。

一方、ワカバ港には何故かすでに先客が居た。その正体は土方だ。  
土方ククと笑い「・・どうやら、ヘルシングも動き始めた様だな。  
だが、此処は日本。人工グールどもの好きにはさせねエよ。ま、俺  
が手下下さなくともあいつ（夏美）がなんとかしてくれそうだが。  
只で帰るのは勿体ねエあいつには悪いがチイとばかり拝見させても  
らうゼ？」

そう言い陰に隠れて夏美達の到着を待つた。

そして夏美達が到着した。

夏美辺りを見渡し「・・・今の所問題なぞうだな。相棒。」

ライカも領き「・・同感だ。だが、油断は禁物だ！相棒！」

夏美今一度タバコを取り出し火を灯しニヤと笑い「わあってる…」

そう言ひ「とりあえず見回りう。」

するといつの間にか到着していたセラスが「夏美さん！ライカさん！3番倉庫でグール発見です。」

夏美とライカは其れを聞いてフッと笑い「了解！！」

そして、夏美達はセラスと共に3番倉庫に向い始めた。

すると・・・。

‘夏美’。

夏美はその呼ばれた声に振り向くだが・・・。

夏美「・・・？」

セラスその夏美の様子を見て「・・・夏美さん？」

夏美ハツと我に戻り「・・・いや。すまん。何でもない。」

・・・まさか？

そつ心の中で眩ま再び歩き始めた。

すると夏美達に見えないように隠れていた土方がククと笑いながらタバコに火を灯し「・・・相も変わらず勘の良い奴だな。」炎龍（あの頃）の勘は今でも抜けねエか。「面白エ。」そうでなければ面白くとも何ともねエ。」

なア・・・高杉イ。‘お前の黒猫成長し続けているぜ?’

一方、ワカバ港の3番倉庫には派手めな蝶が飛んでいた。

‘高杉の監視蝶’だ。

夏美達が到着した後夏美のみをじっとそしてずっと見ていた。

そして夏美は薄々感づいていたが「・・・ライカ。セラス。突入だ。そして、セラスは母体の吸血鬼を探してくれ。」

ライカ頷き、セラスも頷きながら「夏美さんは？」

夏美対フリークス（化けもの）武器ギンガ（シルバー色をした拳銃）を懐から取り出し「ライカと一緒に（人工）グールを始末する。グール共を始末すれば多分人工グールも判明する事が出来るだろ？」「

と続け様に「その間に母体も始末してくれ！」

セラスニヤリと笑い「了解！！（ヤーーー！）」

そして3人は中に入つて行つた。

と同時にグール共が一斉に現れた。

夏美今まで吸つていたタバコを消しまた懐から新しいタバコをもう一本取り出し火を灯しニヤリと笑い

「おいでなすったかい？グールさん方。さア・・・狩り（ゲーム）の始まりだ！！！レクイエムをくれてやるよ！！！行くよッ！！

！…相棒！…！」

ライカもニヤリと笑い「あいよッ…！相棒ッ…！」そつ言つて氷棒で夏美と共にグールを始末し始めた。

一方、セラスは、第3の眼で、母体の吸血鬼を探していた。

すると女の声でクスクス「誰かをお探しかい、？ヘルシングの女吸血鬼の  
お嬢ちゃん？」

セラス其れを聞いてその声の主に眼をやりクスと笑い返し「え…。  
。実は、そつなんです。」、グールの宿い主さん？」と声を返した。

第3夜。ヘルシング本部員そしてヘルシング日本支部員始動！？夏  
美達に潜む土方の影！？完。

### 第3夜 ヘルシング本部員としてヘルシング日本支部員始動！？夏美達に潜む+

今章も無事に更新完了致しました。

結構長めで申し訳ありません（汗）

其れではほほ毎回のグタグタ予告をどうぞ（笑・）

女吸血鬼クス「あらあら・・・良くわかつたわね？私が、グールを作り出した吸血鬼だと。」

セラスクスと笑い「だつて、グール確認中に貴女の姿もチラつて見えたものですから。」

女吸血鬼「流石に、ヘルシングの飼つている吸血鬼だねエ。でも、なんでだい？同じ、同志、じゃないか？何で、人間に味方するの？」

其れを聞いてセラスクスと笑いながら「貴女方と一緒にしないで頂けます？此方には此方とて、事情が、あるのでね。マスター。夏美さんに始末しろつて言われたんですが・・始末しても良いですよね？」

すると後ろからセラスの主である全身赤づくめの男アーカードが現れニヤリと笑い「良いとも。やれセラス。」

セラスハルコンネを取り出し「了解！！（ヤーーーー）マイマスター

「……」

そう言い女吸血鬼に狙いを定めた。

女吸血鬼は急に笑い出し「私一人だと思ったのかい？大間違いだよ！」「

そう言い仲間を呼んだ。だが…一人も来ない。

するとセラス達の背後から夏美達が現れてライカが「ニヤリ」と笑い「悪いね？」

女吸血鬼さん？アンタの相棒は「ちらが、始末したよ」。

女吸血鬼悔しそうに顔しかめて逃げ出しそうとした次の瞬間セラスはハルコンネの引き金を引いた。

そして散りとなつた。

夏美ある袋を取り出し「・・グールの中に約数名、問題の人工グール、が居たので頭に埋め込まれたチップを取り出しました。此れがそうです。アーカードさん。」そう言い小さな白いチップが入った袋を渡した。

アーカード受け取り「御苦労！夏美、ライカー此れで今回の任務終了だな。（ミッションコンプリート）だな。」と続け様にセラスに袋を渡して「セラスも」苦労だった。此れをインテグラに渡しておけ。」「

セラス、アーカードから袋を受け取り「はい。マスター。」「

そしてアーカード夏美達に田線をやり「戻るぞ。」

夏美達は頷きワカバそしてヘルシングへと戻つて行く。

すると第3倉庫から出てきたライカ達と共に出てきた夏美はまだ高杉の監視蝶を見て顔を少しだけひきつらせた。

遠くから「相棒！－！」とライカの声がした為夏美は慌てて戻つて行つた。

その様子を蝶の眼から高杉が山崎とそしていつの間にか戻つて來ていた土方と共に見ていた。

高杉ククと笑い「・・・流石だな。夏美イ。俺の事に勘づくとはなア。流石は・・・」

‘俺の黒猫だ。’もう飼い主（俺）から逃げれると思うなよ？

連れ戻して退同様、あの時同様にたっぷり可愛がつてやらい。’

セラス「第4夜。夏美達ひとまずヘルシングの任務終了？そして、夏美に迫る高杉の魔の手？」‘次章もどうぞ宜しくお願ひしますー。’

以上です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

第4夜。夏美達ひとまずヘルシングの任務終了?そして、夏美に迫る高杉の魔の手。

今章は前章の似た様な話です。

此方も前章と同様に長丁場のもしかしたら編集可能性あります。

残酷シーンありのも予定。

後半あたりに高杉さん方が出ます。

## 第4夜 夏美達ひとまずヘルシングの任務終了?そして、夏美に迫る高杉の魔

一方、セラスはと言つと・・・・・・。グールの元凶である母体の女吸血鬼と対峙していた。

女吸血鬼クス「あらあら・・・良くわかつたわね?私が、グールを作り出した吸血鬼だと。」

セラスクスと笑い「だつて、グール確認中に貴女の姿もチラつて見えたものですから。」

女吸血鬼「流石に、ヘルシングの飼つている吸血鬼だねエ。でも、なんでだい?同じ、同志、じゃないか?何で、人間に味方するの、?」

其れを聞いてセラスクスと笑いながら「貴女方と一緒にしないで頂けます?此方には此方とて、事情が、あるのでね。マスター。夏美さんに始末しろつて言われたんですが・・始末しても良いですよね?」

すると後ろからセラスの主である全身赤づくめの男アーカードが現れニヤリと笑い「良いとも。やれセラス。」

セラスハルコンネを取り出し「了解!!(ヤーーー!)マイマスター!!」

そう言い女吸血鬼に狙いを定めた。

女吸血鬼は急に笑い出し「私一人だと思ったのかい？大間違いだよ！！」

そう言い仲間を呼んだ。だが…一人も来ない。

するとセラス達の背後から夏美達が現れてライカがニヤリと笑い「悪いね？」

女吸血鬼さん？アンタの相棒はうちらが、始末したよ、。

女吸血鬼悔しそうに顔しかめて逃げ出しそうとした次の瞬間セラスはハルコンネの引き金を引いた。

そして散りとなつた。

夏美ある袋を取り出し「・・グールの中に約数名、問題の人工グール、が居たので頭に埋め込まれたチップを取り出しました。これがそうです。アーカードさん。」そう言い小さな白いチップが入った袋を渡した。

アーカード受け取り「御苦労！夏美、ライカ！此れで今回の任務終了だな。（ミッショングンプリート）だな。」と続け様にセラスに袋を渡して「セラスもご苦労だった。此れをインテグラに渡しておけ。」

セラス、アーカードから袋を受け取り「はい。マスター。」

そしてアーカード夏美達に目線をやり「戻るぞ。」

夏美達は頷きワカバそしてヘルシングへと戻つて行く。

すると第3倉庫から出てきたライカ達と共に出てきた夏美はまだ高杉の監視蝶を見て顔を少しだけひきつらせた。

遠くから「相棒！！」とライカの声がした為夏美は慌てて戻つて行つた。

その様子を蝶の眼から高杉が食事後の山崎とそしていつの間にか戻つて来ていた土方と共に見ていた。

高杉ククと笑い「・・・流石だな。夏美イ。俺の事に勘づくとはなア。流石は・・・」

‘俺の黒猫だ。’もう飼い主（俺）から逃げれると思つたよ？

連れ戻して退同様、あの時同様にたっぷり可愛がつてやらア。

山崎高杉の膝もとに寄り添つて「・・・あの子何か、危険な香り、していますよ？高杉さん。」

高杉其れを聞いてクククと笑いながら山崎の頭を撫でて「、危険な香り、ねエ。まア・・・間違つちゃアいねエ、よ。退。」

土方もククと笑い「‘違ひねエ’。何せ、あいつは……昔チイと、闇に居たんだからな’。」

山崎其れを聞いて土方に顔向け「え？ そうなんですか？ 土方さん？ でも、彼女、人間、ですよ？」

山崎のその問いに土方タバコに火を灯しククと笑い「……確かにあいつは‘人間だ’。だが、それ以前に

‘表ではなくて‘‘闇で生きてきた’‘心が表から闇に潜んでいた時期’があつたのさ。’ そう言いながら高杉達と同じソファーアに座りながら続け様に‘‘だが、ある時突然闇から表へと移り住んだのさ。何故そうなったのかは知らねエが……まあ……あいつは元はと言えば所詮闇いくら闇の人間が表に移り住もうが、やつて行けねエよ’。’

高杉も其れを聞いてクククと笑い‘‘違ひねエ’’。

一方、高杉達が話をしていた夏美はと言つと。

先程の任務内容をインテグラに伝え自分の部屋に戻りソファーに座りタバコを吸つていた。

もちろん。高杉達もその様子を見ていた。

すると夏美の携帯が鳴つた。

夏美は携帯を取り出しディスプレイを見た。

其処には、非通知、となっていた。

夏美は一瞬顔をしかめたが携帯の通話ボタンを押し「・・はい。橋。

」

すると低い男の声で『・・よオ。炎龍。いや、今は止めて橋夏美に  
戻つたのか。』

夏美その声を聞きながら「・・・おわか。貴方はジンさん...?」

電話の声の主はククと笑い『『』』。俺だ。』

夏美はその声の主を聞き驚き固まっていた。

第4夜。夏美達ひとまずヘルシングの任務終了?そして、夏美に迫る高杉の魔の手?完。

## 第4夜 夏美達ひとまずヘルシングの任務終了? そして、夏美に迫る高杉の魔

今章も無事に更新完了致しました。

今章も御付き合い下さいましてありがとうございます。

其れではほぼ毎回ですがグタグタ予告をびつわ（笑）

夏美の携帯にかかるて来た一通の電話。

其れは嘗て一時側にいた男ジンからだった。

ジン笑いながら『どうした? 久々の会話なんだ。 そんなに警戒するなよ。』

夏美「…………今更何用です、?」

ジン『…………連れねエな。 昔俺に、高杉同様、懷いていたのによ。』

夏美は其れを聞いて思わず黙り込んでしまった。

突然かかつて来たジンは何が目的なのか??

夏美「第5夜。 突然夏美にかかるて来たジンの電話。」 「次章もどうぞ宜しくね！」

以上です。其れでは次章も今章同様お楽しみ頂ければ幸いです。

## 第5夜。突然夏美にかかるて來た闇（ジン）の電話。そして新一吸血鬼化、そー

今章は、主に夏美とジンの兄貴様との会話のやり取りになります。

サブタイトル多少此ちらも変更させて頂きました。

長丁場の編集可能性あります。こラボ苦手な方はお引き取り頂く事をお勧め致します。尚、後ほどまたキーワードに加えさせて頂く予定ですが、（ご存知のない方がもしいましたら申し訳ございません。汗）また他の漫画「闇色の愛人」と言つ漫画の要素も多少入れさせて頂く予定です。

この漫画はBL漫画で吸血鬼と人間の青年の恋？の物語です。もしご興味のある方はアクアコミックス様からだつたと思うのですが本屋さん等に売られていると思いますのでもし宜しければどうぞ。私の最近の吸血鬼漫画でお気に入り？の漫画です。此処からは独り言です。（笑：）コラボするの楽しい。と思つ今日この頃。大変だけど・・（笑：）長い前書きで申し訳ありません。其れでは本編へどうぞ。

第5夜。突然夏美にかかつて来た闇（ジン）の電話。そして新一吸血鬼化、そー

夏美の携帯にかかつて来た一通の電話。

其れは嘗て一時側にいた男ジンからだつた。

ジン笑いながら『どうした？久々の会話なんだ。そんなに警戒するなよ。』

夏美「…………今更何用です、？」

ジン『…………連れねエな。昔俺に、高杉同様、懷いていたのによ。』

夏美は其れを聞いて思わず黙り込んでしまつた。

夏美・・。

今更なんだ。どうしてこの男はあの方同様に私を解放してくれないのだろう？

すると夏美「・・・其は、昔の事、今は、違いますよ。」と続け様に「其れに、貴方も貴方にとつてもう、私より大事な者、が出来たんじやないですか？だつたら・・もう私に構わないでくださいよ。」

ジン『そいつは出来ねえ相談だ。何せ、俺の、大切な奴、もお前の事気になつてゐるからな。』

夏美「・・・そですか。でも、あまり私にかかわりすぎるとろくな事ないですよ？其れでは。』

そういう電源を切つた。それも一方的に。

一方、ジンは隠れ家の一つで新一と一緒にいた。

ジンクククと笑いながら「かかわりすぎるところかな事ネエってか  
」。」そう言いながらタバコに火を灯した。

するとシャワーをいつの間にか浴びていた新一が着替えを終えてジ  
ンの側に寄つて來た。

そしてジンの肩にすり寄つて來た。

ジンはその様子を見てククと笑い新一の頭を撫でて「お前、まるで  
‘猫見てエだな。’

新一クスクス笑い「そうかもな。だつて、俺はジンの‘猫’だから。  
其れも‘黒猫’。」

ジン其れを聞いて笑いながら「・・そつだな。お前は‘俺の黒猫  
’だ。」

そう言いタバコを灰皿にもみ消し新一を抱き寄せて「なア・・新一。

「

新一「何?」

ジン耳元で「腹がすいた。お前の血飲ませろよ。」と囁いた。

新一クスと笑い「良いよ。だって俺は・・そつとも言つたよつ」  
ジンの黒猫<sup>ねこ</sup>、だから。」

其れを聞いたジンは満足そうな笑みを浮かべながら新一の首元に顔をつづめ舐めて牙を立てた。

新一痛みで顔がしかめる。

その痛みは・・いつの間にか快樂へと変わつていつた。

ズズズと。ジンが新一の血をすする音がする。

其れもずつと・・。

あると新一はジンのパートの袖をつかみ「・・ジ、ジン。もつ。  
やつ」といった。

と同時にジンの顔がよつやく新一の首元から離れて「」  
「そして新一は崩れるよつてジンの膝へと墜ちて行つた。

そしてジンは新一の頭を再度なでながらククと笑い「夏美もお前みたいに、素直になればいいのによ。」と呟きながら新一に「なア・新一。お前も俺と同じものになるか?」

新一は息切れしながらも「……ジンと、これからもずっと一緒に入れるなら、俺も堕としてよ。」

其れを聞いたジンは「ヤリと笑い「堕としてやるよ。お前はこれからもずっと俺のものだ。」

そのまま自分の腕に咬みつき血を口に呑み新一を前に向かせて新一に口づけした。

そして口移しで口の血を新一に飲ませた。

新一の体にジンの血が巡る。

そして新一は眼を閉じた。

其れも眠るよ、」。

ジンニヤリと笑い、「お休み、俺の新一。」そう言い新一のおでこに軽くキスをした。

もう、此れで俺からは完全に逃げられねェぜ、と心中で呟いた。

一方、夏美はと黙つと・・。

相も変わらず自分の部屋のソファーで座つていた。

そしてまたタバコに火を灯す。

すると外が騒がしくなっていた。

夏美「…………」気づながらして気になつたのか目を閉じる。

火炎風拳火炎風透視術。

（火炎風拳の事は……銀魂連載また他連載で詳しく書いていると  
思つてそちらをどうぞ。）

夏美は一転に気を集中した。

「何かがある、……何かが、」

するとワカバやヘルシングの日本支部から少し離れた山林に豪勢な屋敷があった。

この屋敷は夏美も知っていた。

そして灯がともついている事に気がつく。

・・灯？何で？此処は誰も住んでいなかつたはず。

夏美は透視を続けた。

すると螺旋階段を通り過ぎてひとつつのドアに辿り着くそしてドアの中の部屋を透視する。

其処はリビングだった。

辺りにはひづくが何本も蠟燭立てに立っていた。

・・ひづく？

そしてそのひづくから少々かけ離れた所に豪勢なソファーがあり  
1人の男が横になりながら手すりに

腕を立ててくつろいでいた。

黒髪の男で両耳の所がとんがっていた。

赤のシャツそして全身黒ずくめで覆っていた。

黒のコート兼マント。そして黒のズボンそして黒の靴。

夏美 その男を見て妙に勘づいた。

‘・・・」この男危険な香りがする。の方と兄貴もジンもアーカードさんもそうだけど、それ以上に、’

‘危険だ。何故か知らないが・・・私の頭の中で、警告音、がなつていた。

するとその男は夏美が透視（見ている事）に気づいたのか眼を開け夏美の方を見た。

夏美「・・・！・・・！」

そしてニヤリと笑った。

夏美は其れを見て此れ以上は危険だと判断し透視を終えた。

そして冷や汗をかきまくつて短くなりかけたタバコを吸い始め「…  
…、ヤバイ！」透視（見る）んじゃなかつたなア」。こりゃ  
アある意味あの方々より、たち、が悪いな。さて…・・・どうしよう  
か。」

すると相棒であるライチュウが現れ『・・夏美様。』

夏美ライチュウの登場に驚き「おわあア…！いきなり出てくるなよ  
！…びっくりしたよ…！」

ライチュウ苦笑いをし『「めんなさい。夏美様。でも…タバコも  
う短くなりすぎてますよ…』

夏美慌てて灰皿にもみ消したそして事前に用意していたアイスティ  
ーを飲みながらまたタバコに火を灯す。

そしてライチュウに何かあったのかを聞かされそして夏美は話した。

と同時にライチュウに「・・相棒よ。1人での山林に行くな？危ないから。」

ライチュウ其れを聞いて頷いた。

だが・・此れが夏美を再び闇へと誘う原因の一つにもなる事を彼女自身は知らずにいた。

第5夜。突然夏美にかかる電話。<sup>ジン</sup>そして新一吸血鬼化、そして夏美が透視していた謎の男。完。

## 第5夜。突然夏美にかかるて来た闇（ジン）の電話。そして新一吸血鬼化、そ

今章も無事に更新完了致しました。

其れではほぼ毎回恒例のグタグタ予告をどうぞ（笑・）

そしてアレから夏美は再びヘルシングの日本支部に呼ばれ再びイン  
テグラの  
オーダー<sup>オーダー</sup>  
命令を受ける。

その命令内容は何と先程の透視していた山林の豪勢な屋敷の内部調  
査みたいなものだった。

其れも夏美一人で・・。

あいにくライカはこの任務ではワカバの別件で動く事になってしま  
い、

アーカードとセラスは他のヘルシングの仕事があり動けない。

たまたまワカバのオフだった夏美に白羽の矢が立つた。

其れを聞いた夏美は本来なら乗り切じゃなかつたがヘルシングの局  
長直々の命令だから断るわけにもいかなかつた。と言うより断れな  
かつた。

そして・・夏美は支部長室から自分の部屋に戻つてソファーに座り  
頭をかきながらため息をつき「・・・いやア、参つちまつたな。飛  
んだ、仕事だ、。

あそここの屋敷に行かなきやならねエなんて・・。こりやア何か嫌な

予感がするな。」そして仕事の準備に取り掛かった。

一方、此処は山林の中にある屋敷。

夏美が透視していた男は逆に夏美を透視していた。

そしてクククと笑い「・・・今宵は楽しくなりそうだ。」と続け様に

「さア・・・早く私の所に来い。」橋本家の小娘」。

その男は何と夏美を知っていた。だが・・・夏美自身は知らずにいた。

そしてそのリビングに一人の青年が入つて来て男の側に寄り添う。

果たしてこの2人の正体とは？

夏美「第6夜。夏美再びヘルシングの日本支部の任務へ。山林の屋敷の内部調査？」と同時にある危険な番りを持つ男に会つ？（前編）」「はア・・・何でこんなことになるのかね。次章もどうぞ宜しくね。」

以上です。其れでは次章も今章同様にお楽しみただければ幸いです。

## 第6夜。夏美再びヘルシングの日本支部の任務へ。山林の屋敷の内部調査?と

今章は前章と似た様な話です。（コラボ要素あり）

長丁場と編集可能性あります。

因みにライチュウも出演予定です。（キーワードに書ききれないの

で一応、

ポケ要素もあります。ごめんなさい汗）

其れでは本編へどうぞ。

## 第6夜 夏美再びヘルシングの日本支部の任務へ。山林の屋敷の内部調査?と

そしてアレから夏美は再びヘルシングの日本支部に呼ばれ再びインテグラの命令を受ける。

その命令内容は何と先程の透視していた山林の豪勢な屋敷の内部調査みたいなものだった。

其れも夏美一人で…。

あいにくライカはこの任務ではワカバの別件で動く事になってしまい、

アーカードとセラスは他のヘルシングの仕事があり動けない。

たまたまワカバのオフだった夏美に白羽の矢が立った。

其れを聞いた夏美は本来なら乗り切じやなかつたがヘルシングの局長直々の命令だから断るわけにもいかなかつた。と言つより断れなかつた。

そして・・夏美は支部長室から自分の部屋に戻つてソファーに座り頭をかきながらため息をつき「・・・いやア、参つちまつたな。飛んだ、仕事だ、。

あそここの屋敷に行かなきやならねエなんて・・。こりやア何か嫌な予感がするな。」そして仕事の準備

に取り掛かった。

一方、此処は山林の中にある屋敷。

夏美が透視していた男は逆に夏美を透視していた。

そしてククと笑い「・・・今宵は楽しくなりそうだ」。と続け様に

「さア・・・早く私の所に来い。『橋本家の小娘』。」

その男は何と夏美を知っていた。だが・・・夏美自身は知らずにいた。

そしてそのリビングに一人の青年が入つて来て男の側に寄り添つた。

男はその青年を見てククと笑い頭を撫でた。

青年は嬉しそうにその男にすり寄る。

そして男を見て「ねエ・・・何を透視（見ているの）？」ディーン  
？「その男の名を呼んだ。

「ディーンと呼ばれた男はニヤリと笑い「何、お前と似たような境遇、持った奴を透視（見ている）のさ。先程そいつに、透視（見られていたからな）」玲。」

玲と呼ばれた青年は「ふうん。で？その人来るの？」

ディーンはククと楽しそうに笑い「あア。そうみたいだ。」

まさか、ヘルシングの狗になっていたとはな。橘家本家の小娘。

お前は私自身を覚えているかどうかは知らんが、私はお前の事を覚えているぞ？

さア・・早く来るがいい。

歓迎してやうやく。

一方夏美は、愛銃であるギンガを懷に忍び込ませてそして腰元には愛刀である翡翠刀を差して「・・よし一行くか。」そうして部屋を出て行つた。

そして夜間と言つ事もあり愛車である黒のベンツ221Bに乗り込み山林の屋敷に向かつた。

すると助手席にはライチュウがちょこんと座つていた。

夏美は珍しく険しい顔しながらの運転だつた。

ライチュウは心配そうにみる。

・・・こんな険しい状態での運転は夏美様には珍しい事だ。

一体どうしたんだろ？

すると山林の国道に一台の信号があった。

色は赤だったので止まって灰皿を取り出し窓を開けタバコに火を灯す。

ライチュウ夏美を見て『・・あ、あの夏美様？』

夏美「ん？どうした？相棒？」

ライチュウ聞きずらそうに『・・先程は珍しくいつも以上に険しい顔で運転なさっていましたが何がありましたか？』

夏美苦笑いをしてタバコ吸いながら「……さっきの、アレ関係さ  
、ライチュウ。透視してから……  
何故かわからんが冷や汗が止まらなくてね。恐ろしいくらいにね。  
其れに、私しゃアのこの、妙な勘、は  
自分で言つのも何なんだが結構、当たつちまつ、んだ。何故か知ら  
んがね。」

そつ言い信号青になつたのを確認し愛車を走らせる。

其れからは2人には会話がなかつた。

いや……正確的には、出来なかつた、って言つた方が、正しいの  
かもしれない。

そして、時間がたつにつれて山林に入り夏美自身が透視（見た）屋  
敷に着いた。

屋敷から少々離れた場所に愛車を止める夏美そしてタバコを灰皿に  
もみ消し灰皿をしまい愛車から下りる。

其れに続きライチュウも下りた。

そして夏美武器を最終確認しライチュウに「良いかい? やばそつ  
な状態」になつたら即逃げるよ?」

事前にインテグラから危険と察知したら自己判断で構わないから戻  
れと指示を仰いでいた。

ライチュウ頷き『・・了解です。』

そして夏美其れを確認すると意を消して「よしーじゃ・・行くか!』

そう言い屋敷のドアに向かつた。夏美は一応念の為ノックしようと  
したが・・・。

ギィイイと勝手にドアが開いた。

夏美とライチュウは驚いた。

そして、ライチュウ夏美を見て『・・・夏美様。』

夏美冷や汗かきつつもニヤリと笑い「・・ぞひやひ。」歓迎され  
ているみたいだ。だが、油断は禁物さね。」

そう言ひそして、その屋敷に入つて行つた。

夏美「・・・・・。」

あまりにも、独特的の雰囲気、に緊張感が走る。

と同時に螺旋階段から「シコシコシ」と足跡が聞こえた。

夏美その音を聞きライチュウに後ろに隠れるよつ指示し懐からギン  
ガを取り出した。

其処には夏美が透視した男ティーンが下りてきて手を差し伸べ、「  
良い夜だな」、「歓迎しよう」、「と言つた。

夏美はその男を見て警戒心を募らせていた。

第6夜。夏美再びヘルシングの日本支部の任務へ。山林の屋敷の内部調査?と同時にある危険な香りを持つ男に会う。（前編）

## 第6夜 夏美再びヘルシングの日本支部の任務へ。山林の屋敷の内部調査?と

今章も無事に更新完了致しました。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告をどうぞ（笑）

ワカバとヘルシング日本支部の近くの山林にある屋敷。

其処にヘルシング日本支部の、命令<sup>オーダー</sup>で内部調査?で来ていた夏美とその相棒である、天然ボケ電気ネズミ、コラ（笑）事ライチュウ。その2人の前に現れた黒髪の男。夏美はライチュウに後ろに隠れるよう指示しそしてギンガを取り出して、警戒心<sup>セイケイシン</sup>を露わにしていた。夏美の自身の中に、このまがまがしい気配。この男かなり危険だ。あの方々以上に、危険な香りがする。そして、心臓の音が早くなつてた。

そして男はククと笑い「・・そんなに警戒するな。橘家本家の小娘。  
」

夏美は其れを聞いて驚きを隠せないでいた。と続け様に「・・・何故私が、橘家本家人間だと知っているんです！？」

その問いに男はククと笑い「、どうやら本当に覚えていないようだな」。私は、昔約10数年前くらいか、「お前と会っている」。  
お前の嫌いな満月の夜、にな。」

夏美其れを聞いて驚いた。な！？何！？私しゃアはこの男と、会つてはいる、！？約10数年前だと？其れは確か、私らワカバと広州の大戦の時だ。其れも嫌いな満月の夜だと！？でも、何故・・この男は私しゃアが満月の夜が嫌いだつて知つてているんだ！？と内心焦つていた。

果たしてこの男と夏美の、関係とは、！？

其れを聞いていたライチュウも焦つていた。

ライチュウ『第7夜。夏美再びヘルシングの日本支部の任務へ。山林の屋敷の内部調査?と同時にある危険な香りを持つ男に会つ。(後編)』

『次章もどうぞ宜しくお願い致します!!』以上です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

## 第7夜 夏美再びヘルシングの日本支部の任務へ。山林の屋敷の内部調査?と

今章は前章の引き続きになる予定です。長丁場ともしかしたらまた編集可能性あります。『』了承のほどよろしくお願ひ致します。

此方に書かれている香港はオリジナル地名で・・・一応アジア設定です。（笑）

で、その管轄している吸血鬼界の組織が香煉館です。

オリジナル要素苦手な方はお退き頂いた方がよろしいかと思われます。

其れでは本編へどうぞ。

## 第7夜 夏美再びヘルシングの日本支部の任務へ。山林の屋敷の内部調査?と

ワカバとヘルシング日本支部の近くの山林にある屋敷。

其処にヘルシング日本支部の、命令オーダーで内部調査?で來ていた夏美とその相棒である、天然ボケ電氣ネズミ、コラ(笑)事ライチュウ。その2人の前に現れた黒髪の男。夏美はライチュウに後ろに隠れるよう指示しそしてギンガを取り出して、警戒心を露わにしていた。夏美の自身の中に、このまがまがしい氣配。この男かなり危険だ。あの方々以上に。危険な香りがする。そして、心臓の音が早くなつてた。

そして男はククと笑い「・・そんなに警戒するな。橘家本家の小娘。」  
夏美は其れを聞いて驚きを隠せないでいた。と続け様に「・・・何故私が、橘家本家人間だと知っているんです!?

その問いに男はククと笑い「、どうやら本当に覚えていないようだな」。私は、昔約10数年前くらいか。「お前と会つている。お前の嫌いな満月の夜」にな。

夏美其れを聞いて驚いた。な!?!何!?私しゃアはこの男と、会つてはいる、!?約10数年前だと?其れは確か、私らワカバと広州の大戦の時だ。其れも嫌いな満月の夜だと!?でも、何故・・この男は私しゃアが満月の夜が嫌いだつて知つてはいるんだ!?と内心焦つていた。

其れを聞いていたライチュウも焦つていた。

夏美はあまりにも内心焦り続けていた為行き成りその男に向かつて

ギンガを威嚇発砲してしまった。

だが、軽くかわされてしまった。

夏美「・・・チツ！！」と軽く舌打ちをした。

すると後ろの方で「ディーン！」とその男を呼ぶ声がして玲が慌てて側に駆け寄つて来て「大丈夫？」

ディーンは玲を見てフツと笑い「あア。問題ない。」すると玲夏美を見て「行き成り発砲するなんてひどいね。」

夏美「・・・銃声が聞こえた？それとも、透視（見え），んのかな？」

玲フツと笑い「僕は、‘人間’君と同じ。だけど・・・残念ながら君と同じ能力は持つていないよ。」

夏美「・・・そうかい。」

・・・ヤバいな。私しゃアらしくもねエいらだちと焦りが支配する。

それに・・あの青年はあの男を「ディーン」って呼んだ。

約10数年前・・妙に引っ掛かるな。

だけど、此処はどの道退いた方が良いね。

すると夏美の携帯が鳴った。

しまった！―電源切り忘れた！―

こんな時に誰だよ！―そう眩きで見えない程度にディスプレイを開け、セラス、となっていた。

夏美「・・・・・」瞬間移動を使い、2人に見えない所まで行きタバコに火を灯し電話に出た「・・・私しゃアだ。」

すると電話越しにセラスが慌てて『夏美さんツ！！別の任務中に大変に申し訳ありません！！緊急事態発生です！！』

夏美「・・・どうした！？何があつた！？」

セラス『・・・ドイツ第三部隊のグール共が知らぬ間に日本に入りワカバ港を占拠しています！！』

夏美驚いて「・・・ドイツだ、第三部隊つて・あのメガネの『テブ少佐か！？』

セラス『は、ハイ！！そうです！！！其れが香港の吸血鬼界と手を組んで大戦争を引き起こすつもりです！！！人工グールの繁殖先も香港だと。』

夏美は軽く舌打ちし「香港つていつたら・・確かに香港の連中共が管轄する所だよな？」

セラス領き『・・ハイ。で、奴らも日本入りしているとの情報も。しかも館長である黒龍がいるんです。』

夏美其れを聞いて慌てて頭を抱え「・・黒龍だと。」

あいつは嘗て隼人が炎龍だつた時の相棒じやないの。

んでもつて・・・隼人の事かなり気に入っていたみたいだ。

そして純血吸血鬼。

そしてセラスが驚愕の事実を話した『・・で、申し上げにくいのですが、あいつは夏美さんが炎龍だつた事を知っています。』

夏美は其れを聞き「な、何だとオオ！…？」

セラスは『・・ハイ。其れはそつと早く来て下さる…』

夏美「・・行きたいのは山々なんだが、ここはの屋敷の主さんがそう簡単に行かせてくれなさそうだ。」

まあ・・出来るだけ早くこくよつ善処するよ。」 そう言い携帯を切った。

そしてライチュウを見て「・・相棒。この近くにムクホークを止まらせてくれておいて。先にワカバ港へ行ってくれ！」

ライチュウ「・・夏美様はびびられるんです？」

夏美苦笑いをし「私じゃアは、もうちょっとだけ此処に残るわ。いや・・こいつ言った方が正しいね。」

‘残らなきやならない。つて。’ するとギンガで窓を割り「早く行け！！」と指示を出した。

ライチュウは心配ながらも頷き「・・・分かりました。ではまた後ほど。」 そう言い割れた窓を勢いよく飛び出しそして『ムクホーク！――』と仲間の名を呼び其れに合わせてムクホークが素早く来て飛び乗り『ワカバ港へ向かつて頂戴！』 ムクホーク頷き『了解！！』 そう言いワカバ港へと向かつて行つた。

其れを見届けた夏美タバコを携帯灰皿にもみ消しフツと笑い「・・・悪いね。ライチュウ。セラス。どうやらワカバ港へ合流はもつちつと先になりそうだよ。」

そして再びギンガを構え直しながら辺りを見渡した。

夏美「・・・誰もいないか。」 すると嫌ながらも透視を始めた。

すると次の瞬間夏美の体が、金縛りにあつた。

夏美「・・・んな！！」

すると背後で「ディーンの笑い声がし「・・・私があの場所にずっと  
いたと思ったら大間違いだぞ」？橘家本家の小娘。」

か・・・体が動かない！！！！

そして「、しばらく眠るがいい」。」そう言われ夏美は意識を飛ば  
した。

「ディーンは夏美を抱いて「、久々の再会、なんだ。」再会を祝おう  
じやないか」。」そう言い寝室へと

連れて行つた。そしていつの間にか玲も合流しディーンと共に去つ  
て行つた。

一方、ワカバの別件で動いていたライカは夏美の、気が不安でな  
事に気づき。

「・・・相棒?」と心配そうに呟いていた。

一方、ワカバ港でドイツのグール達を蹴散らしていたアーカード、  
セラス。そしてベルナドット。

後から合流した夏美とのライチュウそしてムクホーク。

ベルナドット「あア!!! 夏の嬢ちゃんはまだ来ねエのかよ!!! や  
ラスの嬢ちゃん!!!」

セラスハルコンネで撃ちながら「・・・仕方ありませんよ。ベルナ  
ドットさん。だって、夏美さんインテグラ様から先に山林の屋敷の  
潜入調査の命令を受けられていたのですから・・・」

ベルナドット「でもよ。あの夏の嬢ちゃんだぜ？すぐ任務終えてくるはずなんだ。」

### ライチュウ

・・・もしかして夏美様の身に何かあつたんじゃア。と焦っていた。

するとアーカードはニヤリと笑い「まあ・・良いじゃないか。たまにはこいつのも。奴は後から来るだろア。」

ムクホーク『・・其れを願いたいですね。』 そう言つてブレイバードを出してグール共をなぎ倒していた。

・・・ご主人。

だが、ライチュウ達以外は夏美自身がティーンに捕らわれた事を知

らなかつた。

一方、夏美はアレから、ディーンに捕まり、寝室で寝かされていた。

ディーンは夏美の側に寄り添い、頭を撫でていた。

玲「ねエ・・その子の事知つていたんだ。」

ディーン「あア・・・。前に話したと思うがお前と似たような境遇さ。まア・・・、こいつの場合約10数年位前だがな。」

玲はディーンの側により、「つて事は年齢は僕と同じ位? 僕は、 10

年前辺りに、ティーンと初めて会った

んだから。」

ティーン玲を見て「あア・・そつなるかな。」

すると夏美は顔をしかめ始めた。

そう、夏美は、夢を見ていた。彼女にとって、いやな夢。

そしていつの間にか涙を流して「・・・母さん。」と呟いていた。

そう夏美は約10数年前に起こったワカバと広州の大戦を思い出していた。

そして・・・夜まで続きその日の満月の夜父大樹と母楓がその時に死んだ事。

自分の未熟さを改めて知った事。

その後嘗ての恋人も亡くした事。

そして、嘗ての姉貴分に憎悪を膨らませてしまつた事。

さもざまな事が一気に頭の中でぐるりと返していく。

と同時に「・・待つて！・・待つて！・・父さんッ！・・母さん！・・！」手を差し伸べ寝言を言い眼がさめた。

第7夜。夏美再びヘルシングの日本支部の任務へ。山林の屋敷の内

部調査?と同時にある危険な香りを持つ男に会つ。（後編）完。

今章は編集可能性は無かつたですね（汗）まあ・・・気まぐれになつて編集可能性もありますが・・（笑・）今章も御付き合いで下さり有難うござります。

其れではほぼ毎回ではありますがグタグタ予告をどうぞ。

アレから、ティーンに捕らわれ眠らされた夏美。

不意打ちにも夢を見た。そして目が覚め思わず起きあがり頭を抱え苦笑いをし

「・・・夢か。もう、夢何ぞア、見ないと思つたんだがな。」と  
続け様に手をやり「・・・涙か。此れもとうに朽ち果てたと思つたんだが。」と呟き

「・・・一度闇に墮ちた私しやアでもまだ、人間の感情、が残つていたんだな。

そして夢の中で出てきた黒髪の男。其れはまさしくティーンと同じ顔だった。

思いだした。私しやアはあの男の言つとおり会つていて。しかも、ワカバと広州の大戦の後で両親が散つた後に。一人で走りまわつていた時だ。

其れも私しゃアが嫌いな満月の夜に。なあんで夢つてこいつも現実になつちまつんだねエ。あついて何もかも笑えねえよ。

すると玲が来て「目が覚めた?」と続け様に水が入ったコップを渡しながら「はい。大丈夫。毒なんて入つていないから。」とほほ笑んだ。

夏美は警戒しつつも水が入ったコップを受け取り「・・有難う。」  
そう言い飲み始めた。

玲「ねエ・・・君さ。結構警戒心が強いんだね。」

夏美「・・・・・気になるかい、? そんなに?」

玲頷き「・・・・・気になる」。

夏美フツと笑い「・・・じやア、そんなに気になるんだつたら。話すよ。此れはワカバのごく一部の仲間しかしない。此れが、私しゃアの下らん暗い過去、だよ。貴方には話せていいような気がするから。」  
う言い玲の前で話し始めた。

夏美自身の、暗い過去とは？

玲「第8夜。ティーンに捕らわれた夏美。そして夏美の夢と明かされる過去？」

「次章もどうぞ宜しくね。」

以上です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

## 第8夜。ティーンに捕りられた夏美。そして夏美の夢と醒かされる過去? (前書き)

今章は、少々暗めに入る予定です。

多分此方も長丁場の編集可能性あります。

「この循環は（適切でない）めんなさい。 もう一つの事です。」

## 第8夜 テイーンに捕らわれた夏美。そして夏美の夢と明かされる過去？

アレから、ティーンに捕らわれ眠らされた夏美。

不意打ちにも夢を見た。そして目が覚め思わず起きあがり頭を抱え苦笑いをし

「・・・夢か。もう、夢何ざア、見ないと思つたんだがな。」と  
続け様に目に手をやり「・・・涙

か。此れもとうに朽ち果てたと思つたんだが。」と呟き

「・・・一度間に墮ちた私しゃアでもまだ、人間の感情、が残つてい  
たんだな。

そして夢の中で出てきた黒髪の男。其れはまさしくティーンと同じ  
顔だった。

思いだした。私しゃアはあの男の言つとおり会つてゐる。しかも、  
ワカバと広州の大戦の後で両親が散つた後に。一人で走りまわつて  
いた時だ。

其れも私しゃアが嫌いな満月の夜に。なあんで夢つてこゝも現実に  
なつちまうんだねエ。あつていて何もかも笑えねえよ。

すると玲が来て「目が覚めた？」と続け様に水が入ったコップを渡

しながら「はい。大丈夫。毒なんて入っていないから。」とほほ笑んだ。

夏美は警戒しつつも水が入ったコップを受け取り「・・有難う。」  
そう言い飲み始めた。

玲「ねエ・・・君さ。結構警戒心が強いんだね。」

夏美「・・・・・気になるかい、？そんなに？」

玲頷き「・・・・・気になる」。

夏美フツと笑い「・・・じやア、そんなに気になるんだつたら。話す  
よ。此れは

ワカバのごく一部の仲間しかしない。此れが、私じやアの下らん  
暗い過去、だよ。貴方には話せていいような気がするから。」

玲「・・その前に一つ聞かせて。何で君は、‘戦っているの？’普  
通の女としての幸せ求めないの？」

夏美再びフツと笑い「・・・何で戦っているのかって、？其れは私しゃアの、下らん暗い過去話、聞けばわかるよ。」と続け様に「何で、普通の女として幸せを求める理由もね。」

と続け様に何かを思い出し「・・・そうだ。私しゃアの火炎風拳火炎風過去循環術があるからそいつを使ってみるかい？其れを使ってみるか？其れを使えば多分手つ取り早いよ。」と続け様に「・・・でも此れ

うなされる可能性もあるから滅多に使わないんだ。其れでも良いなら。

玲頷き「・・・構わないよ。」

夏美其れを見て「・・・OK！じゃ。行くよ。私の過去を彼に見せよ。火炎風拳火炎風過去循環術！」

そう言い玲は眼を閉じた。

そして夏美「・・・今から約一時間くらいかな。私しゃアの、下らん暗い過去話、を見てきてもうつよ。」

何故、‘戦うのか’？何故、私しゃアがこいつなつたのががきつと分かつても‘うえると思つよ’？」

そして携帯の時計を見た。夕方4時になつていた。

「・・夕方5時頃か。其れまでつらいもの見させると思つけど堪忍ね。」

と同時に夏美は気になつたのかセラス達の様子を透視（見て）いた。

ワカバ港。アーカードが率いるヘルシングとプラス夏美んとこの相棒であるライチュウ＆ムクホークコンビがドイツ第三部隊のグール共と香煉館とこの人工グールと対峙し続けていた。

夏美はその光景を見て軽く舌打ちし「・・私しゃアは、こんな緊急事態’に、相棒達の所’にも応援として行けねエのか！・」と掛け布団を握り締めた。

そして約一時間後……。玲が目を覚める。

夏美玲を見て「……気がついたかい？」と続け様に玲を見て涙を流していた事に気づいていた。

夏美は其れを見て何故か知らないが申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

そして玲「……君も、なんだかんだつらう思い、しているんだね。」

夏美フツと笑い「……もう慣れたさ。」

玲「……でも、そつは見えないけど。」

夏美「……それでも、私しゃアは、戦い続けなきやいけないんだ！」橘家本家の宿命故に

そして自分自身の「過去」の鎖を断ち切る為に。見たでしょ？私の過去を。」

玲頷き「姉貴分の悲痛な裏切りにより・仲間を奪われしまいには両親も奪われ・恋人達さえも奪われ

そして自分の、普通の女の幸せを、捨ててまで。「

夏美は思わず黙り込んでいた。

そしてベットから起きあがり窓のカーテンを少々開け窓を少し開け懐からタバコを取り出し火を灯した。

そして夏美「・・・夢の中で見た。玲さんだっけ? 私しゃアはあの男が言うとおり、約10数年前位、にあの男と会っている。もう、広州との大戦でワカバの末端だった頃に会っているんだ。其れも満月の夜に。両親が散つていったのも満月の夜なのさ。」

玲「・・・夏美さん。」

夏美両目を閉じフッと笑いながらタバコを吸い続けていながら「・・・此れで、分かつたろ? 何で私しゃアが基本的に、ワカバ以外の人間を警戒するのか。」其れは、信じる事があの時以来出来なくなつたからだよ。」

そして夏美はタバコを灰皿にもみ消し「・・・さてと、お話はおしまい。私しゃアはまた、戦場へ、戻らなきやいけないからさ。」そう言い支度し始め、「・・・私しゃアん所の(ワカバ)の管轄内で大変な事が起こっているんだ。リーダーとして幹部として行かなき

やならん。」そう言いギンガを懐にしまいこみ部屋を出よつとした。

すると玲が「……僕は、構わないんだけど」。彼は逃がさないんじやないかな、？」

夏美「……だつたらギンガ（こいつ）で一発さつきみたいにやるだけさ。」と続け様に「私しゃアが嫌いな事は相棒達を傷つけられる事だ！……」そう言い今度こそ部屋を後に玄関へと走りそして扉を開けようとした次の瞬間夏美の顔がしかめた。

するとディーンが再び夏美に金縛りをかけていた。

夏美「……ツ！……クソツ！……」

ディーンは夏美に近づき耳元で「……玲から逃げれても私から逃げれると思つなよ、？」と囁いた。

夏美必死でもがこうとした。

クソ！……！」んな時に……！」んな緊急事態なのに……！

行けないなんて……！……！

ディーンは夏美を再び眠らせさせつきとは別の寝室に連れて行つた。

第8夜。ディーンに捕らわれた夏美。そして夏美の夢と明かされる過去？完。

第8夜。ディーンに捕らわれた夏美。そして夏美の夢と明かされる過去？（後編）

今章も無事に更新完了致しました。

今、章もお読みいたたき有難いござります

其れには毎回の公演が主役となる（第二回）

アレから再びまたティーンの手により眠られた夏美。

そして・・・。

聞こえる馴染み兼相棒の声。

一 夏美（相棒）、「しつかりしろ！」

!!!!? 眼覚めてくれ!!!! お前さんは此れでせられる奴じゃないだろう!

頼む！！！！！戻つて来てくれ！！！！！ワカバとそしてヘルシングの為に！！！！！頼むから！！！！！頼むから！！！！！頼むから！！！！！頼むから！！！！！頼むから！！！！！

夏美はその相棒の悲痛な願いに目が覚める。

そして夏美「・・・・相棒、!!今行くから!!何としても行くから待つていろ!!!!」「そしてティーンが居ない事を確認し脱出を試みる。

果たして夏美は無事に脱出しセラス達に加勢できるのか！？

夏美「第9夜。夏美ティーンの魔の手から無事に脱出?そして・・・  
再びヘルシングの緊急任务へ!?(前編)」「次章もどうぞ宜しく  
!」

以上です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

## 第9夜 夏美ティーンの魔の手から無事に脱出？そして・・・再びヘルシングの

今章は、多分前後篇に訳させて書かせて頂く予定です。

ライカが、声、で出演予定です。長丁場の編集可能性ありで・・・。

サブタイトルちょっとと変えました。

ひょっとしたら残酷シーン等あります。

第9夜。夏美ティーンの魔の手から無事に脱出?そして・・・再びヘルシングの

アレから再びまたティーンの手により眠らされた夏美。

そして・・・。

聞こえる馴染み兼相棒の声。

一 夏美（相棒）、「しつかりしろ！」

眼覚めてくれ!――お前さんは此れでやられる奴じゃないだろ?!

頼む！！！！！戻つて来てくれ！！！！！ワカバとそしてヘルシングの為に！！！！！頼むから！！！！！頼むから！！！！！頼むから！！！！！

夏美はその相棒の悲痛な願いに目が覚める。

そして夏美「・・・・相棒、！－今行くから－！－何としても行くから待つていろ－！－！」

そして、ディーンが居ない事を確認し脱出を試みる。

夏美はドアの所に行き開けようとしたがびくともしなかった。

夏美「・・・チイ！－！鍵がかかってら－！」

するとカツーンカツーンと音がした。

夏美すぐさま透視した。

夏美「－！－！－！」

ヤバい！－！－！－！－！

クソッ！－！－！－！－！「うなつたら一か八かだ！－！

透視しながらギンガを構えそして腕を狙う。

そして・・・・・。引き金を引き銃弾が放たれた。

と同時にディーンの左腕に銃弾がかすり血が滴れる。

ディーンは其れを見て慌てずにそしてまるで楽しむかの様に「・・・面白い。」と呟いた。

夏美再びチイと軽く舌打ちをし「・・・かすった程度か」。する  
と窓を割り寝室から出て行つて

愛車の所に行きすばやく乗り込みワカバ港を田指して走りさつて行  
つた。

ディーンは其れを見てニヤリと笑い「・・・・今回ばかりは大人し  
く退いてやるう。だが、今度会つた時はそつはいかんぞ？橘家本家

の小娘。」

玲と同じく私の所へと墮としてやう。

すると玲が来て「・・・血。出でるよ。大丈夫? ディーン?」

ディーン玲を見て「あア。此れくらい平氣だ。だがな・・私は基本的に銀の銃弾はきかん。まア・・

あれは、特殊、そつだからな。」そう言い、「行くぞ。玲。」

玲額きディーンの後を追いリビングへと行つた。

そしてリビングに着いた椅子に座りディーンは夏美を再び透視（見て）いた。

玲はディーンの足にそつとすり寄つて來た。

一方、夏美はアレからワカバ港に到着していた。

ベルナドット「あアアア！……クソオオ！……やつてもやつても  
わんさか出てきやがる！……」

そいつ言い銀の銃弾をお見舞いして行つた。

と同時に1人の人工グールがベルナドットに飛びついて來た。

するとその人工グールは突然燃えて行つた。

ベルナドット驚いて「！」、「！」  
と同時に「夏の嬢ちゃんか！？！」

夏美申し訳なさそうに笑い「・・・すみません」とござりました。ベルの旦那。大丈夫ですか！？」

ベルナドット「たあく。遅せえつうの！？」と笑いながら返した。

夏美は苦笑いをしつつも一息ついた。

と同時にドイツの第三部隊と人工グール達を夏美は睨みつけ「・・・良くもうちの管轄内で大暴れしてくれたね！？！私しゃアが相手してやるよ！？」

そう言い一気に殺氣が出た「このワカバのリーダー兼幹部そしてヘルシング日本支部の橘夏美がな！？」

ドイツ第三部隊は其れを見て一気にこわばり体が動かなくなつた。

それも人工グール達もそうだった。

アーカード其れを見てニヤリと笑い「ほう。」

そしてドイツ第三部隊の一員が「えエエー！――！何をしている！――相手はたかが、人間の小娘、だ――退くな――我々の偉大な少佐殿に勝利の報告を何としてもするのだアア――かれエ――！」

一気にドイツ第三部隊の連中が夏美に突進してきた。

夏美「・・・・・愚かな奴ら、私しゃアの炎の中で眠るがいいさ――！」

そう言い夏美は一気にドイツ第三部隊の連中を燃やして行つた。

ベルナドット其れを見て「すげえな。」とあぜんとしていた。

セラス「やっぱり夏美さんは、色々な意味、で凄いですね。」

アーカードは其れを見てニヤリと楽しそうに笑つた。

夏美は只其れを見て黙つてタバコに火を灯した。

一方、人工グールも夏美に一斉に襲いかかつて行つた。

だが、夏美はタバコの煙を吐き出し懐からギンガを取り出し一気に人工グール達に銀の銃弾を放ち続けた。

そして頭と心臓にぶち込んだ。

と同時に血飛沫が舞う。そして、夏美の頬に返り血いつの間にかついていた。

そして、チップが現れた。

夏美はセラスを見て「・・悪いが、回収してくれ。」

セラス領きチップの回収を始めた。

辺りはもうすっかりドイツ第三部隊の連中も人工グールの連中も（今の所はひとまず）

夏美は無言のままタバコを吸っていた。

そして夏美を見たセラスが「夏美さん。すべてチップを回収し終わりました。」

夏美「・・・」解した。」と続け様に「」の後どうする？？？」

セラス「ひとまず戻ります。」

夏美領き「あいよ。」

そう言いタバコを口に加え直して愛車の方にゆっくり歩き始めた。

と同時に夏美は手の甲で頬についた返り血を拭い鼻の所に持つて行つた。

「・・・血臭い。」

「この匂いはやはり嫌いだ。」

「過去の傷をえぐり出す。」

そう心の中で眩き愛車へと乗り込んでひとまづワカバ兼ヘルシング日本支部のアジトに戻つて行つた。

ディーンに透視（見られ続けられているとも）知らずに・・。

第9夜。 夏美ディーンの魔の手から無事に脱出？そして・・・再びヘルシングの緊急任務へ！？完。

## 第9夜 夏美ティーンの魔の手から無事に脱出?そして・・・再びヘルシングの

今章も無事に更新完了致しました。

つて・・ライカは声しか出ませんでしたね（笑・・・）

すみません。（汗）

其れではほぼ毎回のグタグタの予告風をどりづ（笑）

アレから戻った夏美はシャワーを浴び血を落した。

夏美「・・・・・・・・・・・・」

そしてシャワーから出て着替えて部屋のソファーに「ロロンと寝つ転がつた。

すると、まがまがしい気配が、夏美の部屋を包み込んだ。

夏美は起きあがりギンガを構えた。

するとクククと笑い「ひでエなア。夏美イ。久々の、再会、なのに  
よオ。」

夏美「・・・・・・・・・・・・そつその声は・・・・・?」

まさか！！？

そう声の主の方に振り向くとタバコを吸っていた高杉がニヤリと笑い

「よオ。俺の黒猫ちゃんよオ。」

夏美「・・・晋助様。」

夏美「第10夜。夏美久々に高杉との再会！？。」「次章もどうぞ宜しくね。」以上です。其れでは、次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

## 第10夜。夏美、高杉との再会ー?。(前書き)

今章は、夏美がアジトに戻り高杉さんと再会予定です。

長丁場もしくは編集可能性あります。

## 第10夜。夏美、高杉との再会ーー?。

アレから戻った夏美はシャワーを浴び血を落した。

夏美「…………。」

そしてシャワーから出て着替えて部屋のソファーにプロンと寝転がった。

すると、まがまがしい気配が、夏美の部屋を包み込んだ。

夏美は起きあがり、ギンガを構えた。

するとクククと笑い「ひでエなア。夏美イ。久々の、再会、なのによオ。」

夏美「…………そつその声は…………？」

まさか！？

そう声の主の方に振り向くとタバコを吸っていた高杉がニヤリと笑い

「よオ。俺の黒猫ちゃんよオ。」

夏美「……晋助様。」

あア・・・・・。まだ、再会したくなかったのこ。

どうして時間はいつも残酷なのだろう。

どうしてこうなってしまったのだろう。

今はまだそつとしておこで欲しかったのこ。

夏美はアレから、無言のまま貫いていた。

すると高杉が楽しそうに夏美に近づいてきて頬をさすった。

夏美はまるで、過去を思い出したかのよつこ、高杉の手を持ち頬をすりよせた。

まるで、‘猫のよつこ’。

高杉は其れを見て満足そうに笑つて夏美を抱きしめソファーに座り夏美の頭を己の膝に乗せた。

と同時に‘寝てる。最近ろくに寝れてねんだろ？俺アがまア・・・日が昇る前まで、だが側にいてやるよ。’ そつ言い頭を撫でて夏美は眼を閉じた。

まるで安心したかのよつこ。

高杉は夏美の頭を撫で続けていた。

そして「・・楓（母親）に少しだけだが似て来たなア。」とぼそつと言つた。

と同時に夏美の首筋に顔をうずめ舐めて「・・悪イなア。」そう言いい牙を立てて夏美の血を少量だが吸つた。

そして・・。

高杉は自分の指を切り血を出し夏美の首に自分の血で蝶の紋章を描いた。

その紋章が夏美自身の体にしみわたつた。

と同時に窓を見て「・・・そろそろ、日が昇るな」。そして夏美の頬に軽くキスをし「・・・またなア。」

そう言い去つて行った。

と同時に夏美は眼が覚めた。

高杉の香りが辺りを包み込む。

夏美首元をさすりながら「・・・晋助様の香りが残つてゐる。」  
そして首に手をやり血を補給し、序に

冷蔵庫に行き血を製作する鉄分ドリンクを取り出して飲み始めた。

と同時にタバコに火を灯し「・・・香残すなんてあんまりだよ」。  
晋助様。また、会いたくなつちゃうじやないの。」と小声で呟いた。

そしてテーブルに置いてあつた鏡を見て「・・・！」

そこには高杉が己の血で描いた蝶の紋章があつた。

夏美「・・・ハハ。もうこれで‘逃げられネエ’つてか。」と苦笑いをした。

‘どこまで独占力が強いんだろうね。’‘私しゃアのもう一人のご主人様（晋助様）は’。

と心の中で呟いてた。

第10夜。夏美、高杉との再会ー？。完。

## 第10夜。夏美、高杉との再会ー?。 (後書き)

今章も無事に更新完了致しました。

お付き合い下さってありがとうございます。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告をどうぞ (笑)

此処は、香煉館の管轄しているホテルの傘下のホテル。

(表では公表していない (日本では) )

12階の部屋で一人の男が窓を見ていた。

黒髪で黒のTシャツに黒のスーツそして黒のチーム。そして黒の靴。  
で左腕には黒の龍の刺青が施されていた。

そう、この男は香煉館の館主である黒龍。

黒龍「・・・此処に俺の相棒が。待っている。炎龍。」  
パートナー

そしてこの男は夏美が隼人の後を継いだつて事を知っている。

次世代炎龍つて事も。

其れば再び夏美に、危機をもたらす前兆、にすぎなかつた。

黒龍「第11夜。香煉館始動？そして、日本吸血鬼界本格的迎え撃つ？」

「次章もどうぞよろしく。」

以上です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

第11夜。遂に香煉館始動？そして、日本吸血鬼界本格的迎え撃つ？（前書き）

少々サブタイトルを変更しました。

今章は、オリの香煉館が出てくる予定です。

長丁場のもしかしたら編集可能性あります。

後半にもしかしたらまた高杉さん方が出てくる可能性があります。

多少微裏？等ある予定ですので苦手な方はお引き取り下さります様  
お願い致します。

## 第11夜。遂に香煉館始動？そして、日本吸血鬼界本格的迎え撃つ？

此処は、香煉館の管轄しているホテルの傘下のホテル。

（表では公表していない（日本では））

12階の部屋で1人の男が窓を見ていた。

黒髪で黒のTシャツに黒のスースそして黒のデニム。そして黒の靴。  
で左腕には黒の龍の刺青が施されていた。

そう、この男は香煉館の館主である黒龍。

黒龍「・・・此処に俺の相棒が。待つていろ。炎龍。」

そしてこの男は夏美が隼人の後を継いだって事を知っている。

次世代炎龍つて事も。

其れは再び夏美に、危機をもたらす前兆、にすぎなかつた。

一方、その香煉館の管轄している傘下のホテルの外ではライカが隠  
れながらではあるが12階を見ていた。

と同時に黒龍の姿を確認するとタバコに火を灯し「……やつは  
来ていたか」。

面倒な事になつたもんだ。只えさえ、夏美（相棒）は他の吸血鬼共  
に、狙われているツテエ、のによ。

まア・・・高杉様（あの方）が色々と対策して下さつたみたいだし  
問題ねエか。

すると背後から音がした。

ライカ気配を察知したのか急いで氷棒を出すが、何者かに先を越さ

れた、背後には拳銃を突きつけられていた。

すると男の声でクツと笑い「……おつと、動くんじゃアねエゼ?」

ライカはその声に聞こえがあった。

そして「・・・ジンか?」

ジンククと笑い「・・・」名答。俺だ。」

ライカフツと笑い「安心しなよ。何もしねえよ。只・・・黒龍の見  
張り見てエなもんをしに

来たからさ。だから・・その物騒なもん(ベレッタ)しまつてくれ  
ねえか?私しゃアはこんなとこでいたした起こしたくねえからさ。」

ジンニヤツと笑いベレッタを懐にしました。

と同時に「・・・何でお前さんが此処にいる、？」

ジン「俺も、香煉館の大将がどんな奴か見に来たのさ」。

ライカタバコを吸いながら「・・・・なるほど。」

そしてジンも「お前は？」

ライカ再びフツと笑い「・・・仕事よ、。」

ジン「・・・なるほどな、。」

するとライカの携帯が鳴つて「悪いね、」

そして「・・・私は、ハイ。今の所、目立つた動きは見せておりません。」ハイ。分かりました。

ひとまず引き上げます。其れでは、」そう言いつつと通話ボタンを押し、携帯をパタと閉じてポケットにしました。

ライカ「悪いね。ジン。もうちょい話しあしたかつたんだが、上から戻つて来いって言われたもんでね。」

ジンニヤリ「そうか。で?上って何のはじつちだ?本職か? (ワカバ) それとも、副職か? (ヘルシング)」

ライカフツと笑い「…『想像にお任せするよ』。」と続け様に  
「じゃ、また。」そう言い戻つて

行つた。

1人その場に取り残されたジンはチラとホテルを見てそしてフツと  
笑い「…いるんだろう、?」

新一?と闇に声をかけた。

すると新一が苦笑いをして「あらひ、ばれちまつた、?ジン。」  
と現れてジンの側に寄つて來た。

ジンククと笑い新一の腕をつかみ「あア。‘ばればれだ’。お前の‘匂い’はすぐにわかるぜ？」

だつてよ、俺の血が入つているからなア。」と耳元で囁いた。

新一は嬉しそうに笑つて「そろそろ。俺たちも行こいつ。」

ジンタバコに火を灯し「あア。 そうだな。」 そう言い新一と共に闇へと消えて行つた。

一方、ライカは支部長室に行きインテグラに先程の報告をしていた。

インテグラ葉巻を吸いながら「・・なるほどな。まだ、目立った動きなしど。」

ライカ領き「ハイ。インテグラ様。後は先程携帯でご報告させて頂いた通りです。」

インテグラ領き「分かった。ご苦労だったな。ライカ。もひとつがつていいぞ？」

ライカ一礼をし支部長室を後に、自分の部屋に戻りつとした。

だが「・・ちよいと、夏美（相棒）の様子を見てくるか。」と呟き夏美の部屋に向かった。

一方、夏美は相変わらず高杉がつけた、高杉の血の蝶の紋章、をじつと見ていた。

そして、触りながら「・・晋助様。」と寂しそうに呟いていた。

と同時に首を横に振り「何、女女しくなつていてるんだ！！私しやアはーーーー」とそしてソファーに

座りタバコに火を灯した。

一方、高杉はと言つと椅子に座り相変わらず夏美の様子を見ていた。

傍らには山崎を膝元に置いていた。

山崎も夏美の様子を見ていてクスクスと笑い「、そんなに恋しいなら、高杉さんの所に戻つてくれればいいのに。」

高杉もその言葉を聞きククと笑い山崎の頭を相変わらず撫でながら「、そつそつせる為にあえてもう一つ

鎖、をつけたのさ。此れであいつはワカバやヘルシングや実家以外何処にも行けネエだらう。」

山崎も再びクスクス笑い「じゃア、高杉さん、前もつてこいつなる事予想していたんですか？」

高杉ニヤリと笑い「あア。寧ろ、あいつは、俺なじじゃア生きて行けネエよ。」

山崎高杉の膝元にすり寄つて「そうですね。あの子はもう、貴方に

依存していますよ、高杉さん。」

其れを聞いた高杉は山崎を見てクククと笑い、「お前もだらう、？」  
退?」

山崎クスと笑い「え?。そうですよ。俺も、です。」

高杉其れを聞いて満足したのか山崎を抱き寄せてキスをした。

そして、キス後に高杉は山崎の首筋に口を持っていき舐めて牙を立てて血を吸い始めた。

するとノック音がして高杉が気づき山崎の首筋から口を離して「・・・  
誰だ?」

「高杉。俺だ。」と土方の声がした。

高杉確認し「入れ。」そつ言いつて土方に入るよう促した。

と同時に土方が高杉の部屋へと入つて行つた。

## 第11夜。遂に香煉館始動？そして、日本吸血鬼界本格的迎え撃つ？（後書き）

編集なしでしたね。（苦笑・・・）

今章も御付き合いで下わこおして有難う、「やわこおました。

・・襲撃シーンなかつたですね（苦笑・・・）

すみません。当初は入れる予定でしたが・・・。

次章こそは入れる予定です。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告をどつぞ（笑・・）

アレから土方はヘルシングが追つてる香煉館の動きが気になつたのか。

独自で調べていた。

其れを高杉に報告していた。

高杉「・・・そうかい。黒龍の奴がねエ。」

土方タバコに火を灯し「あア。此処日本にいる事は間違いねエ。」

高杉もタバコに火を灯し「で?奴の狙いは?」

土方タバコ吸いながら「恐らく夏美だらうよ。」

高杉其れを聞いて「…何だと?何で夏美が狙われなきやアならねエ?」

土方「その理由は、夏美<sup>あいづ</sup>が次世代炎龍だつて事よ。嘗ての夏美<sup>あいづ</sup>の婚約者だつた男が炎龍だつて事であいつがそれを受け継いだのよ。

元々、奴のパートナーでもあつたからな。」

高杉ククと笑い山崎を見て「夏美<sup>あいづ</sup>は、こいつと同じ俺アのもの、だ。」

ワカバの奴ら以外には、絶対に渡さねエ、よ。」とタバコを吸いながら言った。

一方、夏美はライカから黒龍が日本入りしている事を伝えてた。

夏美は其れを聞いて只驚きを隠さないでいた。

土方「第12章。夏美に再び危機?そして黒龍の影?と同時に高杉達も動く?」「次章もどうよろしくな。」

## 第12夜。夏美に再び危機？そして黒龍の影？同時に高杉達も動く？（前書き）

今章は前半は高杉さん達が出て・・・。

後半はまたワカバコンビが出てくる予定です。もしかしたらまた長丁場の編集可能性あります。

第12夜 夏美に再び危機？そして黒龍の影？同時に高杉達も動く？

アレから土方はヘルシングが追つてる香煉館の動きが気になつたのか。

独自で調べていた。

其れを高杉に報告していた。

高杉「・・・そうかい。黒龍の奴がねエ。」

土方タバコに火を灯し「あア。此処日本にいる事は間違いねエ。」

高杉もタバコに火を灯し「で？奴の狙いは？」

土方タバコ吸いながら「恐らく夏美だらうよ。」

高杉其れを聞いて「・・・何だと？何で夏美が狙われなきやアならね

エ？」

土方「その理由は、夏美<sup>あいつ</sup>が次世代炎龍だつて事よ。嘗ての夏美<sup>あいつ</sup>の婚約者だつた男が炎龍だつて事であいつがそれを受け継いだのよ。

元々、奴のパートナーでもあつたからな。」

高杉ククと笑い山崎を見て「夏美<sup>あいつ</sup>は、こいつと同じ俺アのもの、だ。ワカバの奴ら以外には、絶対に渡さねエ、よ。」とタバコを吸いながら言った。

一方、夏美はライカから黒龍が日本入りしている事を伝えてた。

夏美は其れを聞いて只驚きを隠さないでいた。

そして、夏美は頭を抱えながらソファーに座りこんでいた。

ライカはその様子を見て「……夏美。」と呟いていた。

と同時に夏美の側に寄つて来て肩をポンと叩きながら「大丈夫か？相棒？」

夏美苦笑いをしながら何時もの様にタバコに火を灯しながら「あア。大丈夫だ。すまねエな。相棒。

色々と心配かけちまた。」

ライカフツと笑いながらタバコに火を灯しつつ「……其れはおあいこ様よ。私しゃアだつてお前さんに時をり心配ばかりかけさせているんだ。其れに・・相棒の前に馴染み同士でもあるからな。私しゃア達はさ。」

夏美フツと笑い「・・そうだつたな。」

そう・・・・。

ライカ（「こいつ」）と夏美（「私しゃア」）は馴染み同士。

お互に、表と、闇を行き氣しながら生きてきた。

だから・・・・・。

信じる事が出来る。

ここには・・・。

大丈夫。

と心底思つ私しゃアが居る。

すると、緊急事態警報が鳴つた。

そしてセラスが現れ「夏美さん！ライカさん！…香煉館です！」

夏美とライカは軽く舌打ちして互いに顔見合せ頷きいた。

そして雷外も慌てて「夏美の姉御ツ！…ライカの姉御ツ！…」、  
黒龍の野郎もいるウ！…！」

夏美其れを聞いて驚いて固まつた。

ライカ再び舌打ちをし「雷外！…！」

雷外「あいよ！！！！！」

ライカタバコをもみ消し再び火を灯しながら「兄様に<sup>にいさま</sup>ご報告だ！！  
急げッ！！！」

雷外領き「了解！！」

そしてセラスが第三の眼を使い探し始めた。黒龍を。

すると玄関の所に香煉館の連中を連れてその前に黒龍がいた。

セラス 夏美達を見て「夏美さん……ライカさん……黒龍は部下を連れて玄関の所にいます……！」

夏美達も戦闘態勢になり「OK！！」

そして、夏美はライカを見て「さて、行きますか？「相棒」」

ライカもフッと笑い「あア。行こうか。‘相棒’」

そう言い夏美的部屋を後にした。

と同時にセラスもフツと笑い「・・・いろんな意味で困ったお2人さん、ですね。」

そう言いハルコンネを担いで「さて、私も行きますか。」

「闘争の場所へと、」

セラスの深紅色の瞳が、狂氣に満ち溢れてニヤリと笑っていた。

一方、其れを見ていたものが居た。

高杉と山崎と土方だった。

高杉タバコを吸いながらクククと笑い「アーカードの奴、とんでもねエ獣、を飼つてやがるなア。」

土方タバコを吸いながら「高杉。この小娘、元人間だ。」

土方から其れを聞いた高杉は再びクククと笑い「そつかイ。」

すると山崎が「で?この後どうあるんです?高杉さん?土方さん?このまま見て黙っている俺達じゃア

ないでしう?」

高杉其れを聞いて「クククハハハハ!!何だア?退?お前エモ、暴れたくなつたのかア(遊び)、?」

退「え、えエ。其れもありますが・・何より、部外者である香煉館、（奴ら）が、俺たちの管轄内で好き勝手されるのが迷惑なだけなんですよ。」と続け様に「それに、香煉館の黒龍の奴は夏美さんの事自分のものだつて思いこんでいるみたいだし・・・此処はつてね。」と若干不機嫌そうな顔で言つた。

彼女は（夏美さん）は高杉さんのものなのに。

高杉タバコ吸いながら「ヤリと笑いながら「確かになア。そうだなア。あの、小僧（黒龍）には、あいつ（夏美）が誰のものか分からせねエといけねエからなア。」

と続け様に土方を見て「・・・」うちの連中共とお前ん所の連中に声かける。俺達も行くぜ？

土方其れを聞いてニヤリと笑い「了解した！」そう言つて高杉の部屋を後にした。

高杉はニヤリと笑い「さて、そろそろ俺達も準備するかね、乐しご祭りのなア。」

俺達の管轄内で暴れる何ザア それなりの覚悟はつけやんと出来ているんだろうなア？

香煉館の小僧め。

山崎も嬉しそうに高杉の所に再び寄つて行つた。

第12夜。夏美に再び危機？そして黒龍の影？と同時に高杉達も動く？完。

## 第12夜。夏美に再び危機？そして黒龍の影？同時に高杉達も動く？（後書き）

今章も無事に更新完了致しました。お付き合いで下さり有難うござります。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告をばつぞ（笑）

香湾の管轄する香煉館の突然の襲撃を受けたワカバそしてヘルシング日本支部。

そして・・・・。

黒龍「・・・ついに見つけた」。‘俺の相棒’

そして‘炎龍。いや・・夏美。’

その事を聞いた夏美は‘・・・ツ！’その中国名の発音で私し  
やアを

私しゃアを・・・・。

— ‘ 夏美 シャアアメイ、私のかわいい妹分、 —

夏美凄い形相でギンガを黒龍に向けて「呼ふんじゅアアア ねえエエ  
!!!!!!」と叫びながら撃ち始めた。

ライカ「夏美ッ!!!!!!」

クソ!!!!あいつは（黒龍）は多分知らねエんだ!!!!あいつが何  
故、シャアアメイ、と呼ばれるのが嫌いなわけを。。。

すると黒龍の前に一人の少女がたつた。

夏美「どけッ!!!!!! 小娘!!!! 今の私しゃアは、機嫌が少々悪  
い!!!!」

するとその少女は両手を握りしめながら「・・・黒龍様を、いじめ  
ちやア・・。」

ライカハツとして「ヤバい！！避けろ相棒！！！」

夏美「え？」

少女「駄目エエエエエ…………！」と泣き叫んだ。

すると地面が行き成りもつてそして剣の様になつて「黒龍様をいじめるなら

例え夏美様（シャアアメイ様）でも許さないもんッ…………！」

夏美「・・クソ！――！」

この嬢ちゃん、地面使いか！？

すると夏美「火炎風拳！！！火炎風爆龍波！！！」と攻撃を開始しただが。

少女は「残念。私の地面術はちょっと特殊でね。夏美様の、炎と雷は通用しないよ。後、他の4代風拳のもね。」とクスクス笑った。

そして指でクイとやり地面の剣を夏美に向けて「・・ちょっと、お痛しないと分からぬみたいだから。」黒龍様には悪いけどちよつとやりせてもらうね。」 そう言い夏美に向けて振り下ろした。

夏美「チイ！－！」 そう言いギンガを連射した。

だが通用しなかつた。

夏美

クソ！－！なんてこつた！－！

此処までかい！？

少女「黒龍様の言つ事聞かないからいけないんだよ？」

と言つた。

次の瞬間ドシュツ！－！と突き刺さる音がした。

そしてワカバには「夏さアアアン！－！リーダーアアア－！－！相棒オオ！」

とさざまな夏美を呼ぶ声がした。

だが、夏美は無傷だつた。

すると「たあくよオ。何あきらめてんだア？お前HいらしへねHじ  
やアねH

か。夏美。」

左腕から血が滴れた。

夏美は恐る恐る眼を開け自分の前にいる人物に驚いた。

そして・・

「ひつ、土方の兄貴！？」

土方ニヤリと笑い「よオ。夏美イでかくなつたじやねHか」

と同時に地面の剣を左手から抜き取りながら耳元でククク「この  
傷の借り、は、ちゃんと返してもうつからなア、覚悟しておけよ  
？」と囁き呟いた。

夏美顔真っ赤にした。

と同時に心の中で。

兄貴と晋助様性格が似ていると感つのは私しゃアだけかアア！？

つてか絶対に一緒だよ！！！！瞳孔もある程度開きかかっているしわーー

すると土方ニヤリと笑い「何だ？」、そんなに高杉の奴も呼んでほしいのか？」

夏美冷や汗だくだくだった（笑）

夏美「だ、第13夜。ワカバとそしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃され・・そして高杉と土方助つ人で登場！？」（前編）」

「じ、次章もどうぞ宜しくね！ーー」

以上です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

第13夜。ワカバとしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃され・・そ

此方もお久しぶりでしょつか。

今章は残酷シーン等ある予定です。

長丁場の編集可能性もあります。前後篇でお届けする予定です。

第13夜。ワカバとしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃され・・そ

香湾の管轄する香煉館の突然の襲撃を受けたワカバとしてヘルシング日本支部。

そして・・・・・。

黒龍「・・・ついに見つけた」。俺の相棒、

そして「炎龍。いや・・・夏美。」

その事を聞いた夏美は「・・・ツ！・！・！その中国名の発音で私し  
やアを

私しゃアを・・・・・。

一　夏美　<sup>シャアアメイ</sup>  
　　私のかわいい妹分、

夏美凄い形相でギンガを黒龍に向けて「呼ぶんじゃアアアねえエエ  
!!!!!!」と叫びながら撃ち始めた。

ライカ「夏美ッ!!!!」

クソ!!!!あいつは（黒龍）は多分知らねエんだ!!!!あいつが何故、シャアアメイ、と呼ばれるのが嫌いなわけを。。。

すると黒龍の前に一人の少女がたつた。

夏美「どけッ!!!!!!小娘!!!!今のおしゃアは、機嫌が少々悪  
い!!!!」

するとその少女は両手を握りしめながら「・・・黒龍様を、いじめ  
ちやア・・。」

ライカハツとして「ヤバい!!!避けろ相棒!!!」

夏美「え?」

少女「駄目……！」と泣き叫んだ。

すると地面が行き成りもつてそして剣の様になつて「黒龍様をいじめるなら

例え夏美様（シャアアメイ様）でも許さないもんッ！」

夏美「・・クソ！-！」

この嬢ちゃん、地面使いか！？」

すると夏美「火炎風拳！-！火炎風爆龍波！-！」と攻撃を開始しただが。

少女は「残念。私の地面術はちょっと特殊でね。夏美様の、炎と雷は通用しないよ。後、他の4代風拳のもね。」とクスクス笑つた。そして指でクイとやり地面の剣を夏美に向けて「・・ちょっと、お痛しないと分からぬみたいだから。、黒龍様には悪いけどちょっとやらせてもらひうね。」そう言い夏美に向けて振り下ろした。

夏美「チイ！-！」そう言いギンガを連射した。

だが通用しなかつた。

夏美

クソ！……なんてこいつた！……

此処までかい！？

少女「黒龍様の言つ事聞かないからいけないんだよ？」

と言つた。

次の瞬間ドシュツ！……と突き刺さる音がした。

そしてワカバには「夏さアアアん！……リーダーアアア……相棒オ  
オ！……」

とせまざまな夏美を呼ぶ声がした。

だが、夏美は無傷だった。

すると「たああくよオ。何あきらめてんだア？お前HいらしへねHじ  
やアねH  
か。夏美。」

左腕から血が滴れた。

夏美は恐る恐る眼を開け自分の前にいる人物に驚いた。

そして・・

「ひつ、土方の兄貴！？」

土方ニヤリと笑い「よオ。夏美イでかくなつたじゃねHか」

と同時に地面の剣を左手から抜き取りながら耳元でククク「この傷の借り、は、ちゃんと返してもらつからなア、覚悟しておけよ？」と囁き呟いた。

夏美顔真っ赤にした。

と同時に心の中で。

兄貴と晋助様性格が似てゐるやうになると感つたのは私しゃアだけかアア  
！？

つてか絶対に一緒だよ！……瞳孔もある程度開きかかっているし  
や！…

すると土方ニヤリと笑い「何だ？」そんなに高杉の奴も呼んでほし  
いのか？」

夏美冷や汗だくだくだった（笑）

土方ニヤリと笑い「もちろん。俺だけじゃアねエんだぜエ？此処に  
いるのはよオ。」

すると「十四郎様アアア！……夏美様アアア！……」、『無事つ  
スカアアア！……？』

ライカ「ん？あの声……。」

そして、夏美も心の中でまさか！？

と高杉の手下である、紅い弾丸、の異名を持つ来島また子が現れた。

ちなみに彼女は人間である。何故高杉の所にいるかは今の所不明。

土方ニヤリと笑い「よオ。また子。大丈夫だ。」

また子はホッとしたが・・土方の腕を見て血が滴れた。

すると腰の所からのホルダーから一丁拳銃を取り出し「誰だアアア  
！！！！十四郎様に傷をつけた奴はアアア！！！！！晋助様  
と十四郎様に傷をつける奴はこの来島また子が断じて許さないっス

！！！」

と続け様に「さアーー出でへるッスーーー！」

するとライカが「あ、あのさーー来島さやん。」

また子その声を聞いて「あ、ライカ様ーーお久しづりつスーーお元気そうでなによりつスーー！」

ライカ「あアーー久しづり。つてーーひとつ聞いて良いかな? もしかしてーー高杉様も見えてる?」

また子頷いた。

と同時に夏美を見て苦笑いをしながら「・・・だとよ。相棒。」

夏美は其れを聞いて頭を抱えながらそのままうなだれていた。

と同時にライカ「・・・あア、因みに来島ちゃん。土方様はね夏美を庇つて下さったんだよ。ホレ・・・

言いにくいんだが、黒龍の側にしがみついているこの嬢ちゃんがそ  
うだ。」

とライカは黒龍の側でしがみついている少女を見た。

少女の名は藍明アイミン少女かな黒のチャイナドレスを着ている。

ちなみに彼女も人間で・・香湾で1人途方に暮れた所を黒龍に拾われる。

また子は其れを見て「ん、んな！？」、こんな子供つスか！？」  
ガキ

ライカ頷きながら苦笑いをし「信じられねえだろうが・・・そんなんだなア。」と言つた。

するとまた子が「いくら、子供ガキでも十四郎様方を襲うなんて絶対に許せないッス！！！」

そう言いながら藍明に銃口を向ける。

藍明「・・・私、悪くないもん！――黒龍様をいじめよつとしたから  
そしていつ事聞いつけとしなかつたから

やつたんだもん！！

すると後ろから「いけませんよ。また子わん。子供には優しくしないと・。」

また子その声を聞きゲツ顔を引きつり「・・・何でアンタもいるんっスか！？武市変態！？！」

すると「変態じやない。フリーストです。」と武市変平太が現れた。

武市「つてか・・・先輩をつけろ――このヤロウ――」

土方クククと笑い「相変わらずだなア。お前等。」

するとアーカードが土方の所に来て「久しいな。土方。で？何故お

前達が此処にいる?「

土方タバコに火を灯し「よオ。アーカード。いや、此処は日本で此処も一応俺等の管轄内だからな。

よそ様（香港）の連中に好き勝手をせるわけにはいかねエと思つてなア。」と続け様に「其れに・・。

夏美（ひつじ）に手を出されてちよいとうちの所の大将（高杉）が大方機嫌悪くなつちまつているからなア。」とクククと笑いながら夏美を見て言つた。

アーカードもニヤリと笑い「・・なるほど。」

すると夏美ははア・・と軽くため息をつき黒龍を見て「・・黒龍。アンタ・・、私しゃア、じゃなく、

本当は、彼が、良かつたんじゃないの?」と言つた。

夏美が言つた、彼とは、？

第13夜。ワカバとそしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃され・・そして高杉と土方助つ人で登場！？（前編）完。

# 第13夜。ワカバとしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃され・・そ

今章も無事に更新完了しました。

今章も御付き合い下さいまして有難うござります。

さて、其れではほぼ毎回のグタグタ予告をどうぞ（笑）

アレから香煉館の連中に襲撃を受けたワカバとしてヘルシング日本支部。

そして土方達が登場しそして夏美は、自分を欲しがっている黒龍に  
対して

「私じゃアじやなくて、本当は、彼が、良かつたんじやないの  
？」

と言った。その彼とは・・・そつ今は亡き夏美の恋人兼婚約者だった

隼人だった。嘗ての炎龍と呼ばれ黒龍の一時のパートナーだった。

すると黒龍は「・・・確かに、俺は、彼が良かつた、だが、今はもう、彼はいない、だが、俺はお前も好きだ」。

夏美「・・・ごめん。私じゃアは、お前さんが嫌いだ。どうも好きになれん、

私しゃアは、ワカバとヘルシングに、仕え続けるだけだ！！！そして・・・

昔も今も・・・私しゃアの、もう一つの居場所は、

すると背後から「夏美。」と呼ぶ声がした。

其処には高杉が居た。

高杉が山崎を引き連れてククと笑い、「今も昔もお前のもう一つの居場所は

俺アの所だ。」、「そうだろオ？」

夏美は其れを聞いて「・・・晋助様。」

そうだね。私しゃアは。

今もそしてあの頃も晋助様の所が私のもうひとつの中所だった。

と続け様に黒龍を見て「・・・だから、悪いがアンタの所には行けない。」

すると其れを聞いた黒龍はフツと笑い「致し方ねエな」。そう  
言い藍明を見て「藍明。」

藍明領きオウガの所を見た。

夏美ハツとして。。。

まさか！？

と同時に「兄様ツ！…お、お逃げ下さい…！」と叫んだ。

すると藍明クスと笑い「…もう遅いよ」。

そつ言い足をダンとしてオウガめがけて地面の槍を襲わせた。

夏美物凄い形相でオウガの所へと走つて行つた。

間に合え！…間に会つてくれ！…！

もう嫌なんだ！…此れ以上、失うのは、…！

そして・・。

ドショウ！…！と貫き音がした。

と同時に「なッ！…！夏美イイイ！…！…！」とオウガの叫び声が聞こえた。

其処には右肩を貫ぬかれた夏美がオウガを庇つて立っていた。

夏美「第14夜。第13夜。ワカバとそしてヘルシング日本支部香  
煉館の突然の襲撃され・・そして高杉と土方助つ人で登場！？（後  
編）」

「次章もどうぞ宜しく！…」

以上です。今章も御付き合いで下さいましてありがとうございました。

第14夜。ワカバとしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃され・・そー

今章は前章と続きです。

長丁場のもしかしたら此方も編集可能性あります。

残酷シーン等も付く予定です。

予めご了承ください。

## 第14夜。ワカバとしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃され・・そ

アレから香煉館の連中に襲撃を受けたワカバとしてヘルシング日本支部。

そして土方達が登場しそして夏美は、自分を欲しがっている黒龍に対して

「私じゃアじやなくて、本当は、彼が、良かつたんじやないの？」

と言つた。その彼とは・・・そつ今は亡き夏美の恋人兼婚約者だった隼人だつた。嘗ての炎龍と呼ばれ黒龍の一時のパートナーだつた。

すると黒龍は「・・・確かに、俺は、彼が良かつた、だが、今はもう、彼はいない」だが、「俺はお前も好きだ」。

夏美「・・・」ごめん。私じゃアは、お前さんが嫌いだ。どうも好きになれん、

私じゃアは、ワカバとヘルシングに、仕え続けるだけだ！――そして・・・

昔も今も・・・私じゃアの、もう一つの居場所は、」

すると背後から「夏美。」と呼ぶ声がした。

其処には高杉が居た。

高杉が山崎を引き連れてククと笑い、「今も昔もお前のもう一つの居場所は

俺アの所だ。」「そうだろオ?」「

夏美は其れを聞いて「・・晋助様。」

そうだね。私しゃアは。

今もそしてあの頃も晋助様の所が私のもうひとつの中場所だった。

と続け様に黒龍を見て「・・だから、悪いがアンタの所には行けない。」

すると其れを聞いた黒龍はフツと笑い「致し方ねエな」。「そう言い藍明を見て「藍明。」

藍明領きオウガの所を見た。

夏美ハツとして・・。

まさか！？

と同時に「兄様ツ！…お、お逃げトさー…！」と叫んだ。

すると藍明クスと笑い「…、もう遅いよ。」

そう言い足をダンとしてオウガめがけて地面の檜を襲わせた。

夏美物凄い形相でオウガの所へと走つて行つた。

間に合え！…間に合つてくれ！…！…！

もう嫌なんだ！…此れ以上、失うのは、…！

そして・・。

ドシュ！…と貫き音がした。

と同時に「なッ！－－－夏美イイイ－－－－－！」とオウガの叫び声が聞こえた。

其処には右肩を貫ぬかれた夏美がオウガを庇つて立っていた。

夏美ガクと片膝をついた。

と同時にワカバの面々も「オウガ様ア－－（ボス！－）（兄様）！  
！夏美！－－姉御！－

リーダ－－！」とオウガ達の所に群がつて来てライフェイ「オウガ  
！－－夏美！－－大丈夫か！？」

夏美ニヤリと笑い「あ、あア・・大丈夫だ。それよりライフェイ！  
相棒達！－兄様を安全な場所に！－」

オウガ「し、しかし・・お前は？」

夏美右肩を抑えつつも「わ、私は此処で時間稼ぎを致します！！」

すると亞理紗が「な、何言つているのー？あんた！？正氣！？」

そう言つて夏美を連れて行こうとした次の瞬間オウガ「亞理紗！？」

亞理紗は何かを感じたのか夏美の腕を離し「・・・死んじゃ駄目よ！・・・ちゃんと生きて戻つて来てよー！・・・死んだら承知しないんだからーーー！」

夏美回復龍王波（名は特に意味なしです（笑・・・）回復する能力があると思って下さい）

を使い右肩の治療をした。

そして・・・。

夏美は一気に殺氣を放った。

アーカード其れを見てニヤリと笑い「ほう。」

ライカも苦笑いをし「・・やれやれ。・とんだ」さんかな、？」

と同時に「・・・多分、炎龍化<sup>アレ</sup>、になるな。」

そして夏美はギンガを構えながら「・・・小娘。、兄様を傷つけようとしたその代償、はちゃんと償つてもらうぞ？」

藍明はその夏美の姿を見て思いつきり引いていた。

と同時に小声で「ば、化け物。」

「人間の皮をかぶつた化け物」と言つた。

「人間の皮をかぶつた化け物」

その言葉が夏美の脳裏に何故か知らないが、こびりついていた。

夏美タバコに火を灯しながら「フ、フ・・・・フハハハハ！－！」  
人間の皮をかぶつた化け物、か。

良いじゃねエか！！‘今の私しゃアにはお似合いだよ、ハハハハハハハ！！’と高笑いをしながら言った。

ライカ‘夏美ツ！！’と慌ててまるで‘狂い笑い’をした夏美の所にやつて来て抱きつきながら、

「しつかりしる！！！相棒！！お前さんは‘狂っちゃアいねエ’、‘化け物’でも何でもねエ只の人間なんだよ、リーダーであるお前さんがしつかりしないでビウすんだ！？あいつ（有理の下）に戻るんだろ！？」

しつかりしるよ！！！相棒！！！」

夏美其れを聞いてフツと笑い我に返り‘…有難うよ。相棒。いやな・・昔炎龍時代の時にさ・・

良く言われたんだよ。血に濡れた私しゃアを見て周りの人間が‘人間の皮をかぶった化け物’もしくは

‘悪魔。死神’ってな。’

ライカ驚いて‘お前さん、何で今までその事言わなかつたんだ？？’

夏美、ギンガを再び用意しながらタバコに火を灯し「別に、良いんだよ。気にしていなかつたからさ。

其れに・・・お前さんも昔は、私しゃアと似た様なもの言われただらつ、？同じ想いをして欲しくなかつたのさ。其れに・・・。」

「傷つくのは私しゃアだけで十分だ。」 そう呟きながらライカに有難うよ。と軽くポンと肩をたたき礼を

言い、再びギンガを香煙館そして・・黒龍に向けけて。

「 もつへ、長い長い追いかけつゝも仕舞にじよつや。」

と同時に「私しゃアは、アンタらのほかにももう一つ、別に過去の鎖を生き斬らなきやアならねエからな」。

藍明も黒龍の前に行き、「……黒龍様は消さないもん……」

すると高杉ククと笑い「……あの小娘。‘幼い’この夏美にそつく  
りだ。」と呟いた。

そして夏美は其れが聞こえたのか「……あの嬢ちゃんと同じ感じだ  
つたつけ？私しゃアの幼いじゆつて？」

晋助様？」と苦笑いをして言つた。

高杉ククと笑い「あア。」

夏美は首をかしげて「……もつ少し、お天場だった気がするが」。

」と付け加えた。

するとセラスが「夏美さん。ひとつ終わらせて私に暴れさせて下さいよ。」と駄々をこねる。

夏美タバコを吸いながら「まア・・待てや。セラス。もうそろそろ仕舞にしてお前さんにバトンタッチしてやつからや。」とニヤリ。

セラスは其れを聞いてとても嬉しそうに笑った。

ライカ其れを見てやれやれと笑いながら「流石は、アーカード様の従僕だね。」

鬭争したくてうずうずしているんだな。

一方高杉達はその様子を楽しそうに見ていた。

第14夜。ワカバとそしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃され・・そして高杉と土方助つ人で登場！？（後編）完。

## 第14夜。ワカバとしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃され・・そ

今章も無事に更新完了致しました。

今章も御付き合いくださいまして有難い」ぞこます。  
其れではほぼ毎回のグタグタ予告をどうぞ（笑・・）

夏美は、藍明と相変わらず対峙しつづけていた。

夏美タバコの煙を吐き出しながら心の中で・・・。

さて、どうするかね。この嬢ちゃんには私しゃアの、火炎風拳、が効かない。そして・・・雷風拳も、ん？待てよ？ひょっとしたらアレなら・・

通用するかも知れねエ！――チイと、体力等、が半減する、危険な賭け、だが一丁やってみつか。

藍明「ネエ・・もつ、終わりにしよう。詰まんなくなつて来ちゃつた。

夏美様。黒龍様の邪魔するそして側にいてくれないなり・・・。

「消えて？」

夏美タバコ吸いながら「・・悪いが、消えるわけにも、いかなくなつちまつたんだ。私しゃアにはまだまだやらなきやならねエ事が

残っているんでな。」 そう言いながら「私しゃアの専門が通用しなかつたらこいつはひとつよーー!? 拳法変換術!!!!」 そう言い夏美は左腕の拳法刺青を3回たたいた。

ライカ其れを見て「・・ま、まさか!ーあいつ!ー?」

あれをやる『えじゅア? ? !

そのあれとは?

ライカ「第15夜。ワカバとそしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃され・・そして高杉と土方助つ人で登場!?(後編2)そして・・遂に夏美と藍明決着なるか!?」 「次章もどうぞ宜しくね! ! !」

以上です。此処まで読んでいただき本当にありがとうございました。

次章もどうぞ宜しくお願い致します。

## 第15夜。ワカバとしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃され・・そー

今章も多分最終後編となる予定です。

前前章同様に長丁場の残酷シーン等あり予定の長丁場編集可能性が多分あります。

その辺も「理解と」アホのほどよろしくお願い致します。

第15夜。ワカバとそしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃され・・そ

アレからずつと・・・。

夏美は、藍明と相変わらず対峙しつづけていた。

夏美タバコの煙を吐き出しながら心の中で・・・。

さて、どうするかね。この嬢ちゃんには私しゃアの、火炎風拳、が効かない。そして・・・雷風拳も、ん？待てよ？ひょっとしたらアレなら・・・

通用するかも知れねエ！－！チイと、体力等、が半減する、危険な賭け、だが一丁やつてみつか。

藍明「ネエ・・・もう、‘終わりにしよう’。詰まんなくなつて来ちゃつた。

夏美様。黒龍様の邪魔するそして側にいてくれないなら・・・。

「消えて？」

夏美タバコ吸いながら「・・悪いが、‘消えるわけにも、いかなくなつちまつたんだ。私しゃアにはまだまだやらなきやならねエ事が残つてゐるんでな。」そう言いながら「私しゃアの専門が通用しなかつたらこいつはどうよ！－！？拳法変換術！－！－！」そう言い夏美は左腕の拳法刺青を3回たたいた。

ライカ其れを見て「・・・まあ、まさか！－あいつ！－？」

あれをやる気じゃア？？－！

そのあれとは？

夏美「水風波動龍王龍神拳！－！」

（上記の一応拳法です（オリジナルの）嘗ての夏美のメイランとは別姉貴分が使用していた拳法で

4代風拳はそれぞれ自分の所属している拳法とは別に異なる拳法を1、2個位もつ事を許されていると言つ設定です。因みにこの拳法も伝説の拳法と言つ設定でもあります。）

夏美「・・行くよ－！－！雷と炎じゃダメなら水ならどうだい－？」

すると夏美は水風波動龍王龍神拳の刺青に手をやり心の中で・・・。

あずな姉さん。

三枝あずな。先代の水風波動龍王龍神拳の伝承者でありワカバと紅の女幹部の一人であり夏美の姉貴分だった女。だが、広州や香煉館の卑劣な罠により重傷を負い数年前にこの世を去った。

夏美構えて「黒龍！…特にお前さんなりの拳法見覚えあるだろう…？」

黒龍「…こつは、まさか…あの女の…？」

夏美「そうだ！！！数年前…・・・広州とそしてお前さん所の香煉館の卑劣な罠により重傷を負つてこの世を去つた三枝あずな拳法だ…それに・・・その女は私しゃアの姉貴分でもあり良き相棒（仲間）だつたんだよ…！」と。

其れを聞いた黒龍は驚いた。「…じゃ、あの時あの女がお前の名を呼んだのは・・・お前が妹分だったからか？」

「…夏美。ちゃんと帰るつて約束したのに帰れなくて…」あんね、

夏美悔しそうに「あア・・その通りだ!!私しゃアは」こいつでお前等香煉館をつぶしてやるつかと思ってなあ!!まづは・・・お前Hさんからだ藍明!!..覚悟しな!!」

藍明も迎え撃とひと地面を再び踏んだ。

夏美

あずな姉さん。姉さんの拳法借りるね。

頼む。私しゃアの体よ。持つてくれな。

ライカ「・・相棒。」と心配をつに夏美を見つめる。

夏美フツと笑い「大丈夫さ。そんな顔するな。ちゃんと戻つて来てやつから。」と続け様に「あ、そうそう。私しゃアが藍明とやりあつている最中に・・・人工グールの連中の掃除セラスと共に頼むわあ。」

ライカタバコに火を灯しフツと笑い「・・了解した。」と氷棒を持ち「・・後でな。相棒。」

夏美「あア。」そして「行きますか！」

と藍明に向かつて突進していった。

第15夜。ワカバとしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃され・・そして高杉と土方助つ人で登場！？（後編2）そして・・遂に夏美と藍明決着なるか！？完。

## 第15夜。ワカバとしてヘルシング日本支部香煉館の突然の襲撃され・・そ

今章も無事に更新完了致しました。

此処まで読んでいただきありがとうございました。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告をどうぞ（笑）

藍明夏美に向かって「黒龍様の邪魔するーもう、いくら夏美様でも許さないもん！！いい加減くたばつてもしくは黒龍様のものになつて！！」

夏美ニヤリと笑い「・・・お断りだね」！私しゃアからすればこの男はもう一人の姉貴分の仇！！側に入れるわけないわ！！！」

そう言い水風波動龍王龍神拳の技を繰り出す。

一方、セラスは香煉館の人工グール共をライカを初め日本吸血鬼界を率いる

高杉そして土方達と共に始末していた。

高杉チイと舌打ちしながら「来島ア！！！撃てや！」

また子「了解つス！！晋助様！」そう言い銃弾を浴びせる。

セラスハルコンネを持ちながら応戦し「ライカさんー！」

ライカ頷き氷棒で応戦した。

果たして蹴りはつくのか？

ライカ「第16夜。夏美VS藍明最終決着！？そして香煉館の人工  
グールVSヘルシング&日本吸血鬼界！そして・・・香煉館に加勢  
者登場！？」

「次章もどうぞよろしくな！」

以上です。次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

## 第16夜。夏美▽S藍明最終決着！？そして香凍館の人工ケール▽Sヘルシンク

今章も前々章同様に残酷シーン等ありの予定です。

長丁場の編集可能性あります。

## 第16夜 夏美VS藍明最終決着!?そして香煉館の人工グールVSヘルシンク

藍明夏美に向かって「黒龍様の邪魔する! もつ、いくら夏美様でも許さないもん!! いい加減くたばつてもしくは黒龍様のものになって!!」

夏美ニヤリと笑い「・・・お断りだね」! 私しゃアからすればこの男はもう一人の姉貴分の仇!! 側に入れるわけないわ!!!!」

そう言い水風波動龍王龍神拳の技を繰り出す。

一方、セラスは香煉館の人工グール共をライ力を初め日本吸血鬼界を率いる

高杉そして土方達と共に始末していた。

高杉チイと舌打ちしながら「来島ア!!! 撃てや!」

また子「了解つス!! 晋助様!」そう言い銃弾を浴びせる。

セラスハルコンネを持ちながら応戦し「ライカさん!!」

ライカ額き氷棒で応戦した。

ライカ「オラオラオラ!! さつさと、散つちまいなア、人工グール共オ!!!」そう言しながら

氷棒を人工グールに突き刺して行つた。

散つて其処からチップが舞いあがるするとライカは其れを器用に回収する。

一方、夏美は藍明と対峙していた。

互いに血飛沫が舞う。

藍明「・・・つう。」左ほほに夏美の攻撃が当たり痛みで顔をしかめる。

夏美

・やれる！今度こそ大丈夫！

「こいつで御仕舞だア！！！水風波動龍王龍神拳水風波動爆龍神拳  
！！！」

と大技を放つた。

だが、此れが夏美の体に大きな負担となる。

夏美の体にしひれが襲う。

だが・・・。

ー‘夏美’ーと嘗てのもう一人の姉貴分の顔が過つて。

そうだ！…負けるわけにもいかねえんだ！…！

私しゃアの体よ！もつてくれ！…！頼む！…！頼むから！…！

そして夏美「いっけん！…！」と叫んで技を藍明に喰らわせる。

そして藍明は其れをくらいその場で崩れるよつに倒れた。

黒龍其れを見て慌てて「藍明！…！」と藍明に駆け寄り「オイ！しつかりしろ！…！大丈夫か！？」

藍明半泣き状態で「・・・」、「じめんなさい。黒龍様。負けちゃった。

」

黒龍微笑んで藍明の頭を撫で「」若狭さん。お前は本当によくやつてくれたよ。」

その事を聞いた藍明が頬笑みを返した。

すると、行き成りドカーンと爆発音がした。

夏美「……な、何だ……」

するとライカがテレパシーで『相棒！！！来てくれ！！！大至急だ  
！』

夏美「何があつた！？相棒！？」

ライカ『ど、ドイツのナチの連中が来た！！！多分香煉館の連中の  
加勢だろ？！』

夏美其れを聞いて軽く舌打ちし「了解！！！今行く！！！」

夏美は一瞬体のしびれで動かなくなるが、冷静さを取り戻してすぐ  
に黒龍達をチラとみて急いで再びライカの下に戻つて行つた。

夏美

頼む！……間にあってくれ……

そう願いながら走り続けた。

別に相棒達が無事でいてくれるのであれば私しゃアはいくら傷ついてもかまわん。

そう思いながら走り続けた。

Sヘルシング&日本吸血鬼界！そして・・・香煉館に加勢者登場！  
？完。

## 第16夜。夏美ＶＳ藍明最終決着！？そして香煉館の人工ケールＶＳヘルシンク

今章も無事に更新完了致しました。

今章も御付き合い下さいましてありがとうございます。

其れでは、ほぼ毎回のグタグタ予告をどうぞ（笑）

アレから走り続けた夏美はライカ達（相棒）の気配を勘繰りながら場所へ

向かう。

そして夏美の前に現れたのが何とグール達だった。

夏美「どけエエエエ！……！」 そう叫びながら「」の拳法で

燃やし続けた。

と同時にまた走りだした。

そしてライカ達の所に無事にたどり着いた。

其処にはドイツのナチに傷つけられた相棒達の姿だった。

夏美其れを見てあまりにも怒りが狂いそして「てめエラアアア！！！」

「ゼッてエに許さねエエ！！！」と続け様に「此処から口で帰れると思ひなよ！！！ナチの狗共！！！」

と叫びながらそして殺氣を莫大にして睨みつけた。

その姿を見たライカは傷だらけになりながらも「・・・あア。マジイナ。こりやア。燃やされるぜ、多分全員な。」

高杉其れを見てクククと笑い「切れた夏美、は大変だからなア。

夏美イ

「壊してしまえやア。」

夏美「了解！晋助様！！」そして自分自身に熱氣を惑わせナチの軍隊に向かつて歩き出した。

ライカ「第17夜。夏美VS藍明最終決着後。香煉館の加勢者であるナチ登場！そして相棒達を傷つけた夏美の怒りがナチを襲う！？」

「次章もどうぞよろしくな！」

以上です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

第17夜。夏美VS藍明最終決着後。香煉館の加勢者であるナチ登場ーそして相

今章は、前章と似た様な感じです。

長丁場の残酷シーン等あります。

## 第17夜。夏美VS藍明最終決着後。香煉館の加勢者であるナチ登場ーそして相

アレから走り続けた夏美はライカ達（相棒）の気配を勘繰りながら場所へ

向かう。

そして夏美の前に現れたのが何とグール達だった。

夏美「ジケエエエエー…………！」そつ叫びながら「」の拳法で燃やし続けた。

と同時にまた走りだした。

そしてライカ達の所に無事にたどり着いた。

其処にはドイツのナチに傷つけられた相棒達の姿だった。

夏美其れを見てあまりにも怒りが狂いそして「てめエラアアア！！！  
！！！」

ゼッてエに許さねエエー…………」と続け様に「此処から只で帰れると思つなよー！ナチの狗共！ー！」

と叫びながらそして殺氣を莫大にして睨みつけた。

その姿を見たライカは傷だらけになりながらも「・・・あア。マジイナ。こりやア。‘燃やされるぜ’、多分全員な。」

高杉其れを見てクククと笑い「、切れた夏美、は大変だからなア。

夏美イ

‘壊してしまえやア’。

夏美「了解！晋助様！！」そして自分自身に熱氣を惑わせナチの軍隊に向かつて歩き出した。

ナチの連中もはつと鼻で笑い「たかが・・女1人で何ができる。」

夏美「・・・女だからと言つて舐めていると痛い目に会つよ？」

そつ言い「火炎風拳・・・火炎風爆龍烈風弾！-！-！」

と続け様に「燃えちまいなアアアアアー！-！-！-！」

すると、夏美の炎がナチの連中を包み燃やし始めた。

ナチの連中の叫びが響き渡る。

其れを見たライカは軽く頭を手で支えて苦笑いをしながら「あちやあ～あいつ、‘切れてるなア’。」

其れを見た他のワカバのメンバーも苦笑いをし「そつだねエ。ライカさん。」

ベルナディット「で？ライカの嬢ちゃん。夏の嬢ちゃんが、切れると何か問題でもあるのかい？」

ライカタバコに火を灯し「……場合によつちやあ、‘己の拳法を最大限に發揮して力を抑制しきれずに自爆（体内に熱がこもる）か、またアレに（炎龍化）になってしまします。」

ベルナドット冷や汗かいて「……マジかよ。」

ライカ領き「……大マジ、です。」

するとシュウチエンが「でも、このままだと。ライカさん。‘まずくない’？」

ライカ再度領き「あア、確かにチイといつはア、ヤベエかも、知れねエなア。」

でも、セラス微笑んで「でも、此れで、燃やしてくれれば、私たちの仕事も減るんじゃないですか？」

ライカさん。」

ライカ苦笑いをしつつ「まア・・・其れもそつだけど。でもね。セラス。あいつは藍明との戦いで

「普段専門外の拳法」使ったから多分、体力的にも肉体的にも限界に來てる気がするんだ。」

セラスは「・・・そうですか。」と只呟いていた。

夏美は相変わらず「」の火炎風拳でナチの連中を燃やし続けていた。

そして一人たりとも根ざやしにした。

そして終わりをつげた。

セラス其れを見て「・・・どうやら終わったみたいですね。」

アーカードもニヤリと笑い「、そうみたいだな、まあ私達が出る幕でもなかつたが。」

と同時に夏美は冷や汗をかいてそのまま膝をガクつとした。

ライカ「...夏美...」と慌てて夏美の所に行く。

ライカ心配そうに「大丈夫か？」

夏美領さ「あア問題ねエ。」とにやりと笑つた。

するとライカ夏美を抱いで「・・・お前さんはもつ休め！・・・」のま  
まだと本当に前さんの体が！・・・」

夏美ニヤリと笑い「・・・別にどうひいて」などいや。今くらゴ。」

するとライカがタメ息をつき「・・・お前さんは、昔からいいつだな。  
、その辺は、変わつてねエ、よ。  
今もな。」

夏美苦笑いをしながら「・・此れが、私しゃアなんだよ。」

そして悪いな。とも呟いた。

するとライカは高杉の所に行き「・・・高杉様。しばらくこつと願いしても良いですか？また無茶しそうで・・・」

高杉「あア、構わねよ。で？お前もせよこれからどうするよ？」

ライカタバコい火を灯し「・・・まア、ナチの連中はこいつ（相棒）が全部片付けたみたいですので・・・

私は香煉館の連中を片づけます。」

香煉館の連中は顔をしかめた。

と同時に香煉館の一人の隊員が「・・・黒龍様。如何なさいます？？」

黒龍フウとため息をつき「……」いつ（ライカ）が相手なら俺等も、ただじゃアすまんだろ？。

先程の夏美みたいにな。」と続け様に藍明を連れて「オイ！お前達！！！ひとまず体勢を立て直すぞ！！！引き上げるぞ！！！」

その声を聞いたライカは「待て！！！」

黒龍ニヤリと笑い「・・・また人員増やしてそして体勢を立て直してから、遊んでやるよ、（戦つてやるよ）。」と続け様に「また、会おうー！！！！我が妹よ！！！」そして消えて行つた。

ライカは其れを聞いてかなり驚く。

そしてワカバのメンバーにざよめきが走つた。

「い、妹！？」

「ライカさん。此れは一体？？？」

ライカは只固まりつつもタバコを口に加え田を灯しながら「・・・  
こいつが聞きてエよ。」と呟いて

「夏美。相棒達よーひとまづ戻るが。」

と歩み続けてそして夏美たちはライカに続いた。

そして、高杉達も。

ライカには先程の黒龍の言葉が脳裏に焼き続けていた。

第17夜。夏美VS藍明最終決着後。香煉館の加勢者であるナチ登場！そして相棒達を傷つけた夏美の怒りがナチを襲う！？完。

今章も無事に更新完了致しました。

今章も御付き合い下さいましてありがとうございます。

其れではほほ毎回?のグタグタ予告をどうぞ。

アレからオウガの部屋に来た夏美達。

オウガ「何!?奴が（黒龍）がライカを妹だと!?」

ライフェイ領き「あア。俺たまたまそこに居合わせた。そんでは、奴は退きあげる際にこいつ言ったのだ。『また会おう!…!』『我が妹よ!…!』つてな。

まア・・・ライカ自身は分からねエ見てエだけどな。」

そういうながらライカを見つめるライフェイ。

ライカは只無言のままオウガの部屋を出た。

夏美「・・・ライカ。」

すると土方が「・・・夏美。お前エなら、何か知つてんじゃアねえの

か、？黒龍、と共に一時いたお前工なら。」

夏美軽くため息をつき「・・あいにくあの男は、‘自分のプライベート’まで部下にも相棒にも教えていなかつたからね。だから、私しゃアも分からんよ。兄貴。」そう言いながら「ちょいと一服してくるよ。」そう言い部屋を後にした。

と同時にオウガライフェイを見て「・・・ライフェイ。」

ライフェイ頷き「了解した。」そう言い部屋を出た。

オウガは久々にデスクの引き出しに隠してあつたタバコを出し火を灯した。

そして、自分のデスクの上に載せてある末端の頃のライカと夏美そしてオウガの写真を見て「・・・ライカ。夏美。」と悲しそうに咳いていた。

その様子をインテグラが悲しそうに「・・オウガ。」と見ていた。

オウガ「第18夜。ワカバ＆日本吸血鬼界達VS香煉館のひとまず戦終了後。ワカバに戻った夏美達。そして・・・ライカの今の心の想い。」

「次章もどうぞよろしくな！」以上です。其れでは次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

## 第18夜。ワカバ&日本吸血鬼界達VS香煉館のひとまず戦終了後。ワカバに白

今章は、前章の似た様な話です。

多分長丁場の編集可能性もあります。

検索には載せてありませんでしたが・・・戦国BASARAの双竜組が出てくる予定でもあります。って・・・多分今回は片方かと。其れは見てのお楽しみ。夏美の部屋に出てきます。因みに此処では吸血鬼設定ですので予めご了承を。汗

第18夜。ワカバ&日本吸血鬼界達VS香煉館のひとまず戦終了後。ワカバに

香煉館との戦後アレからオウガの部屋に来た夏美達。

オウガ「何!? 奴が（黒龍）がライカを妹だと! ?」

ライフェイ領き「あア。俺たまたまそこに居合わせた。そんで、奴は退きあげる際にこいつ言ったのさ。また会おう! ! ! 『我が妹よ! ! 』ってな。まあ・・・ライカ自身は分からねエ見てエだけどな。」

そう言いながらライカを見つめるライフェイ。

ライカは只無言のままオウガの部屋を出た。

夏美「・・・ライカ。」

すると土方が「・・夏美。お前エなら、何か知つてんじゃアねえのか、? 黒龍、と共に一時いたお前エなら。」

夏美軽くため息をつき「・・あいにくあの男は、自分のプライベート、まで部下にも相棒にも教えていなかつたからね。だから、私しゃアも分からんよ。兄貴。」そう言いながら「ちょいと一服してくるよ。」そう言い部屋を後にした。

と同時にオウガライフェイを見て「・・・ライフェイ。」

ライフェイ頷き「了解した。」そう言い部屋を出た。

オウガは久々にデスクの引き出しに隠してあつたタバコを出し火を灯した。

そして、自分のデスクの上に載せてある末端の頃のライカと夏美そしてオウガの写真を見て「・・・ライカ。夏美。」と悲しそうに咳いていた。

その様子をインテグラが悲しそうに「・・・オウガ。」と見ていた。

一方、雷外も小声で「・・・たあく。何てエもん、しょいこんでいるんだ！？」うちの姉御達は！？」とも呟いた。

一方、ライカは喫煙所にいて一服をしていた。

そして・・・・・。

「また会おう!我が妹よ!」

と先程の黒龍の声がこだまする。

何だ!? 奴は私しゃアの事を、妹、だと!?

何で!? 私には兄貴はいなかつたはず! !

なのに・・・・何故!?

そして心の中であざ笑いながら・・。

あア・・・・・色々で面倒だな。

黒龍と・・・私は。

本当に、兄妹? ? ? ? ? ?

良く分からねエや。

ライカタメ息をつきながら「ハア・・・・めんじくせH・。」

すると背後から「何がめんじくさいんだ?」

ライカその声を聞き慌てて驚いてその主を見た。

其処には壁に寄りかかり楽しそうに笑っているアーカードの姿だった。

ライカアーカードのその姿を見て「・・・アーカード様。」

アーカードはライカの所に歩いて行って「、本当に覚えがないのか  
' ?」

ライカタバコを口に加え直しながら「ありませんよ。全然。」

アーカードはニヤリと笑い「そうか。」

ライカタバコ吸い続けて苦笑いをし「・・冷やかしに来たんですか  
??」

アーカード再度ニヤリと笑い「いや。そいつつ訳ではないのだがな。

」

一方、夏美は自分の部屋に戻つてタバコ吸い続けていた。

「・・・・・相棒。」とライカの事を想う。

・・・たあく。私しゃアもアレかア？弱くなつたか??相棒を思つ  
あまり・・。

いや、思わないと居られなくなつたか??

ヒ「」をあざ笑つた。

すると、急に夏美の部屋に、まがまがしい気配、が入つて來た。

夏美タバコを加え直し、ギンガを素早く取り出してその方向にギンガ  
をやり「・・・誰だい??其処にいるのは分かつてんだ。出てきな  
ーーー」

すると男の声でククと笑い「流石だな。嘗ては、闇の始末屋炎龍と  
呼ばれた事はあるな。夏美。」

と黒髪のオールバックで黒のスーツに身をそして、その中には白のTシャツに靴は黒の靴を履いていた。

右ほほには刀傷があつた。

夏美は驚いた表情で「な、何で！？此處に貴方様がいるんです！？」片倉様ツ！！！」

といひの男の名を呼んだ。

そつこの男の名は片倉小十郎。奥州会の会長である伊達政宗の側近の竜の右田であり、高杉やアーカード達と同じ吸血鬼で夜を生きる者。と同時に黒龍は知らないが、黒龍が夏美に出会つ前に炎龍時代の夏美を拾い側に置いた。いわば高杉や土方同様に夏美にとつてはいろんな意味での命の恩人である。

因みに、後に出てくる政宗も小十郎も夏美の事を気に行つてゐるからなあさらタチが悪い。（笑：）

小十郎ニヤリと笑い「よオ。久しいじゃねエか。ずいぶん探したんだぜ？夏美。」

夏美冷や汗をかきながら「……」

「畜生……ようこよつて何で」の方が出てくのんじやい……やり  
ずれエ、じゅねエか。

「……私しゃアとした事がよつによつて命の恩人に手を出すとは。

妙な勘織りが鈍つたか??

焦りながら……。

「うわー、うわー、うわー?」

よつによつて……片倉様なんて。

クソッ……うわー?」

どうするよーー?

其れよそに小十郎は楽しそうに夏美に近づいてきた。

「どうした? 久々の再会じゃねエか。もう少し嬉しそうにしたらどうだ?」

夏美は一歩退く状態になっていた。

・・・アーカードさん達もあの男も怖いけど、この方も尚更怖いーー

さて、どうするよ。

と同時に壁にぶつかった。

夏美「・・・しまった。」そして急いで逃げようとした次の瞬間。

不意打ちをつかれたのか腕を引かれ壁にぶつけられた。

夏美痛みで顔がしかめると同時に小十郎が夏美に顔を近づける。

「なア・・逃げる事はねえだろよ。昔はあんなに政宗様や俺に懷いていたじやねエか。」あの頃のお前エは一体どうしたよ？？？

」と笑いながら言つた。

と続け様に耳元で「もし、忘れたなら悪い出でせいでやうつか、？」と囁く。

夏美は「・・・ッ結構！！！」そう言ひギンガを小十郎の額に向けて確かに、貴方様方にはお世話になりました。けど、其れは昔の話であつて、今の私は、‘炎龍’ではなく、‘ワカバ’そして‘ヘルシング日本支部’の橘夏美なんです！！！もし、私に炎龍を求めているのであればそれは叶わぬ夢ッ！…どうぞお引き取りを！！！」と。

小十郎はその事を聞きクククと笑い「・・俺は、炎龍を求めていたわけじやねエんだぜ？お前自身だ。

其れに、政宗様のご命令で、お前を連れ戻せ、と事をお使つてゐるんだ。だから、悪いな俺も退くわけにもいかねエんでな。

。 その事を聞いた夏美はギンガの引き金を思わず引ひつしたが・・・

引けなかつた。

小十郎の事も政宗の事もワカバと同様に思つてゐるからだ。

夏美「・・・其れでも。私は、‘行けません’。私は私の宿命を。」

その事を話を続けようとした次の瞬間「其れは、あまりにも連れね  
エんじやアねエか？ My Little girl?」 その声を聞  
き小十郎は夏美から離れてその声の主に向かい一礼をする。

夏美さうに驚き「・・・んなアアア！？まつ、政宗様アアア！？

「！」

と思わず叫んでしまつた。

そつ其処には奥州会筆頭伊達政宗がいた。

政宗夏美を見てニヤリと笑い「Hey! やつと会えたな? My Little boy!」

夏美は思わず両手で頭を抱え込んでその場に崩れ落ちて苦笑いをしつつ小声で「・・今日は、災難だ。

いろんな意味で。」と呟いた。

第18夜。ワカバ＆日本吸血鬼界達VS香煉館のひとまず戦終了後。ワカバに戻った夏美達。そして・・・ライカの今の心の想い。完。

第18夜。ワカバ&日本吸血鬼界達VS香煉館のひとまず戦終了後。ワカバに

大分更新遅くなりましたが・・無事に更新完了致しました。

其れでは、ほぼ毎回？ではありますガグタグタ预告をどうぞ。（笑；）

夏美。

あア・・・どうしてだらう？どうもこの方たちは、私の事を、手放してくれないのでうう？よくわからないや。

と同時に緊急警報が鳴つた。

夏美は慌てて政宗達からひとまず離れて無線機を押しながら「私しやアだ！？」いつは一体何事だ！？」

『なつ、夏美様アア！…ヴあ、ヴァチカンの連中っス！…ヴァチカンの連中が…香煉館の連中が引き連れたグール共を引き連れて此方に攻めて来たツス！』

高杉の側近である来島また子が慌てて応答した。

夏美驚いた顔で「なつ、何だと！？んで！？攻めて行く標的は！？」

また子再度慌てて『お、オウガ様のお部屋っス！…』

夏美其れを聞いて「なつ、何だとオオー？」のままだと兄様の身が。  
来ツちゃん！！相棒達には知らせてくれた？？」

また子領き『はいつス！！』

夏美領き「よし！ジャアー！私しゃアも行くから何としても時間稼  
いで頂戴！！！」

また子領き『了解つス！！』

そして、通信は終わった。

と同時に夏美はギンガの銃弾を補充し懐にしまいこみ急いで下に行  
こうとしたが、片倉に止められる。

夏美「片倉様！お離しください！！」

片倉は夏美を後ろから抱き寄せ「…行くな…ヴァチカン相手だ  
と分が悪い！下手すればお前…死ぬぞ？？」

夏美フツと笑い「…死にませんよ。私は」と続け様に「ワカバ  
を見捨てたら…私しゃアは私しゃアでいられなくなるんです。」  
とも呟いた。

と同時に「…私は橘家本家の間…ワカバを護る義務がある…！」

そして続け様に「…」めんなさい。もうあの頃の炎龍（私夏美）  
はいないんです。今の私は…ワカバにお仕えする、橘夏美、なの

です。私は、

一方、夏美の部屋に取り残された小十郎はフツと笑い「・・・あの時の炎龍（お前）はいないだと？？？其は、お前自身が気が付いていないだけだと、俺は思うぜ？？」と同時に政宗ニヤリと笑い「Hey！小十郎！ いまだに消えないなら。このまま壊してしまえばいい。場所をなくしてやればいい。

そうすれば例え嫌でも俺たちの下にあいつ炎龍ではなくとしても戻つてくるだろ? You see?」

自分の主のその言葉を聞きニヤリと笑い「・・・そうですな。政宗様、」そして政宗は小十郎の前を通り過ぎながらも再度ニヤリと笑い「まして、俺たちはあいつをまだ逃がしているつもりもねエし、今後も逃がすつもりもねえ。だろ?」小十郎頷き「そうですな。」

俺達から逃げよう何ぞ、無駄なんだよ。夏美。

一方、夏美は「どけエエエエエー！－ザコ共がアアー！－（グール）兄様アアー！」とギンガを乱射しグール達をなぎ倒していた。

と同時にオウガの部屋を見つけ急いでドアを開け「兄様ッ！――！」  
と同時に「・・・なつ！――！？」と驚いた表情をして部屋を見  
た。其処には血だらけのオウガと・・・そして・・・・・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・・・そして・・・・・・・・・・・・

手元に血だらけのバイオネットを持つたアンデルセンがニヤリと笑い、「久しぶりだな。ワカバの小娘。」

そして心中でクソッ！？私はまた護れなかつたのか！？大事なも  
のをツ！

するとメグナが遠目であちやあゝと頭を抱え「姉さん切れちまつたな。」リヤア。」と呟いていた。

まア・・あの神父さんには悪いけど、あの神父さんは姉さんにとって、悪い事、をした。だから切れられも致し方ないけどね・・・。とも心の中で呟いた。

アンデルセンはニヤリと笑い「・・すべては、ヴァチカンの為に！、ワカバもヘルシングも邪魔なのだよ！だから、消してやつた、神の名のもとになア。」

すると夏美はさらに、殺氣を出して「…………狂つてやがる！てめエ等。そんなに、俺から大事なものを奪うのが楽しいのかよ……」

クソクソツ！－！チイクショウ！－！－！

夏美はもうすっかり、復讐の炎の龍化、していた。

するとライカ達も入つて来て「相棒ツ！」と続け様に「・・兄様ツ！」とライカはオウガの下にやつて来て「・・ツ！－！」と顔しかめた。

と同時に「・・ありやア。もう、なつちまつたなアレに」。と夏美を見て呟いた。

ライカ「第19章。アンデルセンの手でオウガ死す！？その光景を見た夏美が怒りの刃を向けた。」と続け様に「次章も宜しくね。」

以上です。次章も今章同様にお楽しみ頂ければ幸いです。

第19夜。アンテルセンの手でオウガ死す！？その光景を見た夏美が怒りの刃を

此方ははずいぶん御無沙汰しております。

と同時に今章はかなり残酷等予定です。

予めご了承頂きたいと思います。

其れでは本編です。

## 第19夜。アンテルセンの手でオウガ死す！？その光景を見た夏美が怒りの刃を

夏美。

あア・・・どうしてだらう？どうもこの方たちは、私の事を、手放してくれないのでう？よくわからないや。

と同時に緊急警報が鳴つた。

夏美は慌てて政宗達からひとまず離れて無線機を押しながら「私し  
やアだ！？」といつは一体何事だ！？」

『なつ、夏美様アア！？「あ、ヴァチカンの連中つス！？ヴァチカ  
ンの連中が・・・香煉館の連中が引き連れたグール共を引き連れて  
此方に攻めて来たツス！？』

高杉の側近である来島また子が慌てて応答した。

夏美驚いた顔で「なつ、何だと！？んで！？攻めて行く標的は！？」

また子再度慌てて『お、オウガ様のお部屋つス！？』

夏美其れを聞いて「なつ、何だとオオ！？このままだと兄様の身が。  
来ツちゃん！？相棒達には知らせてくれた？？」

また子頷き『はいツス！？』

夏美領き「よし…ジャア…私しゃアも行くから何としても時間稼いで頂戴…！」

また子領き『了解つス…』

そして、通信は終わった。

と同時に夏美はギンガの銃弾を補充し懐にしまいこみ急いで下に行こうとしたが、片倉に止められる。

夏美「片倉様！お離しください…！」

片倉は夏美を後ろから抱き寄せ「…行くな…ヴァチカン相手だと分が悪い！下手すればお前…死ぬぞ…？」

夏美フツと笑い「…死にませんよ。私は。」と続け様に「ワカバを見捨てたら…私しゃアは私しゃアでいられなくなるんです。」とも呟いた。

と同時に「…私は橘家本家の人間！ワカバを護る義務がある…！」

そして続け様に「…」めんなさい。もうあの頃の炎龍（私夏美）はいないです。今の私は…ワカバにお仕えする、橘夏美、なのです。私は、

父母にあの時誓いを立てた。その誓いを果たす為ならこの身がどうなってもかまわない。」そう言い夏美は小十郎の腕をすんなりと外し自分の部屋の扉を開け「兄様アアアアアアア…！！！橘夏美只今参ります！…どうか御無事で…」そう叫びながらオウガの部屋に向かった。

一方、夏美の部屋に取り残された小十郎はフツと笑い「・・・あの時の炎龍（お前）はいないだと？？？其れは、お前自身が気が付いていないだけだと、俺は思うぜ？？」と同時に政宗ニヤリと笑い「Hey！小十郎！ いまだに消えないなら。このまま壊してしまえばいい。場所をなくしてやればいい。

「そうすれば例え嫌でも俺たちの下にあいつ炎龍ではなくとしても戻つてくるだろ? You see?」

自分の主のその言葉を聞きニヤリと笑い「・・・そうですな。政宗様。」そして政宗は小十郎の前を通り過ぎながらも再度ニヤリと笑い「まして、俺たちはあいつをまだ逃がしているつもりもねエし、今後も逃がすつもりもねえ。だろ?」小十郎頷き「そうですな。」

俺達から逃げよう何ざア無駄なんだよ。  
夏美。

一方、夏美は「どけエエエエエー！ザコ共がアアー！（グール）兄様アアー！」とギンガを乱射しグール達をなぎ倒していた。

手元に血だらけのバイオネットを持つたアンデルセンがニヤリと笑い、「久しぶりだな。ワカバの小娘。」

ギンガを懐からだし「よ／＼よ／＼よ／＼よ／＼よ／＼よ／＼よ／＼

もよ／＼も

兄様をオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

さネエー！

そして心中でクソツ！私はまた護れなかつたのか！？大事なものをきツ！

そう眩きアンデルセンを睨みつけ「・・・地獄リンドボ」に送つてやるよ

！アンデルセン！この、俺、橘夏美がなあアアー！！

するとメグナが遠目であちやあーと頭を抱え「姉さん切れちまつたな。じりやア。」と眩いていた。

まあ・・・あの神父さんには悪いけど、あの神父さんは姉さんことつて「悪い事」をした。だから切れられも致し方ないけどね・・・。とも心の中で呟いた。

アンデルセンはニヤリと笑い「・・・すべては、ヴァチカンの為に！・ワカバもヘルシングも邪魔なのだよ！だから、消してやつた」。

神の名のもとになア。」

すると夏美はさうに「殺氣」を出して「・・・狂つてやがる、一てめエ等。そんなに、俺から大事なものを奪うのが楽しいのかよー！」

クソクソツ！チイクショウ！ー！

夏美はもうすっかり、復讐の炎の龍化、していた。

するとライカ達も入つて来て「相棒ツ！」と続け様に「・・兄様ツ！」とライカはオウガの下にやつて来て「・・ツ！・！」と顔しかめた。

と同時に「・・ありやア。もう、なつちまつたなアレに」。と夏美を見て呟いた。

夏美「てめエだけは、てめエだけは・・てめエだけはツ！・・絶対に許せねエ！・・よくもツ！・・よくもツ！・・てめエだけは俺が俺

ツ兄様をツ！・・よくもツ！・・よくもツ！・・てめエだけは俺が俺がアアアアア！・・・・・と怒りに満ちそしてその両目には涙がにじんでいた。

アーカードも合流し「・・ほう。夏美、なつたか」。だが・・。」と続け様に「夏美。そいつは、私の御敵だ。手出しへするな？」

夏美アーカードを見て「アーカードさんツ！・・止めないでくださいツ！・・この男だけはこの男だけは、俺の手で地獄に送らなきや気が済まないんです！・・・・・こいつは、俺から大事なもの奪った！！

！、しかも、神の意志とかぐだらねエ事で！…、」と怒りに満ちて言つた。

アーカードはその原因を察知したのかなるほどと心の中で呟いた。

アンデルセンはそれを聞いてニヤリと笑い「…、そんなにその男が大事なのか、？」

夏美怒りまみれになりながら「当たり前だッ！…」のお方は俺に‘あえて言うなら表で再度生きる意味’を与えて下さった方だ！！！…それに俺は橋本家の人間！！！両親と約束した誓いがあるんだ！！

その誓いを果たすのであれば俺はワカバの一員として朽ち果てても良い！！！！其れが俺の覚悟だ！！！」そう言い「だが、アンデルセン！！！てめエはてめエ等のくだらねエ思想で兄様を危険にさらした！此れだけは許せねえエ！！！俺の炎で全部焼き尽くせ！！！」そう言い火炎風拳を再大力にした。

ライカ其れを見て「…ダメだ！相棒！…」と叫んだ。

其れと同時に夏美は「止めるなッ！……相棒ッ！……」「いつだけは！……」「いつだけは！」

だけは！……本当に許せねえんだ！……例えこの俺の身を犠牲してまでも！……」「いつだけは！……」

ライカは叫んだ「落ち着け！……うちらが、中立派、だッて事忘れたか！……？堪えるんだ！……」

今お前さんが此処で大暴走して元も事もねえんだぞ！……お前さんは、此処のリーダーなんだ！……リーダーが冷静にならくてどうする！……？ましては此処は伊達様方までいるんだぞ！？今は落ち着け！……！相棒！……！」

夏美はライカを見て「お前は悔しくはねえのかよ！……？」

ライカギリつと口をかみしめながら「悔しくないわけがないだろう！……！私たちの大切な兄様ボスがやられたんだからな！……だが、堪えるしかねえ！……兄様」自身が、あくまでも中立派、を望まれているからな！……！」

夏美はそれを聞いて顔しかめたと同時に「・・すまねえ。相棒。どうやら私は・・いや、「俺は」

我慢できねえみたいだ。そして、自身から炎を出し「・・俺を怒らせた事」、あの世で後悔するんだな?、アンデルセン。」と殺気が多く出た。

ライカは「ダメだ!・・・・・相棒!・・・・・・・・・・・・」とひたすら夏美に叫びこむ。

だが、夏美自身は「・・・俺はワカバの復讐者、もつ、無理だ。」

と同時に小さな声で「めんな?とつぶやいた。

そしてアンゼルセンを見て「許さない!・・・・只で帰れると思つた?俺は絶対に貴様を!・・・

そう言い翡翠刀を手にかけアンデルセンに向かってやれりとした次の瞬間。

「ま、待て！……な、なつ・・み！……」と呼ぶ声がある。

と同時に夏美はその声の主の方に眼をやり、「あ、兄様！……」そう言い急いでオウガの所に行つた。

そして「大丈夫ですか？？？」

オウガはフッと笑い「あ、あア・・何とかな。」

夏美は内心ほつとしたと同時に「ライカ！兄様の大至急手当てを！…！」

ライカは頷きオウガを連れて医務室へと向かつた。

と同時にアンデルセンに再度今度は翡翠刀ではなく雷丸を持ち鞘から抜きながら「、もう一度手合させでも行こうじゃねエか？、神父さんよオ。」

アンデルセンはそれを見て高笑いしてバイオネットを構え始めた。

第19夜。アンデルセンの手でオウガ死す！？その光景を見た夏美  
が怒りの刃を向けた。完。

## 第19夜。アンデルセンの手でオウガ死す！？その光景を見た夏美が怒りの刃を

今章も遅くなりましたが・・大変に無事に更新完了する事が出来ました。

お付き合いで下をこまして有難うござります。

其れではほぼ毎回の？？グタグタ予告をどうぞ。

雷月・・・其れは、昔小十郎からもらつた刀、

夏美は心中で・・・まさか、‘使う日が来るとはね。’‘本当なら使いたくないんだが・・・この男が相手なら仕方ないか。’

そう呟きながらアンデルセンを見て再度「・・・アンタの相手は再度この橘夏美だ。’‘覚悟しろ？’‘いつ出したからには先程と同じ様にはいかねエゼ？’アンデルセンはそれを見て再度ニヤリと笑いながら、‘ヴァイオネットを

持ち夏美に突進して行つた。

そして夏美は雷月を構えて‘轟け！！！！我が雷よ！！！雷神ツ

！！！’

そう言いながらアンデルセンに向かつて雷を落とした。

第20夜。アンテルセンVS夏美！

次章もどうぞ宜しくお願ひ致します。

今章も御付き合い頂きありがとうございました。

第20夜。アンテルセンVS夏美！そして・・雷門。（前書き）

此方も大分ですか更新となりました。

全部の連載に共通しますが・・基本的にネタ浮かび次第の更新となります。

その為中々更新出来ていらないものもあるのかかもしれません、その辺もご理解とご了承のほど宜しくお願ひ致します。

少々サブ変えてみました。

長丁場のまた残酷シーン等ありの予定です。

第20夜。アンデルセンVS夏美！そして・・雷月。

雷月・・・其れは、昔小十郎からもらった刀、

夏美は心中で・・・まさか、‘使う口が来るとはね。’‘本当なら使いたくないんだが・・・この男が相手なら仕方ないか。’

そう呟きながらアンデルセンを見て再度‘・・・アンタの相手は再度この橘夏美だ。’覚悟しろ？’こいつ出したからには先程と同じ様にはいかねエゼ？’アンデルセンはそれを見て再度ニヤリと笑いながらヴァイオネットを持ち夏美に突進して行つた。

そして夏美は雷月を構えて‘轟け！――！――我が雷よ！――雷神ツ――！’

そう言いながらアンデルセンに向かつて雷を落とした。

一方、ライカは医務室でオウガの手当をしていった。

オウガは申し訳なさそうに‘・・・すまんな。ライカ。有難う。’

ライカは首を横に振り微笑んで「お気にせずに。兄様寧<sup>ニ</sup>ひ、御無事で何よりです。」

と同時にオウガもフツと笑い「お前もそしてみんなも無事でよかつたよ。俺も安心した。」

其れを聞いたライカは只只涙を流していた。

一方夏美はと言つと相も変わらずアンデルセンと対峙していた。

雷月を構えてそしてアンデルセンを見て「もう一回喰らいなつ……ただでは帰さないよ……」

と続け様に「喰らえ！穿月！……（うがひづき）……」

あの技を見たセラスは心の中で・・・・・・・・。

あれは、穿月！あの技は奥州会の片倉小十郎の技！どうして夏美さんが？

そしてアンデルセンに喰らわせアンデルセンがひるんだ。

と同時に夏美アンデルセンを見て「此れで終わると思つなよ？鳴神  
！－！」

と続け様に鳴神を喰らわした。

アンデルセンも心の中でセラスと同じことを思つていた。

‘何故、奥州会の竜の右目の技を？この小娘がと。’

夏美はアンデルセンを見て「何故、私がこの技を使える事が出来るのか、不思議な顔」しているな？

其れはな・・・雷月流雷憑依派。事前に・・・「コピーしておいたのさこの刀にな。後、この刀は黒龍の次に最強な刀。片倉小十郎直々に私が昔もらった刀さ。だから・・大体、同じ技を使用する事」が可能なのさ。」とあっけなく言った。

と同時にアンデルセンは夏美を見て「じゃ・・昔片倉の側にいた小娘は、？」

夏美タバコに火を灯し「・・・、言いたくねえがこの私しゃアだよ。」と言った。

と続け様に「だが・・其れは、昔の事」、今は、ワカバに仕える橋夏美だアア、！..

そりつい再度雷月を構えて雷をまといながら「もつ一回喰らえ！..！..鳴神イイイ！..！..！」

雷を渦を巻きもつて一度アンデルセンに向かって放った。

だが、アンデルセンは軽くかわし後ろに向かい、ヴァイオネットを再度夏美に向かって斬りかかった。

と同時に夏美は潔く構え直し、ヴァイオネットを受け止めた。

と同時に共にアンデルセンと一緒にいたハインケルと由美江が驚いた。

夏美はタバコ吸いながら「此れだけで終わると思うなよ?」 そう言いながらヴァイオネットを抑え込みながら「・・・喰らえ!! 雷月流・・・雷月龍神!!」 その技は雷月の最大の技でもあった。

アンデルセンはそれをくらいその場に崩れた。

と同時に夏美は雷月を鞄に収め「・・・少しでも私の今の心の痛みが伝われば嬉しいよ」。 そう言つ

その場を去りうとした。

だが由美江に「くそーよくも神父を……」と襲いかからうとした次の瞬間。

夏美は殺氣を帯びて由美江を睨みつけた。

いつの間にか由美江はその場に崩れ落ちていた。

夏美はそれを確認するとフツと笑い今度こそその場を後にし部屋に戻つて行つた。

第20夜。アンデルセン▽夏美！そして・・雷月。完。

## 第20夜。アンテルセンVS夏美！そして・・雷月。（後書き）

今章も無事に更新完了しました。

遅くなりましたが此処まで読んで頂きありがとうございました。

さてとほぼ毎回ではありますが・・グタグタ予告をどうぞ。

夏美はアレからライカからオウガの手当て終わり無事だと言つ事を聞かされ安心し部屋に戻った。

だが・・・1人の男がいた。

オイオイ・・・ひょっとしてまたこの男か？？

そつ心の中で呟き音でアジトの裏にある洋館にいた男を思い出す。

そして再度警戒し雷月と翡翠刀に手をかける。

と同時にククと笑い声がし「・・・そつ警戒するな橘家本家の小娘。

」

だが、夏美は相も変わらず警戒を解かないすると突然風が一筋吹き夏美が前を見るとその男がいなくてそして何処だと見渡せていると背後からいきなり

抱きつかれ様としたと同時に潔く鞘から雷月と翡翠刀を抜こうとした次の瞬間両腕をいつの間にかひねられていた。

・・何でッ！、あの時卷いたはずなのに！！、

そうその男は前夏美が偵察で行つた洋館に住んでいた男ディーンだつた。

第21夜。アンテルセンとの対峙後の夏美が部屋に戻り再びディーンと再会？

以上です。今章も御付き合いで下さいまして有難うござります。

また次章もどうぞ宜しくお願ひ致します。

## 第21夜。アンテルセンとの対峙後の夏美が部屋に戻り再びティーンと再会？

今章も「」ご覧いただきありがとうございました。

久々の更新となりますか。。年内最後ですね。

此方も長丁場等残酷シーン等ありになつたのですので予め「」と承く  
ださい。

## 第21夜。アンテルセンとの対峙後の夏美が部屋に戻り再びティーンと再会？

夏美はアレからライカからオウガの手当て終わり無事だと言つ事を聞かされ安心し部屋に戻った。

だが・・・1人の男がいた。

オイオイ・・・ひょっとしてまたこの男か？？

そう心の中で呟き、アジトの裏にある洋館にいた男を思い出す。

そして再度警戒し雷刀と翡翠刀に手をかける。

と同時にククと笑い声がし「・・・ そう警戒するな橘家本家の小娘。」

だが、夏美は相も変わらず警戒を解かないと突然風が一筋吹き夏美が前を見るとその男がいなくてそして何処だと見渡せていると背後からいきなり

抱きつかれ様としたと同時に潔く鞘から雷刀と翡翠刀を抜こうとした次の瞬間両腕をいつの間にかひねられていた。

・・何でッ！ あの時卷いたはずなのに！ ！

そうその男は前夏美が偵察で行つた洋館に住んでいた男ティーンだった。

何でいるんだ！？此処に！？クソッ！ こままだと本当に多分

やさしくね！

夏美は抵抗を試みたが・・・ティーンはそれをあざ笑うかのように見ていた。

其れと同時に夏美の首筋にいつの間にかと息がかかつた。

夏美は察知したこのままだと食われる……。

すると夏美の体の周りに炎が舞つた。

ディーンはそれを見て一瞬退く。

と同時に夏美は「・・・悪いね」、の方たち以外に喰われる訳に  
もいかねエんだ。」、そつ言い『ティーンの所から消えた。

『ティーン其れを見てフツと笑い「・・・面白い女だ。」、ますます逃  
がしはしない。』、そう呴いて部屋を後にした。

一方、夏美は廊下で歩きながらタバコを吸い続けていた。

・・・どうして。吸血鬼に狙われるんだろうつねエ私しゃアは。

表と闇の、2つの顔持つからか？？

夏美は苦笑いしため息をつき「・・・さまあねエな。」、と呴いた。

と同時に再度気配を感じた。

夏美は警戒しながら「・・・誰だい？」、其処にいるのは？？

すると「ちょっとちょっと！－－タンマ－－夏さん俺だよ俺－－銀時だ－！」と山崎の嘗ての同族だった

銀時がいた。

夏美は驚いて「ちょ！？銀の田那！？」 そう言い慌てて空いている部屋へと誘った。

高杉達が其れを見ているのも知らずに・・・。

第21夜。アンデルセンとの対峙後の夏美が部屋に戻り再びディーンと再会？完。

## 第21夜。アンテルセンとの対峙後の夏美が部屋に戻り再びティーンと再会？

有難うござります。無事に更新完了致しました。

久々ですね。ちょっと後半は銀さん入りましたが其処は大目に見て頂ければと思います。（一礼笑：）

其れではほぼ毎回ですがグータグタ予告風？をどうぞ笑

此処はワカバの空き部屋。

アレから夏美は銀時と突然の再会を果たし、ばれないようこ・・空き部屋に

呼び込んだ。

夏美小声で「ちょー旦那何しているんですー？此処にはさつきまで  
晋助様達がいたんですよー？」

銀時其れを聞いて驚き「えー？マジでカー？」

夏美額き「オオマジですよー！晋助様はともかく・・土方の兄貴は  
銀の旦那の事狙っています。見つからないように・・逃げる事お勧  
めしますよ。」

と同時に「、特殊ですかね・・吸血鬼に咬まれば自然と吸血鬼化してしまいますからね。」とも付け加えた。

銀時はそれを聞いて軽くため息をつき「・・・吸血鬼化はひとまず今は「」めんだね。」、「俺アもう少しこの状態を楽しみたいのさ」。」と同時に「で？」

「ジミーの奴は？」

夏美はそれを聞いて軽くため息をつき「・・・晋助様と出合つた時にすでに吸血鬼化、されたみたいですよ。」

銀時其れを聞いて「・・・マジでカ。ジミーが高杉に連れ去られたのは分かつたんだが・・・まさか、なつていたとはな」。」そう言い「有難うよ。」と言いすぐに消えた。

夏美はその場でタメ息をつきタバコを再度口に加え直した。

「・・・ヤレヤレ、色々な意味で大変だな。」と呟いた。

夏美「第22夜。夏美と銀時久々の再会。」

「次章もどうぞ宜しくね?」

以上です。有難うございました。

第22夜。夏美と銀時久々の再会。（前書き）

大分ご無沙汰ですか汗

今章はですね夏美が銀さんと再会する所から書かせて頂きます。

昔チイと知り合った仲です。

此方も前章同様に長丁場等予定です。ご了承ください。

## 第22夜。夏美と銀時久々の再会。

此処はワカバの空き部屋。

アレから夏美は銀時と突然の再会を果たし、ばれないようひこ・・空き部屋に

呼び込んだ。

夏美小声で「ちょ！銀の兄さん何しているんです！？此処にはまだつきまで晋助様達がいたんですよ！？」

銀時其れを聞いて驚き「え！？マジでカ！？」

夏美頷き「オオマジですよ！…晋助様はともかく…土方の兄貴は銀の兄さんの事狙っています。見つからないように…逃げる事お勧めしますよ。」

と同時に「特殊ですかね…吸血鬼に咬まれば自然と吸血鬼化してしまいますからね。」とも付け加えた。

銀時はそれを聞いて軽くため息をつき「…吸血鬼化はひとまず今は「めんだね。」俺アもう少しこの状態を楽しみたいのさ」。と同時に「で？」

「ジミーの奴は？」

夏美はそれを聞いて軽くため息をつき「……晋助様と出会った時にすでに吸血鬼化されたみたいですよ。」

銀時其れを聞いて「……マジでカ。ジミーが高杉に連れ去られたのは分かつたんだが……まさか、なつていたとはな」。」そう言い「有難うよ。」と言いすぐに消えた。

夏美はその場でタメ息をつきタバコを再度口に加え直した。

「……ヤレヤレ、色々な意味で大変だな。」と呟いた。

と同時に頭をかきながら「……晋助様達に見つからないといんだけど。」

それと……。

あの、双竜（伊達組）にも。

夏美は、誰もいなくなつた部屋に腰をいつの間にか下ろしていた。

そして、タバコの煙を吐き出していた。

すると、窓の外から雨の音がし始めた。

夏美はタバコを再度口に加え直して外を見て「……雨か。」と呟いていた。

「……そういやア。政宗様達と、最初に会つた日も雨の日だつたつけか？」

「もうすっかり忘れていたよ。」

そう心中で呟きつつタバコを吸い続けていた。

と同時にあぐいが出る。

「眠たくなつたな。」「でもここで寝てしまつたら……。捕まるな。多分。」と苦笑いしながら呟いた。

また捕まるかも知れねーな。と再度苦笑いしながら心の中では呟いた。

たアくもう・・何で私しゃアつていつも吸血鬼達とつながりが深いのかね。

だけど・・・何故かしらないがもう限界だった。

夏美自身はタバコを灰皿にもみ消してソファーに身を預けていつの間にか眠っていた。

すると、小十郎が入つて來た。そして夏美の所に行き横に座つていた。

小十郎はそれを見てフツと笑いながら「・・・無防備丸出しだぜ?  
? 夏美。」と頭を撫でていた。

夏美はくすぐつたそうな顔して「うんと横になつていた。

小十郎はその様子を見て再度フツと笑い頬を撫でていた。

そして寝言で「・・・父さん、母さん。私・・ちゃんと果たせ  
んのかな?」と今は亡き父大樹と母楓に向かつてつぶやいていた。

小十郎はそれを聞いて夏美の髪を撫でながら「……お前工寂しいのか？」

ワカバの末端の頃に約10数年前位に起きた広州とワカバの大戦。

それで橘姉妹は両親を失った。

小十郎は夏美を抱き寄せて「……俺がいる。いや、俺たちがいるだからもう寂しがるな。」と呟いた。

一方、外では山崎が高杉に言われて見張っていた。

「ああ・・彼女に揺さぶりかけるのは結局あの男達なんだな。」  
と呟いていた。

と同時に後は・・・・・「あの欲望の人？」

其れと、ディーン、ジン・・・か。

「まー何にせよ。アレだ。彼女は（夏美さん）高杉さん達の物他の奴らには渡さないんだから。」

すると、高杉から連絡入り戻るよう言われ山崎はとても嬉しそうに高杉の元に戻つて行つた。

其れを1人の男が見ていた。

「いやはや、やはり彼が（山崎）あの男の所にいたのは確かにようだね。」と続け様に歩み出して

「・・・まさか、夏美やライカもいるとは思わなかつたよ。、それで・・・どうするべきか。」

否・・・奪つべき、またいつも言いがえられるね、取り戻すべきか。

いやはや楽しみは吸きないものだな。

「だが、‘その前にあの少年、にも会いに行くか。’

そう咳きながらその男は歩み出した。

男の正体は何と吸血鬼界の梟雄で吸血鬼界の中で最も危険な己の欲望に忠実な人物松永久秀だつた。

一方、その様子を特殊ダムピール界の風来坊前田慶次が見ていた。

慶次は冷や汗かきつつも小声で「・・・間違いねえ。松永さんだ。」と呟きつつじう逃げるかを考えていた。

因みに、久秀が言つていた少年は彼の事である。

その詳細についてはとりあえず不明。

慶次はその場を立ち去つとした次の瞬間。

「おや？ もうお帰りかね？」と久秀の声がした。

慶次はそれを聞いてその場にかたまつてしまつていて後ろを見てしまつた。

すると其処には久秀がいた。

久秀は慶次を見ると楽しそうに笑い、「『きげんよう。少年。久しいね。』」と言つた。

慶次は心の中で・・・。ああ、どうして思い通りにいかないのだろう？会いたくないと思つていた人に

会つてしまつた。

逃げよう。此処にいるとまずい。と恥きつつも逃げようとしたがあつという間に久秀に腕を掴まれて

「せつかくの再会だ。そつも逃げなくとも良じだらう。」とニヤリと笑いながら慶次を見て言つた。

第22夜。夏美と銀時久々の再会。完。

## 第22夜 夏美と銀時久々の再会。（後書き）

有難うござります。無事に更新完了致しました。

最後には銀さんとはあまりかかわらない御話になってしましました  
が苦笑；

其処は大目に見て頂ければ幸いです。

其れではほぼ毎回のグタグタ予告風をどうぞ。

ああ・・会つてしまつた。俺の、いや・・俺達の亀裂を生んでそ  
して、

俺の心の中にある深き闇をつくりてしまつた人に。

すると久秀は慶次を見てフツと笑い「卿にしては珍しい。抵抗しな  
いのかね？」と聞いた。

慶次はそれを聞いて久秀をまるで睨みつけるかの様に「抵抗しても  
どうせ逃がしてくれねえんだろ？」と聞きなおした。

久秀はそれを聞いてククと楽しそうに笑い「、良く分かつてるじゃ  
ないか。

そうだよ。逃がさないよ。卿はあるの日、あの時私と出会つてからす  
でに私から逃げられない運命のだよ。」諦めたまえ。少年。」そう  
言いながらいつの間にか後ろに素早く周り慶次の首に手刀を入れ氣  
を失わされた。

そして慶次の体を抱えて再度ククと笑い、「新しい闇の世界によ  
うござ。少年。」と楽しそうに咳きつつ「私がまた卿の中にある私  
がいた深き闇を育ててあげよつじやないか。」いやはや・・・樂  
しみは尽きないものだ。

そう再度咳きつつも歩みながら闇の中に消えて行った。

一方、その様子を遠田で見ていた夏美のクノーメグナがいた。

メグナは冷や汗かきつつも「ありや・・松永の旦那さんじやないの  
や。」ヤバいぞ。もし、私しゃア様の勘とライカの姉さんの勘が正しけれ  
ば間違いないく近いうちに姉さん達に会いに来るよ。此れまた大  
変だ。

ひとまず報告と消えよつとした次の瞬間・・。

「よオ。誰かと思えばメグナじやねえか。」と低い男の声がした。

メグナはそれを聞いて驚き後ろを見ると其処には土方がいた。

メグナは冷や汗かきつつから笑いをして「あら~。これまたどうも。  
誰かと思えば土方の旦那さんじやないの。」と言つた。

土方は楽しそうにメグナを見て「久しいじやねえか。元氣そつで安  
心したぜ?」と言つた。

慶次「第23夜。特殊ダムピール界の風来坊前田慶次ワカバのビル  
の路地裏で現れてそして・・・。」

「次章もどうぞ宜しくね。」

以上です。此処までご覧頂いて有難うございました。

## 第23夜 特殊ダムピール界の風来坊前田慶次ワカバのビルの路地裏で現れて

今章も「」覽頂きありがと「」ぞります。

今章では主に前田さんが出てきます。（尚此方では特殊ダムピールと詰り設定なので「」を承下さー。）

ほぼ毎回ですが残酷シーン等ありの長丁場の予定です。

「ラボ要素が含まれます。苦手な方はお引き取りされた方が宜しいかと思います。

松永さんも出ます。

尚後半から幼い夏美が出ますので会話はひらがなになると思います。その辺も了承して下さい。（今とそして子供のころをあえて分かりやすくするために。）

其れはどうぞお楽しみくださいませ。

## 第23夜 特殊ダムピール界の風来坊前田慶次ワカバのビルの路地裏で現れて

アレから、‘散歩を楽しんでいた慶次はワカバのビルの路地裏に密かにもぐりこんでいた。’

そうしたら何と、‘過去との再会を偶然にも果たしてしまつ。’ 其れも望まない再会を。

ああ・・会つてしまつた。俺の、いや・・俺達の亀裂を生んでそして、

俺の心の中にある深き闇をつくつてしまつた人に。

すると久秀は慶次を見てフツと笑い‘卿にしては珍しい。抵抗しないのかね?’と聞いた。

慶次はそれを聞いて久秀をまるで睨みつけるかの様に‘抵抗してもどうせ逃がしてくれねえんだろ?’と聞きなおした。

久秀はそれを聞いてククと楽しそうに笑い‘‘良く分かってるじゃないか。

そうだよ。逃がさないよ。卿はあの日、あの時私と出会つてからすでに私から逃げられない運命のだよ。’ 諦めたまえ。少年。’

そう言いながらいつの間にか後ろに素早く周り慶次の首に手刀を入れ氣を失わされた。

そして慶次の体を抱えて再度ククと笑い、「新しい闇の世界によつて」。少年。」と楽しそうに呟き

つつ「私がまた卿の中にある、私が入れてあげた深き闇を育ててあげよつじやないか。」

いやはや・・楽しみは尽きないものだ。

やつ再度呟きつつも歩みながら闇の中に消えて行つた。

一方、その様子を遠田で見ていた夏美のクノーメグナがいた。

メグナは冷や汗かきつつも「ありや・・間違いない松永の旦那さんじやないのや。

ヤバいぞ。もし、私しゃア様の勘とライカの姉さんの勘が正しければ間違いくらいに姉さん達に会いに来るよ。」

此れまた大変だ。ひとまず報告と消えよつとした次の瞬間・・。

「よオ。誰かと思えばメグナじやねえか。」と低い男の声がした。

メグナはそれを聞いて驚き後ろを見ると其処には土方がいた。

メグナは冷や汗かきつつから笑いをして「あら。これまたじつも。誰かと思えば土方の旦那さんじやないの。」と言つた。

土方は楽しそうにメグナを見て「久しいじゃねえか。元気そつで安心したぜ?」と言つた。

メグナは手に顔をやりながら心の中で・・・松永の旦那さんの情報は少なからず入つていたけど、

土方の旦那さんに関しては入つて来ていなかつたな。ああ〜一応クノ一なのに私しゃア様何してるんだろうね。と苦笑いしながら呟いていた。

すると、一風が舞つた。其処に黒ずくめのスーツを着たオレンジ色の髪の男がいた。

メグナはそれを見て慌ててクナイを取り出し「あ、貴方は確か風魔の旦那さん!――」

土方もそれを見て驚いた。

・・・! オイオイ、風魔だと! ? 冗談だろ? ?

すると風魔は行き成りメグナに対して斬りかかつた。

メグナもクナイで応戦する。

と同時に風魔は風を起し応戦した。

メグナはそれを受けて壁に激突してしまった。

メグナは軽く舌打ちして前を見て「…私しゃア様とした事が様無いね汗」

と同時にさりに風魔はメグナに突進して斬りかかってきた次の瞬間

ガキイイインとメグナをかばつよつに夏美が出てきた。

メグナはそれを見て「…夏美の姉さん…！」

夏美はタバコに火を灯してフツと笑い「よう。メグナ！」苦笑を。とさらに続けて

「お前さんはひとまず戻つてな。」

メグナ其れを聞いて不安そうな顔しながらも領きその場をすばやく後にした。

夏美はそれを確認して再度風魔を見てフツと笑いながら「悪いね。

風魔の兄さん、チイと今度は私しゃアの相手頼むよ。」

風魔はそれを聞いた途端素早く分身を作り夏美を囮んだ。

夏美はそれを見てタバコを加え直して苦笑いして「あーあ、分身かい。しゃあねえな。ま・・やるしかねえか。」そう言い翡翠刀を鞘に納めて片手で印を結びヒュウッと息を吹きかけた。

すると夏美自身も分身になつた。

「・・火炎風拳火炎風分身術。」と同時に「火炎龍弾派！…！」と風魔に向けて攻撃した。

火炎が龍の形をしてそして弾の「」と舞いそして風魔は壁に激突してそのまま消えた。

夏美はそれを確認すると素早く分身を解いてその場を後にしようとした。

すると土方に声かけられた。

夏美は其れを聞いて苦笑いして足を止めるが・・チラッと見て「またね。兄貴。」そう言い今度こそその場を去つた。

土方はそれを見てニヤリと笑い「俺等から逃げ切れるとでも思つのか？夏美。」そう呟きその場を後にした。

一方、その場から離れてワカバのアジトに戻ろうとした次の瞬間。

ヒュツ・・・と火薬がまかれる音がした。

と同時に指を鳴らす音がして、夏美の周りを炎が包み込んだ。

夏美は驚いて慌ててタバコを消した。

夏美は此れに見覚えがあつた。

幼少の末端の頃の記憶。

ある日の夜、ワカバを追つていた。広州の子組織のアジトが燃えていて周りが炎に包まれていた。

当時の夏美。

—此れ、どうなつてゐるの？？ -

“び‘ひして、もえているの？？”

「あむと後ろから……やあ。夏美じゃないか。び‘ひしたのかね？」

夏美はその声を聞いて一久秀様、ワカバの命令で私、一久しうの  
こそしきのようすをみにきたんです

そうしたら、もえていました。と不<sup>安</sup>たうに言つ。

久秀は夏美の隣に来て頭を撫でて、卿のせいでは無いよ。だから  
そんなに深く考へる必要もない。

敵なのだろう？敵の事まで想う必要などないのだよ？

その事を聞いた幼き頃の夏美。でも、せつかくいたいだいた あ  
にさま（オウガ）のおじいとをはたせなかつたです。

久秀はそれを聞いて心の中で。。。

なるほど・・卿は純粋なんだね。両親と同じ道をえて進むか。  
いやはや、結構結構。

だがね・・夏美。私から見れば申し訳ないがワカバのやる事は、偽  
善、にしか見えないのだよ。

だから・・卿には教えてやるとしよう。その願いと想いがどれだけ虚しいのかを・。そして、ワカバより広州とやらの方がいかに、欲望に対して純粋な事だと教えておいてあげよう。

後・・私の手元にじっくり、今の心を壊しそして此方に墮としてあげよう。

夏美はふと心配そうに・・・久秀様?どうしたなんですか?

久秀はフッと笑い夏美の頭を再度なでてーいやはや、何でもないよ。卿が気にする事もない。ー

さてはて、もう一度上げるとしようか・・・綺麗な花火をね。

其処で夏美の回想終了。

「・・火薬か。の方しかいねえな。」と軽く舌打ちした。

すると炎の輪の中に1人の男が入つて來た。と同時に夏美を見て「やあ。『じきげんよう。久しいね夏美。』と眼の前に久秀が立つていた。

夏美は両手を見開き驚きながら「・・・久秀様。」と呟いた。

いや・・参ったね。

すると、久秀は夏美の内心をまるで見透かしたかのように・・火の中に入り夏美の前にいつの間にか立っていた。

そして驚く夏美をよそに頬を撫でて「・・・私から逃げ切るとでも思つてゐるのかね？」

と楽しそうに言つた。

ああ・・ヤバい事になつたな汗。‘会つてはいけない人にまた会つてしまつた。’

どうして・・・そつとしておいてくれないの？何で、ワカバの宿命<sup>サダメ</sup>のまま生かしてくれないの？

ああ・・面倒事になつたな。冷静でいようと思つの「どうやらい」の人の前ではその冷静<sup>メンテ</sup>だ

も無意味だ。

夏美は軽く舌打ちして覚悟を承知の上で炎の輪に突入して其処の輪から脱出した。

と同時に咳き込んだ。

参つたね。そろそろワカバに戻らないとね。と呴いた次の瞬間後ろから首に痛みが入つた。

そして夏美の意識はゆっくりと内心しまつたと呴きながら落ちて行つた。

久秀はフツと笑い「油断大敵、だつたね。夏美」そう呴きながら氣を失つた夏美の体を抱き起こしながら「さて、あの少年と共に久々な再会を祝おうじゃないか。」と言しながら歩き出して再度闇に消えて行つた。

其れと同時に一つの紫色の月のペンダントが落ちていた。

夏美の様子が気になつたライカが慌てて夏美がいた所に走つて着いた。そして其れを見て広い軽く舌打ちして「・・どうやら、久秀の旦那さんにかつさられたらしいな。」

無事でいてくれよ？相棒。そして、ライカはひとまずワカバに戻つた。

第23夜。特殊ダムピール界の風来坊前田慶次ワカバのビルの路地裏で現れてそして・・・。完。

第23夜 特殊ダムピール界の風来坊前田慶次ワカバのビルの路地裏で現れて

「観覧頂きありがとうございます。」

遅くなりましががほぼ毎回の予告風をどうぞ。

此処は、某所にある黒ビルの3階。

其処は久秀の隠れ家でもあった。

慶次そして、夏美はアレから久秀に攫われて此処で寝かされている。

因みに、3階には右と左に部屋が分かれている。

右が慶次、そして、左が夏美だ。

目が先に覚めたのは慶次だった。

辺り見渡して、窓を見ると、外はすっかり暗くなり紅い月が出ていた。

すると、慶次の額から知らずに汗がかけていた。

特殊ダムピールは、紅の月になると異様に、喉の渴きに、襲われるのだ。

そして、血が欲しくなる。

慶次は、慌ててベットに座りこみ血液錠剤タブレットを取り出し飲み始めた。

すると、背後から「御用覚めかね？少年？」と久秀の声がした。

と同時に振り向く否や何時の間にか久秀にベットの上で押し倒されていた。

慶次は、最初は抵抗するが無駄に終わった。

其れをよそに、久秀は自分の左手親指を咬んで血を流す。

其れを見た慶次はまるで、もの欲しそうな顔をしていた。

久秀はそれを見てフツと笑い「・・・卿の望むままに欲しがればいい」。

と言いながら慶次の口に持つていく。

最初は躊躇していた慶次も、血の匂いに抗えずに久秀の左手親指を口に含んで飲み始めた。

その様子を見た久秀は満足そうに慶次の頭を撫でて「、欲望のまま赴くと良い。それが本来の姿なのだよ？人間もそして吸血鬼、ダムピール、（我々）もね。」と言い聞かせた。

一方、此処は左側の夏美の部屋。

夏美は、夢の中にいた。

そして、久秀とは別のあの男の声が聞こえる。

「お前は、怜と同じく私のものだ。私から逃げ切ると思つたよ？」

橋本家の小娘。

と同時に田が覚めてベットから飛び起きた。

そして、頭を抱えて「・・・夢か。」

と同時に「・・・ティーンさん。」

貴方は私の何を知つてゐるんです？と心の中で呟いた。

慶次「第24夜。吸血鬼界の梶雄、松永久秀の隠れ家で日が覚める慶次と夏美。そして夏美が見た夢・・・」

「次章もどうぞよろしく頼むよ。」

以上です。

有難うございました。

第24夜。吸血鬼界の梶雄、松永久秀の隠れ家で日が覚める慶次と夏美。そして

有難うござります。

今章は前章の続きみたいなものです。

長丁場の残酷シーン（残酷言葉）等あり予定ですの再度予めご了承願います。

第24夜。吸血鬼界の梶雄、松永久秀の隠れ家で目が覚める慶次と夏美。そして

此處は、某所にある黒ビルの3階。

其處は久秀の隠れ家でもあつた。

慶次そして、夏美はアレから久秀に攫われて此處で寝かされている。

因みに、3階には右と左に部屋が分かれている。

右が慶次、そして、左が夏美だ。

目が先に覚めたのは慶次だつた。

辺り見渡して、窓を見ると、外はすっかり暗くなり紅い月が出ていた。

すると、慶次の額から知らずに汗がかいいていた。

特殊ダムピールは、紅の月になると異様に、喉の渴きに、襲われるのだ。

そして、血が欲しくなる。

慶次は、慌ててベットに座りこみ血液錠剤を取り出し飲み始めた。

すると、背後から「御目覚めかね？少年？」と久秀の声がした。

と同時に振り向く否や何時の間にか久秀にベットの上で押し倒されていた。

慶次は、最初は抵抗するが無駄に終わった。

其れをよそに、久秀は自分の左手親指を咬んで血を流す。

其れを見た慶次はまるで、もの欲しそうな顔をしていた。

久秀はそれを見てフツと笑い「……卿の望むままに欲しがればいい。」

と言いながら慶次の口に持つていく。

最初は躊躇していた慶次も、「血の匂いに抗えずに久秀の左手親指を口に含んで飲み始めた。

その様子を見た久秀は満足そうに慶次の頭を撫でて「、欲望のまま赴くと良い。それが本来の姿なのだよ？人間もそして吸血鬼、ダムピール、（我々）もね。」と言い聞かせた。

一方、此処は左側の夏美の部屋。

夏美は、夢の中にいた。

そして、久秀とは別のあの男の声が聞こえる。

「お前は、怜と同じく私のものだ。私から逃げ切れると思つなんよ  
？」

橋本家の小娘。

と同時に田が覚めてベットから飛び起きた。

そして、頭を抱えて「……夢か。」

と同時に「……ティーンちゃん。」

貴方は私の何を知つているんです?と心の中で呟いた。

そして、夏美は懐からタバコを取り出し火を灯し始めてタバコを吸い始めた。

「卿も御田覚めの様だね。」と後ろから声がした。

夏美は、その声を聞き慌てて携帯灰皿にタバコをもみ消した。

そして「・・久秀様。」と久秀に向かつて言つた。

久秀は夏美に近づきながら「やあ。夏美。」と頬笑みながら言つた。

夏美は、久秀に一礼してベットから立ち上がり窓に向かつて歩き出した。

其れも無言のまま・・。

そして、窓を見た。其処には、珍しい組み合わせが。今まで紅の月だけだったのが、普通の満月も

出ていたのだ。

すると夏美は其れを見て「・・・、満月か。」何時の間に出てきたんだ?

そして、左ポケットから一つの赤い龍の小さなペンダントを取り出し開けた。

其処には、嘗ての姉妹分同士だった若き日のメイランと夏美の写真が入っていた。」

「・・光よ、光よ、光の国。光のゴミゴーティ・・護りたまえや。」

と同時に窓を見ながらそのペンダントを顔の前に出し握り締めていつの間にか知らぬ間に涙を流しながら

「女々な。」と同時に「・とんだ茶番だ。」

・・なあ、メイラン何で私しゃアは、アンタが私しゃアと同時に捨てたあそこを今でも護りうつとしているんだ?

陽光ヨウコウ

其れと同時にメイランに撃たれた過去の銃弾の古傷が痛んだ。

すると、いつの間にか久秀が夏美の後ろにいて抱きしめていた。

夏美は一瞬驚いたが、いつの間にかなすが成されるままになっていた。

そして、いつの間にか久秀の手が夏美の眼の所まで来ていつの間にか夏美の涙を指先で拭っていた。

夏美は、只黙りつづけていた。

久秀は、いつの間にか夏美のタバコをもみ消して吸いがらを「み箱に捨てて夏美を抱き寄せた。

と同時に、夏美は赤い月のペンドントを左ポケットの所にしまい、もう一つ持っていた紫の月のペンドントを探したが・・何処にも見当たらなかつた。

内心舌打ちして・・多分何処かに落としたのかもしれないな。と呟いた。

やれやれ・・参つたね。あら、私にとつちやあ大事なもんだからな。

すると、行き成り、痛みが夏美を襲つた。

夏美は驚きつつ、痛みの所に田線をやる、すると二つの間にか、久秀に咬まれて血を吸われていたのだ。

‘痛みと同時に押し寄せる快樂’

・・クソ。私しゃアとした事がざまあないね。

申し訳ありません。兄様！すまねえ・・相棒達。じつやう、‘私し  
やアは此処までの様だ。’

ごめんな？有理。

姉さんは、もつわらそろ多分、此処までだ。’

と同時に夏美自身の意識が失つた。

久秀は、‘其れを感じたのか夏美の首筋から牙を抜き取りながら、  
倒れかかるうとする夏美の体を支えて

フツと笑い「・・じつやう、その様子だと少し頂きすぎたかな？」  
と笑つて言つた。

そして、再度ベットに寝かせて夏美の頭を優しく撫で「・・せひ、  
‘卿には何を『え』あげてそして何をもらひつか。’と楽しそう  
に呟いていた。

すると夏美は、いつの間にか意識を取り戻しつつも途切れ途切れつ  
つも「・・た、頼むから。も、もう・・此れ以上奪わないで。’

此れ以上奪われたくない！そう叫びながらも自身の首筋に左手をやり血を補給させてベットからフラフラとしながらもその部屋を後にしようとするが、また久秀によつて止められた。

そして夏美は、いつの間にか悲しそうな顔をして笑い「……どうせ、久秀様も私から大切なものの奪うつもりなんでしょう？」と言つた。

久秀はそれを見て、只黙つてしまつていた。

其れを見て夏美は、久秀の所をすり抜けるかのように、久秀はそれを再度止めよつとしたが……。

‘いつの間にか夏美は消えて行つた。

久秀は、その光景を見て‘……驚いたよ。夏美。まさか、卿のその様な瞳を見る事にならうとはね。’

‘……私は、卿から、何も奪うつもりはないのだよ？’‘只、あの少年と同じ様に卿には側にいて欲しいのだよ。’

と、‘普段誰も見た事のない様な悲しき表情で見てそして呟いていた。’

一方、夏美はワカバ方面の路地裏にいた。

そして、いつの間にか壁に身を預けていた。

何時もの様に、タバコに火を灯す。同時に小さな手鏡を取り出した。久秀に咬まれた首筋の後を見た。

そして、知らぬ間に触った。

タバコの煙を吸いながら無言のまま手鏡をとりあえずしまつ。

そして、蝙蝠の鳴く声が知らぬ間に聞こえて上を見る。

空は、どす黒かった。何時もの様なすんだ夜の色ではなかつた。

夏美はそれを見て「・・・アレは、まさか、黒渦、？」

すると、幼少のころの記憶を再度駆け巡つた。

ある日の夜久秀とあつた時の会話。

幼少の頃の夏美『久秀様。あれはなんですか?』

久秀は、幼少の頃の夏美に近づき『ん? 何がだね?』

幼少の頃の夏美は空を見ながら『まんげつのところに、おおきな  
くろいづ、がまわりをかこんでいます。』

久秀は其れを聞いて空を見た。するとフツと軽く笑い『・・・卿は  
まだ幼すぎる故この話しさ酷かもしけんが、いすれ、成長になるに  
つれて分かるかもしえないからね。』教えてあげよう。』

と同時に、幼少の頃の夏美をもつと見やすい様に肩車をして『あれ  
は、‘黒渦’と言つのだよ。』と同時に『・・・あれが出た時は、  
人がどこかで死ぬのだよ。』

その事を聞いた幼少の頃の夏美は不安そうな顔して其れを見ていた。

久秀はそれを見て幼少の頃の夏美を自身の腕の中に抱き寄せてなが  
ら頭を撫でて『・・心配せずとも良い。死ぬのは卿ではないのだら  
ね。』

幼少の頃の夏美はただそれを黙つて聞いていた。

回想終了。

夏美は思い出したかのよつに軽く舌打ちして「・・・そつかー・アレは黒渦だ。今思い出したぜーークソーー頼む相棒たち無事でいてくれよーーーー！」

すると男の声の叫び声がした。夏美は思わずそちらの方面に走つて行つた。

すると1人の男が血だらけになつて倒れていた。

夏美は急いで確認すると「・・・ーーーー」いつは特殊討伐教会の下つ端ーーー?何でーー?「

となると、特殊討伐教会の連中がこの辺にいるつて事か?

と同時に戦う音がする。

夏美は急いでその場に走つて行つた。

此処は、ワカバの一応管轄内もあるからな。好き放題にやらせてたまるかってんだ。

「『』、『』、『』は化けもんだ！……」と慌てて男の声がした。

と逃げる音がある。

「、『』の私から逃げられるとでも思つてゐるのか？」とまた男の声  
がする。

その声は夏美にとつて、聞き覚えのある声だった。

オイオイ・・本氣かよ？あの男（ヒト、『ディーンさんか？』<sup>マジ</sup>）

とつあえず、引き上げた方が良いかもな。

すると、行き成り蝙蝠の大群が夏美に襲つてきた。

夏美は慌てて「クソ！…蝙蝠か！…！」急いで印を結び「火炎風拳  
！火炎風烈風弾！…！」と技を出し

蝙蝠の隊群を焼き払つた。

其れと同時に血の匂いがした。

夏美は軽く舌打ちしてタバコに火を灯し「……血の匂い、か。どうも、‘未だに慣れんな。’ 血の匂いは……あの頃の私の思い出す。’ そして続け様に‘…隼人。’ と小声で呟いた。

嘗ての想い人そして、嘗ての婚約者の名を。

そして空を見て夏美は苦笑いして「…ねえ。隼人。未だに、‘過去に蹴りを中々つけれない私を貴方は

どうみていろのかしらね？’ と悲しそうに呟いた。

すると、いつの間にか前にディーンが現れていた。

夏美はそれを見て驚いていた。

クソ……。何時の間に！？ 汗。不味いぞ・・不味いぞ。

すると、その様子を見ていたディーンがゆっくりとだが夏美の所に向かって歩き出した。

夏美は引きさがる。そして後ろには何といつのか久秀がいた。

「ワーオ！！前に、ディーンさん、後ろに久秀様。私しゃア様ひよつとして絶体絶命？ツて奴？いやはや

参ったね。と心中でどついていた瞬間・・・。金色の長髪をして、全身赤紫のチャイナドレスを来て

いた女が夏美の前にふと現れた。

夏美はそれを見て両手で見開いて驚き「・・まさか。」

# 愛凜？ アイリン

愛凜。特殊純血の女吸血鬼。彼女も幼少の頃の夏美を知っている。

と同時に夏美自身も探していた。

愛凜が通つていた所を慌てて追いかけて「待つて・・・！待つて・・・！愛凜！」と叫び続けながら歩い皇とした次の瞬間携帯に電話がかかつて来てライカから広州からのワカバへの襲撃の一報が入る。

夏美はそれを聞いて軽く舌打ちして慌てて分身術をつくりその場を回避した。

ディーンはそれを見てフツと笑いながら「・・逃げたか。」まあ・・いいさ。今度会つた時には必ず手に入れてやる。

すると、爆発音がなつた。久秀も、ディーンもその爆発音に眼をやつた。

其処には傷だらけの夏美がいた。

「ちいくしょう！――よりによつてお前さん達か！――」とタバコに火を灯しながら言つた。

すると討伐教会の幹部達が夏美の前に現れていた。

・・ちいくしょう。すっかりアレだな相棒ライカの言い分通りになつちまつたな。

さて・・どうするか。

すると、討伐教会の幹部の1人が夏美を見て「橘夏美。貴様に聞きたい事がある。愛凜といつ女は何処にいる？」

夏美はそれを聞いて眉しかめて「……それを聞いてどうするつもりだ？」

幹部はそれを聞いて「……我々討伐教会に引き入れる。あの女は、力がすごいからな、」

夏美はタバコを吸いながら「……そして、ダムピール特殊をほぼ一人残らず壊滅するってか？」

幹部はそれを聞いてニヤリと笑い「……流石だな。察しが良い。流石は、炎龍」と呼ばれた事があるな。」

夏美其れを聞いて再度フンと笑いながら「……んなの。とうの昔に捨てた名だ。」と同時に「すまんが、私にもある人の、居場所分からんのよ。」

幹部はそれを聞いてフンと笑いがえして「そうか、なら……貴様にはもう用は無い。」指鳴らし

討伐教会の幹部連中を出した。

「そいつを始末しろ。後が厄介だ。」と命令した。

すると、そいつらは一斉に夏美に向かつて攻撃仕掛けた。

夏美はそれを見て軽く舌打ちして火炎風拳で応対した。

その様子を久秀達を始め愛凜が見ているのにも気づかず。

第24夜。吸血鬼界の梶雄、松永久秀の隠れ家で目が覚める慶次と夏美。そして夏美が見た夢・・・完

## 第24夜。吸血鬼界の梟雄、松永久秀の隠れ家で目が覚める慶次と夏美。そして

「ご観覧頂き感謝致します。

無事に更新完了致しました。ありがとうございます。

其れでは、予告風をどうぞ・・・。

アレから、久秀達と再会した夏美は討伐教会の一部幹部達の襲撃を受ける。

その目的は何と愛凜の探しの事だった。

夏美自身も探していた故、知らなかつた。

だが、その事を言つとまるで、興味、を失つた様に一斉に攻撃を夏美自身にしかけた。だが・・夏美自身も負けずに火炎風拳で応対する。

しかし・・・先程の爆発に巻き込まれたせいか傷が疼き思う様にいかない。

それでも、立ち直りながら攻撃仕掛けた。

その様子を見て幹部のある一人が「ええい！この、くたばりぞこないめ！、良い加減くたばれ！！！」そう言い夏美に向けて刃を振り下ろした次の瞬間。

ガキイイイイイイイイイン！！！と音がした。

その前には何と薙がいた。

夏美はそれを見て「あ、茜！？」

茜は夏美を見て「夏美様。ご無事で何よりです。」のような状態でご挨拶する事をお許し願いたく思います。実は、ライカ様から「命令を受けて参ったのです。」と頬笑みながら言った。

と同時に「『J命令を！夏美様！』！」

夏美はそれを聞いてニヤリと笑い「・・・、壊滅を許可する。行け。

1

茜は頷き「御意！！！」そして少し引き刀を再度鞘に戻して神経を高ぶらせて「・・夏美様方の御許可のもと。アンタ達を壊滅する。夏美様に刃を向けた事を後悔するが良い！！！」そう言い一斉に再度刀から鞘を抜き討伐教会の幹部連中に向かつて斬りかかつた。

夏美はそれを見て、タバコを再度取り出しながら火を灯し「……  
流石茜だ。仕事早いな。」と呟いた。

すると「相棒オオオオオオオオ！？何処だ！？何処にいる！？」とライカの声がした。

茜「第25夜。夏美と茜VS討伐教会（一部）幹部。そして・・・。

「次章も夏美様！読む御許可を私にイイイイーー！」

以上です有難うございました。

」

第25夜。夏美と茜VS討伐教会（一部）幹部。そして・・・（前書き）

「観覧頂もありがとうござります。

今章は前章の続きみたいなもので。

残酷シーン等あつ予定ですのぞめご承下さい。

（もちろん編集可能性もあり）

第25夜。夏美と茜▽S討伐教会（一部）幹部。そして・・・。

アレから、久秀達と再会した夏美は討伐教会の一部幹部達の襲撃を受ける。

その目的は何と愛凜の探しの事だった。

夏美自身も探していた故、知らなかつた。

だが、その事を言つとまるで、興味、を失つた様に一斉に攻撃を夏美自身にしかけた。だが・・夏美自身も負けずに火炎風拳で応対する。

しかし・・・先程の爆発に巻き込まれたせいか傷が疼き思う様にいかない。

それでも、立ち直りながら攻撃仕掛けた。

その様子を見て幹部のある一人が「ええい！」の、くたばりぞこないめ！、良い加減くたばれ！！！」そう言い夏美に向けて刃を振り下ろした次の瞬間。

ガキイイイイイイイイイン！－！－！と音がした。

その前には何と茜がいた。

夏美はそれを見て「あ、茜！？」といつて！？

茜は夏美を見て「夏美様。」無事で何よりです。このような状態でご挨拶する事をお許し願いたく思います。実は、ライカ様から「命令を受けて参ったのです。」と頬笑みながら言つた。

と同時に「」命令を！夏美様！！！」

夏美はそれを聞いてニヤリと笑い「・・・壊滅を許可する。行け。」

」

茜は頷き「御意！！！」そして少し引き刀を再度鞘に戻して神経を高ぶらせて「・・・夏美様方の御許可のもと。アンタ達を壊滅する。夏美様に刃を向けた事を後悔するが良い！！！」そう言い一斉に再度刀から鞘を抜き討伐教会の幹部連中に向かつて斬りかかった。

夏美はそれを見て、タバコを再度取り出しながら火を灯し「・・・流石茜だ。仕事早いな。」と呟いた。

すると「相棒オオオオオ！！何処だ！？何処にいる！？」とライカの声がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8922/>

（銀魂。）隻眼の吸血鬼とある地味な少年との出会いのその後。

2012年1月8日22時51分発行